

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和25年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001178

昭和25年度
国立国語研究所年報

— 2 —

國立國語研究所

1951

目 次

はじめに	西尾 実	1
昭和25年度研究のあらまし		3
山形県鶴岡市および附近の農村における言語生活調査		7
言語調査		
パーソナリティの調査		
マス・コミュニケーションの調査		
学校における共通語指導状態の調査		
長野県飯田市および上久堅村における言語生活調査		35
福島県白河市および附近の農村における言語生活の		
実態調査の集計・分析		44
各地方言の調査		47
全国方言語彙の調査		58
現代書き言葉の調査研究		60
現代語の助詞・助動詞の調査研究		
新聞語彙の調査研究		
婦人（生活）雑誌の語彙の調査研究		
国語学力標準設定に関する調査研究		70
義務教育終了者に対する語彙調査の試み		95
個人差に応じた国語学習指導方法の研究		108
文字配列の合理化に関する実験的研究		119
マス・コミュニケーションに関する研究		127
放送言語理解尺度設定の基礎的研究		
読紙作業の実験的研究		
国語の歴史的発達に関する調査研究		136

辞典の編集方法に関する調査研究	137
国語関係文献の調査	138.
図書の収集と整理	140
庶務報告	145.

はじめに

この「年報」2は、われわれの研究活動における第二年目にあたる、昭和25年度の調査・研究の概要をまとめたものである。

われわれの研究課題は、

1. 現代の言語生活および言語文化に関する調査・研究
2. 国語の歴史的発達に関する調査・研究
3. 国語教育の目的・方法および結果に関する調査・研究
4. 新聞における言語、放送における言語等、同時に多人数が対象となる言語に関する調査・研究

であるが、昭和25年度では、このうちの、「国語の歴史的発達に関する調査・研究」は、予算的にその定員が認められていないために、他の三課題を中心に、研究部の定員を2部4室1資料室に組織し、第1部は現代語の調査研究を、第2部は国語教育と新聞・放送の用語に関する調査研究をという立て前をとり、さらに各研究室に分れて仕事を分担した。

それぞれの部室の担当に関する調査・研究の概要は、それぞれの担当者によって報告せられているが、この研究所の全体的な歩みとしては、前年度來の調査・研究を前進させつつ、それを「国語の合理化の確実な基礎を築く」という研究目的に集約するためには、われわれの研究活動に、どういう整理と改善を加えるべきであるかという努力を加え、その成果をあげつつある。

「研究報告」としては、昭和24年度刊行の「八丈島の言語調査」につづいて、本年度においては、研究報告2として「言語生活の実態—白河市および附近の農村における—」と、研究報告3として「現代語の助詞・助動詞一用法と実例一」とを刊行することができた。そのうちの「言語生活の実態—白河市および附近の農村における—」は、その調査が文部省の「試験研究費」を受

け、さらにその刊行は、文部省の「科学研究成果刊行補助金」の交付を得たものである。そのほか内外の学者や研究機関から感想や批判が寄せられていることは、われわれの研究活動にとって、多大な激励となっている。あわせて感謝の意を表する。

このような特定地域の調査や特殊問題の研究は本年度においても進められているので、明年度においてもつづいて「研究報告」としてまとまる予定であるが、各研究の中心課題に関する研究成果の報告は、継続的な調査・研究を必要とするので、まだ研究報告として公にする域に達していない。この年報において、それぞれ中間報告をしているしたいである。なお、全国各地に及ぼうとしている地方調査員の充実と、各地における調査員の調査も前進している。これは、所員の全国主要地点に関する言語生活の実態調査と相待って、全国の国語研究者の協力による調査研究を組織的に進め、歴史的・社会的課題としての国語問題解決の重要な礎石を築く有力な一環を成すであろう。本年度においては、そういう方向をとって出発することができたことを、付言して将来を期するしたいである。

国立国語研究所長 西 尾 實

昭和25年度の調査研究のあらまし

昭和25年度は国立国語研究所が実質的に調査研究をはじめてから第二年目の年である。前年度においては、研究機構の整備、研究方法の探求に苦心しながら、調査研究を実施して来たが、昭和25年度には、この前年度の成果と、一年間のいろいろの経験に基づいて、研究項目を定め、同時に研究機構に一部の修正を加えた。本年度の研究機構は次の通りである。

第一研究室

中村通夫（主任） 柴田武 飯豊毅一 北村甫
島崎稔 石川咲子 山之内るり
金田一春彦（非常勤） 島袋盛敏（非常勤）

第二研究室

林 大（主任） 永野賢 大野彌穂子 斎賀秀夫
宇野義方 水谷静夫 古田東削（非常勤）

第三研究室

平井昌夫（主任） 上甲幹一 塩入元義（10月31日より）
寺島愛

第四研究室

興水美（主任） 草島時介 森岡健二 内田道夫（6月30日まで）
芦沢節 井口一郎（非常勤）

資料室

岩淵悦太郎（主任） 高橋一夫 大石初太郎（4月15日より） 有賀憲三
広浜文雄 野元菊雄（12月31日より） 友部浩（1951年1月16日より）
大間知篤三（非常勤） 關善二（非常勤）

変動の主な点は、第2部が前年度において四研究室に分れていたのを、二研究室にまとめたことと、資料室を拡充したことである。研究室の数を少なくしたのは、なるべく多数のものが協力して調査研究を行って、能率を挙げるようにする趣旨からである。資料室は元来、文献資料の収集、目録の製作、

学界の記録等を主要な任務としていたが、新しく、国語の歴史的発達に関する研究の基礎的作業をも担当することにし（将来国語の歴史的発達に関する研究を行う第三部が設置されるまでの準備として）、さらに、研究所全体の研究成果を刊行するための編集事務等にも当ることにした。

・ なお研究所の事務上の仕事を担当して調査研究を助ける庶務部があり、庶務課、会計課に分れて仕事に当つている。

本年度も、前年度に引きつづいての研究所全体の総合研究として、山形県鶴岡市および附近の村において言語生活の調査を行った。この調査は文部省科学試験研究費補助金を受けて行ったもので、前年度福島県白河市において行った調査と共に、国民の言語生活の実態をさぐり、生活の能率化をはばむ諸条件を明かにしようとするものである。白河における調査の整理の一部が本年度に持ちこされたので、その仕事の完了を見たあとで、鶴岡市において現地調査を実施した。

所外の研究者に、調査研究を依頼する委托研究としては、マス・コミュニケーション研究に関連して、東大新聞研究所に「読紙作業の実験的研究」を、放送文化研究所に「放送文化理解尺度設定の基礎的研究」を委托した。また各地方の現地に住む人々に地方調査員を委嘱した。地方調査員の氏名および調査課題については、48 ページを参照していただきたい。なお、鶴岡市および周辺の言語生活の調査と関連して、庄内地方に行われる方言語彙を調べるために、庄内地方に 31 名の地方調査員をおいた。この庄内地方の地方調査員については 18 ページを参照していただきたい。

第 1 部は現代語を調査研究する部門であるが、前年度においては、（1）主として地域との関連において言語をとらえること、（2）わが国全体を通じて行われる共通語を究明することという二つを考え、前者を第 1 研究室が、後者を第 2 研究室が担当したのであるが、昭和 25 年度においては、音声で表わすか文字で表わすかという点から現代語を話し言葉と書き言葉とに分

け、前者を第1研究室が、後者を第2研究室が担当することとした。すなわち、第1研究室では、地域社会において行われる話し言葉のほかに、共通語としての話し言葉を担当することとし、第2研究室は、共通語のうちの書き言葉を主として取り扱うことにしたのである。

第1研究室でこの年度に主として力を注いだのは、（1）白河市の調査の整理（2）昨年度の地方調査員の報告の整理と25年度地方調査員に対する調査課題の設定、（3）東条氏指導の全国方言語学カードの整理である。なお、鶴岡地区の調査に関しては、その中の主要部分を担当した。さらに信濃教育会教育研究所との協同調査として行われた飯山市の言語調査に参加した。このように第1研究室で本年度取り扱ったことは、主として、地域社会における言語上の問題であるが、主として共通語と方言との交渉に観点をおき、究極の目標としては、標準語の研究のための資料を作製し、理論を見出そうとすることがある。

第2研究室は、同じく標準語確立をめざして、共通語として書き言葉に重点をおき、最近の新聞雑誌を資料として、助詞、助動詞の用法を研究すると共に、基本語彙調査の第一歩として、新聞及び雑誌を資料として、語彙調査の方法を探求し、かつ語彙論的研究を行った。

第3研究室の選んだ個人差に応じた国語学習指導方法の研究は、言語を習得するに当っては、能力や条件の上で当然個人差がある、そこで学校における適切な指導方法を発見しようとして行ったのがこの調査研究である。なお第3研究室は鶴岡調査の一部を担当した。

第4研究室においては、（1）国語学力標準設定に関する調査調究、（2）義務教育終了者に対する語彙調査の試み、（3）文字配列の合理化に関する実験的研究を担当し調査研究を行った。なお、鶴岡調査に参加し、パーソナリティの調査を担当した。第1の国語学力標準設定に関する調査研究は、前年度に引きつづくものであるが、これと関連して、義務教育を終了したばかり

りのものがどの程度の学力を持っているかの実状を明かにしようとしたのが第2の研究項目である。第3の文字配列合理化に関する実験的研究も、前年度に引きづき、実験装置に新しい考案を加えて実験をすると共に、学校生徒を利用して調査用紙に記入せしめる方法で大量調査を兼ねて行った。

(岩淵)

山形県鶴岡市および附近の農村 における 言語生活調査

昨年度、文部省の科学試験研究費補助金の交付を受け、統計数理研究所および民俗学研究所と共同で、福島県白河市および附近の農村において言語生活の実状を調査したが、本年度も、同じく補助金の交付を受け、統計数理研究所と共同で、山形県鶴岡市を中心とする地区において同様な調査を行った。

調査の目的と地点

調査の目的は、国民の社会生活の合理化、能率化をはばむ言語上の諸条件を明らかにし、国民の言語生活を改善する資料を作ることである。この目的を達するために、ある特定地点を選び、そこに行われる言語生活全体の様子を、社会環境との関連においてとらえ、その分析から一般の国民の言語生活を推測することを考えた。昨年度は白河市および附近の金山村、五箇村を特定地点として選んだが（その調査の成果は本研究所報告2「言語生活の実態——白河市および附近の農村における——」として1951年4月に刊行された），本年度の調査地点を選ぶ際では、昨年度の白河地区の調査の経験と結果とを基として、次のような基準を立てた。

- (1) 人口および社会的機能が白河市と同じような都市あるいは町（市に準ずるような）であること。
- (2) 著しい方言的特徴が数多く見られる地域社会であること。
- (3) 現在東京語の影響しかを受けていないと考えられる地域であること。

こうして、まず秋田県あるいは山形県の小都市または町のいくつかを候補地点として挙げ、1950年8月下旬、庶務部長斎藤正がそれらの地点に出張して情報・資料を集め、それに基づいて二地点を選んだ。更に9月中旬所員中村通夫と柴田武とはこの二地点におもむいて、言葉自身について調査を試みた。その結果、山形県鶴岡市を調査地点とすることに決定し、またその周辺の村としては東田川郡山添村を選んだ。山添村を選んだのは、その方言が、これまでに故斎藤秀一氏によつて研究されているからである。なお、パーソナリティの調査に関しては、他の農村をも取り上げた。

調査項目と担当者

鶴岡地区の言語生活の実態を明らかにするために選んだ項目と担当者とは次の通りである。

A. 言語調査

- (1) 共通語化の調査（どれほど共通語が話されているか）
- (2) 言語生活の24時間調査（個人の一日の言語生活はどんなものか）
- (3) 庄内方言の調査（鶴岡市を中心とする庄内地方でどのような方言が行われているか）

調査担当者 中村通夫 柴田武 飯豊毅一 北村甫 島崎稔 山之内るり
金田一春彦（以上国立国語研究所） 林知己夫 青山博次郎
西平重喜（以上統計数理研究所）

B. パーソナリティの調査

調査担当者 浅井惠倫 森岡健二（以上国立国語研究所） 林知己夫

C. マス・コミュニケーションの調査

調査担当者 浅井惠倫 森岡健二

D. 学校における共通語指導状態の調査

調査担当者 上甲幹一（国立国語研究所）

Bのパーソナリティの調査を取り上げた理由は、言語生活の基盤には、そ

の個人なり、土地なりのパーソナリティが強く働いていると考えたからであり、Cのマス・コミュニケーションの調査は、言語生活の上で重要な部分をなす新聞や放送が、どの程度利用され、理解されているかを知ろうとしたものであり、Dは標準語の普及、言語生活の改善に、学校の指導が重大な関係があると思われたからである。

なお「言語調査」のために行った各種の準備的な調査は、パーソナリティやマス・コミュニケーションの調査にも利用した。

この鶴岡地区における調査全体の運営には、岩淵悦太郎が当った。

これらの各項目について鶴岡市および山添村その他で調査を行ったのであるが、現地に出かけたのは、大体、1950年10月から11月にかけてである。ただし項目によって多少出はいりがある。また「言語調査」は前調査を行ったが、その他の調査は、「言語調査」班が調べた資料を利用し、いきなり本調査のみを実施した。（岩淵）

A. 言語調査

1. 調査の計画

(a) 共通語化の調査

1949年の白河市および附近の農村における言語調査で得た結果を確かめることを目的として調査した。課題は、白河市の調査と同じように、(1) 共通語を話す度合を決定する要因と、(2) 方言が共通語へ変っていく過程ということにし、一定の調査票によって面接調査を行うことにした。

被調査者を選ぶのには、double sampling の方法を探った。実際に調査出来るのは、時日、費用などを考え合わせると、白河市の調査と同じように、500人が限度と考えられる。この500人を選ぶのに、鶴岡市民全体から直接500人を選ぶことをしないで、まず、鶴岡市民から何人かをランダムに選び、そうして得られるサンプルから、層別の上さらに500人を選ぶという

手順を探ることにした。こういう double sampling によって、推定の精度を一層高めるようにした。

山添村のサンプリングは、実施に許された期間と人員とを考えて、調査対象をいくつかの大字に限定し、それから等間隔無作為抽出法によって、67人をサンプルした。

(b) 言語生活の24時間調査

共通語化の調査において、共通語を話す度合は、白河市の調査と同じように、点数で表わされる。その点数が実際の言語生活における共通語を話す度合とどういう関係にあるかを明らかにしなければならない。そのため、今度も24時間調査を平行して行うこととした。言ってみれば、言語生活の24時間調査を共通語化の調査に対する妥当性 (validity) の調査として計画したわけである。

(c) 庄内方言の調査

鶴岡市および山添村の方言については、前調査の時、アクセント、音韻、語彙、文法の各部面に分けて、かなり詳しく観察したが、更に、調査票に盛られた、語彙文法に関する項目が庄内地方でどのような地理的分布を示すかを調べようとした。これは、鶴岡市および山添村の方言が庄内地方の地理的分布の上でどういう位置にあるかを明らかにするためである。

このほかに、今から180年ほど前に作られた「浜荻」(庄内藩士堀季雄著、明和4年)の語彙が、現在、庄内地方でどのくらい使われているかを調べ、言語変化に関する一つの資料を得ようとした。

2. 調査の実施

現地調査は前調査を1950年10月11日から17日まで、本調査を11月10日から24日まで行った。

(a) 共通語化の調査

前調査における観察の結果、次のような調査票を作成した。

共通語の調査

A.M. P.M.	2	
調査日	調査者	
調査開始時刻	N.O.	
3 性 男 ¹ 女 ²	現住所 町(字)	番地
※ずっとここにお住いで ですか。お生れは?そこから すぐこちらへいらっしゃ ったのですか。		
※何年生れで すね。		
6 明大昭年		
7 返事		
※今あなたのお仕事は へですね。ほかになにか やっておいでですか。 うちのお仕事は?		
※学校の発音教育や方言をおなおす教育 をうけたことがありますか。どこでう けましたか。時期は?教科書がありましたか。		
※(その後)ことばあるいは方言に気を つけていらっしゃいますか。		
※学校はどこまでおいで になりましたか。		
0 なし 1 小 2 高小 3 新中 4 旧中 5 新高 6 旧高 7 幼 8 六 9 づ 10 地 11 2退 12 3在	1 ある 2 ない 3 中 4 月 5 同 6 月 7 同 8 教科書 9 あつた 10 なかつた	
※お父さんのおくには? お母さんのおくには? あなたの奥さん(へ御住人)は どちらの御出身ですか。		
※ごさうだいはおありになりますか。御長男(女)です か。上に兄(姉)さんはおありになりますか。		
※納税組合長、民選委員などの ような役員をなさっていますか。		
※士族でいらっしゃいますか。		
1 土族 2 以外 19 家の構え 1住A 2住B 3店 4農		
1 はあらかじめ分っている項目を示す。3.4.19については直接質問しない		

※ 十月中に映画をごらんになりましたか。 何をごらんになりましたか。	1 見ない	2 見た	
---------------------------------------	-------	------	--

※ 映画は日本のものがお好きですか。外国のものがお好きですか。 お子さんにはどんな仕事をやらせたいとお考えですか。別の土地 に住んでみたいとお思いになりませんか。			
---	--	--	--

判 定	1 満 足	2 無 關 心	3 不 滿
-----	-------	---------	-------

※ お宅で家族の方たちといろいろお話をなさる時のことばは土地のことば(～土地のふつうのことば)ですか。標準語(よそゆきのことば)ですか。いろいろまさりますか。	1 標準語	2 まさる	3 方言
---	-------	-------	------

※ 近所う頗見知りの方とお話をするとときは?	1	2	3
------------------------	---	---	---

※ 鶴岡の町で頗見知りでない方もおありでしうが、そういう人とお話をなさるとときは?	1	2	3
---	---	---	---

※ 旅の人などに話さるとときは?	1	2	3
------------------	---	---	---

※ 新聞は毎日お読みですか。 何新聞をお読みですか。 (何種類お読みですか。)	1 每日よむ	2 よんだりよまなかたり	3 よまない
	1 中央紙("朝日"毎日"読売")	2 地方紙	

合計 部

※ 十月中に本をお読みになりましたか。 どんな本をお読みになりましたか。	小説類 冊	歴史類 冊	学術書 冊	計 冊
---	-------	-------	-------	-----

※ ラジオのニュース(ニュース解説を含む) はお聞きになりますか。	1 ほとんど 毎日聞く	2 きいたりきか なかったり	3 さか(31 ない(各 整 意)
--------------------------------------	----------------	-------------------	----------------------------

※ ラジオのニュースは一日何回お聞きになりますか。	6.00, 7.00, 9.00, 12.00 P.3.00, P.5.00, P.7.00, P.9.00, P.9.30, 1回
---------------------------	---

○ こどしになってから遠くへおいでになったことがありますか。 秋田方面は? 新潟方面は? 山形市 方面は? 東京方面は?	場 所 用 件 滞在日 敷
	秋田方面 山形方面 新潟方面 東京方面

※ 東京にお知りあいがありますか。	1 つきあわない 2 行き来 3 交通 4 行き来と交通 5 全くない
-------------------	---

● この語落と用のたりないことは何ですか。その時はどこへ? 重い病気や大きなかがいのときははどこへ行きますか。そして.....	用 伸	場 帯
	病気・けが	色

● 先月のあいだよそへおいでになりましたことがありますか。	場 所	用 件	滞在日 敷

2

○は市だけで聞く項目

●は村だけで聞く項目

20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

ひ か	1 e -	2 ŋeɪ -	3 その他 []	34	
蛇	1 xε -	2 ŋɛɪ -	3 []	35	
百	1 ēθ -	2 ŋɛθ	3 []	36	
窓	1 -o-	2 -əd-	3 []	37	
銭	1 -ɛ -	2 -z -	3 []	38	
帶	1 -ɛ -	2 -b -	3 []	39	
背 中	1 se -	2 ře - , cē -	3 []	40	
	1 ↗	2 ↗	3 []	41	
夏 鶴	と音中からだらだら流れるものを何とおっしゃいますか。			1 ŋe - 2 ŋɛəŋɛ - []	42
障 子	1 ŋo -	2 ŋɔi - , ŋo -	3 []	43	
穂	おさをどのよてる所を 何とおっしゃいますか。			1 ŋe - 2 ŋɛ - 3 []	44
口	からハーハーとはくもん。これを 何とおっしゃいますか。			1 i - 2 ŋi - , ē - 3 []	45
駆	1 θ -	2 ŋi - , ē -	3 []	46	
糸	1 i -	2 ŋi - , ē -	3 []	47	
煙 窓	1 e -	2 ŋi - , ē -	3 []	48	
市 いちばん	上の人を「市長」と言いますが、県で いちばん上の人を何とおっしゃいますか。			1 tʃidʒi 2 ŋi - []	49
地 圖	1 -dʒu -	2 ŋi -	3 その他 []	50	
島	1 ŋi -	2 ŋi -	3 []	51	
墨	1 ŋu -	2 ŋi -	3 []	52	
鳥	1 - ŋu -	2 ŋi -	3 []	53	
	1 ↗	2 ↗	3 []	54	
こちらの名産の小さい粒子をつける辛い粉を 何とおっしゃいますか。	1 karafři 2 ŋi - 3 []				55
狐	1 -t ŋu -	2 ŋi -	3 []		
团扇	1 -t ŋi -	2 ŋi -	3 []		
	1 ↗	2 ↗	3 []		

3

34 - 36	37 - 39	40 - 43	44 - 47	48 - 55	56 - 63	64 - 65

柿	1-k-	2-g-	3[]	56
猫	1-k-	2-g-	3[]	57
	1↖	2 ↗	3[]	
旗	1-t-	2-d-	3[]	58
	1↗	2→(↖)	3[]	
鳩	1-t-	2-d-	3[]	59
蜂	1-tʃ-	2-z-	3[]	60
口	1-tʃ-	2-z-	3[]	61
靴	1-ち-	2-z-	3[]	62
沿	1-č-	2-z-	3[]	63
水瓜	1-ka	2-čwa, -kwa	3[]	64
曜日のなまえについておたずねしますが、		1 ka 2 čwa- 3 []	65	
日曜日のつぎは月曜日、月曜日のつぎは				
何とおっしゃいますか。				
「あの人はいつも遅れてくる」というとき、「いつも」ということをふつう何と			66	
おっしゃいますか。		1 itsɯ-mo. sot̪ʃar̪? to:si 3[]		
「わたくしが 留守番をしています」と言うとき、「留守番」ということをふつ			67	
う何とおっしゃいますか。		1 irust̪ban 2 jɔsʃri 3[]		
「どうぞこちらへいらっしゃい」といねいに言うとき、「いらっしゃい」とい			68	
うことをふつう何とおっしゃいますか。		1 irəʃʃai 2 gɔzəxe 3[]		
「おなかがいっぱいになった。もうたくさんです」と言うとき、「もう」というこ			69	
とをふつう何とおっしゃいますか。		1 mo: 2 aððo 3[]		
「あんまり大きいので驚いた」というとき、「驚いた」ということをふつう何と			70	
あっしゃいますか。		1 odorita, 2 obonéda. 3[] bikkuri sita kimogéda		

4

ア ク セ ン ト

「そんなことするのばはずかしい」と言うとき、「はずかしい」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 hadzukashi 2 ūōsishi, ūōsashi 3 []

「このおかしひずいぶんせい」と言うとき、「すいぶん」ということを、ふつう何とおっしゃいますか。

1 dzubibun, de:bun 2 ko:dé 3 []

「そこにすわっていらっしゃい」と言うとき、「すわって」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 Stowatte 2 nématté 3 []

「朝から晩まで野球ばかりしていてはだめだ」と言うとき、「だめだ」ということを、ふつう何とおっしゃいますか。

1 dame da 2 jazajajane 3 []

「うるさいからさわぐなと言うとき、「さわぐな」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 sawayuna 2 hogorwana 3 []

こんどは近ごろことばについて少しおたずねしたいと思いますが
-----「コンクール」ということばをお聞きになったことがありますか。

1 正しく理解されている 2 正しく理解されていない 3 知らない

「六三制」ということばはこの辺でもお聞きになりますか。

1 2 3

東京では学生などの「アルバイト」(バイト アルバイ)がさかんですが、
この辺でもそういうことばを お聞きになったことがありますか。

1 2 3

「鉄のカーテン」は?

1 2 3

「アフレ・ゲール」ということばをお聞きになったことがありますか。

1 2 3

5

語	い	新	語

（子ども～弟～姉）にむかって「朝寝坊をしないで早く起きろ」と言うとき、ふつう何とおっしゃいますか。

1 okiro 2 ogiré 3 []

「どうもこの子は勉強しないで困る」と言うとき、「勉強しないで」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 benkyō: sīneidē-shinde 2 bénkyō: sānē: shinde 3 []

「わたくしたちもいっしょに行きましょう」と言うとき、「わたくしたち」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1-tatfi,-dəfī:-domo 2 -gade 3 []

「おもしろい映画だつてね」「では、いっしょに見に行かないか」と言うとき、「で見に行かないか」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 mi ni, min 2 mi:sə 3 []

友達に心から「あの人はずいぶんもうが強かったなあ」と昔のことを話すとき、「強かつたなあ」ということを、ふつう何とおっしゃいますか。

1 tsenjokattāno: 2 tshīskē 3 []

「あそこにはずめやら鳥やらどんびやうたくさん飛んでいる」と言うとき、「ずめやら鳥やらどんびやら」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 jarā, dano, ja etc 2 dagasite, déra 3 []

「（もし）海が静かならないんだがなあ」と言うとき、「穏かなら」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 nara(ba) 2 dōba, dərō(ba) 3 []

「わたくしも行くから、ちょっと待って下さい」と言うとき、「行くから」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 kara 2 Sogé, Sogé, hogé 3 []

「わたくしも行くけれども卑くは行けません」と言うとき、「行くけれども」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 keredomo 2 domo 3 []

「わたくしなどから「あなたはへ生まれですね」と言われて「そうです」または「はい」と答えるとき、ふつう何とおっしゃいますか。

1 SO: des, 2 nda, 3 []
hai nde, nāwāsīe, SO: de nāwāsīe

（どうもありがとうございました。へさん（駅、市役所、郵便局）のお宅はどうらう 1 2 3 でしようか。）

1正しい 2共通語だがど 3共通語が 4共通語を 5共通語が
共通語 ことなくちがう まざる 話さない 通じない

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

A.M.	P.M.
調査終了時刻	

語 法	語い語者の計

調査時間

今度の調査では、白河市の調査で欠けていた心理的な面の調査を補うとともに、鶴岡市地方の特殊事情に基づく二三の要因を付け加えた。方言的特徴についても、白河市の調査に比べてかなり数多く盛り込むことが出来た。音韻については、7種類32項目、語彙については日常的で、しかも基礎的な語を10語、文法については10項目を設けた。更に五つの新語についても調べた。

被調査者のサンプリングは、物資配給台帳をもとにして、鶴岡市民全体からまず1,810人の第1次サンプルを得た。次に示す国勢調査の結果と比べることによつて、このサンプルは鶴岡市民のかたよりの少ない代表であることは明らかである。

〔サンプル〕〔母集団〕(1948年の国勢調査)		
男	56.4%	55.1%
女	43.6	44.9

この第1次サンプルから、性、年齢、最近の転入者かどうか、居住地域、職業、によって層別した上で、等間隔無作為抽出法によって第2次サンプルを得た。こうして得られたサンプルは584であった。ここで、更に15歳～24歳のサンプルを $\frac{1}{2}$ とした。それは、共通語化に関する要因分析の点から、若い者よりも壮年、老年のサンプルを多くするほうが有利であると考えられるからである。

このようにしてわれわれが面接すべきサンプルは501人となった。しかし実際には、やむをえない理由のために55人の不能者が出て、これは予備サンプルで補った。結局最後に、集計・分析の対象にしたサンプルは496であった。

(b) 言語生活の24時間調査

おもに共通語を使っている人として、ある高級公務員、おもに方言を使つ

ている人として荒物屋の主人を選んで、一日つききって、言語および言語生活のいっさいを記録した。今度の調査では、一部分録音器によって録音して、手書きと比較することにした。これによって、手書きがどれだけ信頼出来るかが明らかになるであろう。

(c) 庄内方言の調査

「共通語化の調査」の調査票に盛った文法、語彙に関する項目と「浜萩」の語彙とを調査するために、庄内地方31地点に昭和25年度国立国語研究所地方調査員を置いて、調査を委託した。調査地点の選定に当っては、山間部・平野部・海辺部・離島、都市・都市隣接町村・農漁村、新旧主要交通路線上の地点とその他の地点など、主として地理的な観点によって配置し、特にいわゆる方言的色彩の濃い地点だけを選ぶことはしなかった。

調査地点および地方調査員の氏名は次の通りである。

調査地点	調査員氏名	調査地点	調査員氏名
酒田市	小山松勝一郎	黒川村	荒沢 登志雄
飽海郡		押切村	佐藤 菊麿
吹浦村	後藤 潔	藤島町	菅原 謙治
西遊佐村	遠田 博	手向村	井上 長雄
高瀬村	小林 智彦	清川村	佐藤 豊彦
本楯村	宮下湖舟	余日町	八木 清
東平田村	富樫 礼三	新堀村	加藤 鮎治
大沢村	鳥海 宗晴	西田川郡	
田沢村	進藤 敏	田川村	今野 清太
上郷村	石黒 良士	福栄村	榎原 武
日向村	高橋 要	念珠関村	本間辰五郎
飛島	渡辺 三郎	温海町	佐藤鶴治郎
鶴岡市	山崎 誠助	豊浦村	五十嵐作太郎
"	田村 哲夫	大山町	前田 光俊
東田川郡		加茂町	井上 謙二
大泉村	金丸 文雄	袖浦村	佐藤 武
斎村	阿部 純一	京田村	阿部 辰男

3. 集計・分析と成果

集計、分析の作業は調査完了後ただちに着手した。その進行状況は次の通りである。

(a) 「共通語化の調査」の集計・分析

次のような作業計画を立てた。

- (1) 反応の分類 (code の決定)
- (2) 反応の記号化 (coding)
- (3) 整理カードの作成
- (4) 各調査項目の単純集計
- (5) 各調査員の調査基準の変異の検定
- (6) 各調査事項の間の相関関係
- (7) 共通語化の要因分析

作業を能率的に進めるために、「戸別調査による共通語化の調査 集計プラン」を作成し、それに従って、柴田武・北村甫・島崎稔・岡部英子・山崎英子が主としてこれに当った。なお、統計数理研究所では林知己夫・村岡充子・田熊雅子・中村治子の諸氏が集計の別の面を担当した。

現在 (1) ~ (5) の各作業が完了し、(6) (7) の作業は現在継続中である。この調査の結果がまとまるのは、1951年9月ごろの予定である。

(b) 「言語生活の24時間調査」の集計・分析

「24時間調査整理プラン」を作成し、山之内るり・長橋紀江が主としてこれに当った。現在、作業のほぼ三分の一を完了している。この調査の結果が判然とするのは1951年8月ごろの予定である。

(c) 「庄内方言の調査」の整理・分析

次のような作業計画のもとに進めた。

- (1) 鶴岡方言のアクセント、音韻、文法の記述
- (2) 庄内方言の文法分布図、語彙分布図の作成
- (3) 「浜荻」に見える庄内方言と現代庄内方言との対照表の作成

現在、各項とも整理の作業を継続中であり、作業の完了するのは1951年9月ごろの予定である。この作業に当たったのは、（1）金田一春彦・柴田武・飯豊毅一（2）島崎稔・野元菊雄（3）野元菊雄である。

なお、これら言語調査の成果は前年度における白河市および附近の農村における言語調査の場合と同様、印刷公表する予定である。（中村・柴田）

B. パーソナリティの調査

はじめに

この調査において考察するパーソナリティ (personality) は個人の精神分析それ自身を最終目的としたものではなく、社会の文化 (culture) との連関における個人の心理過程と状態の分析を主眼とするものである。端的に言えば、パーソナリティを通じて文化を分析せんとするものであって、文化の社会心理学的研究である。従って、ここで言うパーソナリティは、 personality and culture の意味として考えたものである。

文化は、あらゆる種類の言語、宗教、芸術、打製石斧からトラクターにいたるまでの機械器具、法律、道徳、社会組織などを含んでいる。われわれは文化を超有機的 (superorganic) であるのみならず、”人間社会の動作および行動産物” (Kroeber : Anthropology, Revised Edition 1948) として動的に見る。われわれは、言語を人間社会の action および behavior として見たい。

パーソナリティは、乳児、幼年時代に主として形成せられるが、排便法、育児法すらその社会の習慣によっている。また、両親のもとにある少年時代の家庭も社会の文化型に支配されている。すなわち、人間のパーソナリティの形成は、社会の文化を無視することが出来ないし、多くの場合、生物学的原因よりは社会心理学的原因に求めなければならない。

一社会における各個人のパーソナリティは、いろいろな程度において異な

っているが、その相違にもかかわらず、その社会を特色づける規準（norm）が発見出来る。かかるnormは各成員を貫く特徴であることもあれば、大多数の成員に共通な特徴集合体であることもある。この norm を「ある社会のパーソナリティ」と名付ける。ある社会の文化は、その社会のパーソナリティに最も密接に関係する。われわれの求めようとするものは、「社会パーソナリティ」である。

一つの社会が他の社会と接触して、従来の文化に影響をうける時、これを文化変容（acculturation）と名付ける。共通語化という現象も、文化変容という角度から見ることも出来るであろう。文化変容は、ある社会において新文化を移入する少數のものと、これを受け入れる多數のものとによって成立する。文化変容の根本は人間であって、それらの社会構成員を支配する「社会パーソナリティ」を無視しては、文化変容を解釈することは出来ない。一体、文化とパーソナリティとは、相互反応作用をして、文化はパーソナリティを形成し、パーソナリティは文化を制禦する。従って、文化変容の際には、文化変容が社会パーソナリティに変化をさせ、一方社会パーソナリティが文化の変容を制禦するということが理論的に考えられ、人類学者はこの実証につとめている。われわれは、やはりこの問題を実証するため、新しい文化を受け入れる者の態度に焦点を置き、受け入れの社会心理的解釈を試みようとするものである。

このことは、共通語化に際して、どの点に抵抗があるかを明らかにするもので、今後具体的な対策を講ずる際の有力な拠り所となるであろう。

1. 鶴岡における調査の目標

鶴岡において、上に述べた問題を調査するに当り、次の点を明らかにすることに目標をおいた。

(1) 鶴岡地域社会パーソナリティは、どの程度に共通語化と相關するか、換言すれば、共通語文化によって、パーソナリティがいかに変

容したか。

(2) 共通語化によって、鶴岡地域社会は、精神生活にいかなる動搖を起すか。

(3) 鶴岡地域社会文化型は、共通語化に対し、いかなる抵抗を示すか。

これらの問題を明らかにするのは、共通語化に際して抵抗がどんなものであるかを知ることによって、具体的な対策を講ずる際の資料にせんがためである。

2. 計画

この調査においては

(1) ロールシャッハ・テスト

(2) 質問紙法によるパーソナリティ・テスト

(3) 郷土資料の収集

(4) * 生活記録の収集

これら四つの調査から、総合的に、鶴岡地域社会パーソナリティを組立て、それが言語変容（共通語化）の問題に対して、どのような“かかわりあい”を示しているかを見ようとした。各項目の具体的方法は次のように定めた。

(1) [ロールシャッハ・テスト]

ロールシャッハ・テストは元来個人のパーソナリティを調べるために考案されたものであるが、ハローワエル (Iring Hallowell) は文化変容の研究についてこれを用いた実験例を示している。このたびの調査にも、一応、文化変容の問題を明らかにする方法としてロールシャッハ・テストを用いることにした。

ロールシャッハ・テストを実施するに当って、(a) 施行方法の決定、(b) 準備調査、(c) 補助者の養成、(d) 被調査者の選定、が問題になる。

(a) 施行方法の決定

テストに使用する図版は、すでに国際化されているスイス版（Psychodiagnostik Tafeln）を用いたかったのであるが、調査期日までに入手することが出来ず、日本版（臨床的精神診断法図版早稲田大学改訂）を用いることにした。

テストの施行（administration）および記録（scoring）は根本的な所では一致しているとしても、細かい点になると必ずしも標準化されていない。従つて、ベック（Beck）、ヘルツ（Hertz）を参考としつつ、根本的には、最も代表的なクロファー（Klopfer）に従つた。ただし、今度の場合は、日本版を用いたため、日本版向きに修正した所もある。

（b）準備調査

鶴岡地域社会の文化変容の問題を考えるために、鶴岡に移入する新しい文化型に属するパーソナリティを知らなければならない。移入する文化とは、この場合、言うまでもなく東京の文化である。そこで、準備調査としてテストの施行方法を検するために、精華学園生徒37名、西高等学校生徒9名に対してテストを行ったが、この結果を一応東京の文化型をとらえるための一つの手掛りとした。

（c）鶴岡における補助者の養成

熟練を要するこのテストを、短期間に養成された補助者を用いて実施することには難点があったが、滞在期間が短く、しかも一定数の被調査者数を確保しなければならないために、補助者を用いることはぜひ必要であった。従つて、一週間早く現地に行って、これを養成することを計画した。養成のためには、ハンドブックを与えて説明することと、実演して見学せしめるという方法をとることとした。

（d）被調査者の選定

パーソナリティと共通語化との相関を見るため、被調査者は、「言語調査」班の「共通語化の調査」のために選んだ500人の中から double sampling

して、鶴岡市 101 名、山添村 13 名を選ぶことにした。double sampling をする際には、性、年齢、「音韻の点数」、居住経歴を基準とした。

次に、文化変容の問題を考えるために、文化変容の度合の少いと思われる集団を調査する必要がある。このため、旧庄内文化を保持していると思われる御家祿（庄内旧藩士の集団）、松ヶ岡（旧藩士の開拓団）および十六合村（古い農村文化を残していると思われる交通不便な村）を調査対象と定め、被調査者は、いずれも古い習慣を保持していると思われる人たちの中から現地の紹介によって決めるとした。特に十六合村では、30才以上、高小卒以下、他国へ行ったことのないものを条件として村役場で選んでもらうこととした。

（2）〔質問紙法によるパーソナリティ・テスト〕

ロールシャッハ・テストを解釈するためには、テストの結果からだけではなく、種々の材料から総合的に組立てる必要がある。その一つの材料を得るために、質問紙法を試みることとした。

質問紙には、被調査者が土地の文化に安住しているか、抵抗を感じるか、つまり保守的か、進取的かを問うこととし、これに合わせて、新しい文化を受け入れやすいパーソナリティの必要条件として、適応性、活動性、外向性に関する問題を盛り込むことにした。

（3）〔郷土資料の収集〕

文献による幕末以来の文化変容の分析のため、郷土資料の収集が必要であるが、この収集のため市立図書館および公民館の蔵書を利用させてもらうことにした。

（4）〔生活記録の収集〕

郷土資料は、主として、過去の文化に関する記録であるから、現在における日常生活の実態を知るため、鶴岡高等学校の生徒に詳しく教示して、生活記録を書いてもらうことにした。

3. 実 施

(1) ロールシャッハ・テスト

期 間 11月13日～29日

補助者 山本昌美 阿部羊輔

被調査者 鶴岡市、山添村の被調査者は計画に示した通り、その他は市役所、村役場の紹介による。

鶴岡市	101名	山添村	13名
御家祿	10名	松ヶ岡	7名
十六合村	25名	計	156名

(2) 質問紙法によるパーソナリティ・テスト

ロールシャッハ・テストの被調査者に依頼状を出す際に、質問紙を同封し、記入してもらって、面接の際に回収するという方法をとった。従って、被調査者は上と同じ。

(3) 郷土資料の収集

計画の通り、市立図書館長兼公民館長岩本成雄氏の厚意により、郷土文献163冊を借用した。

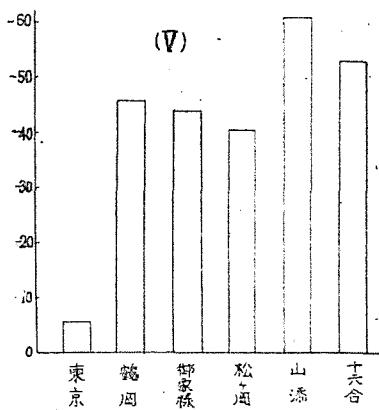
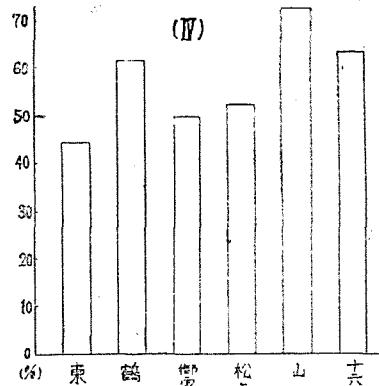
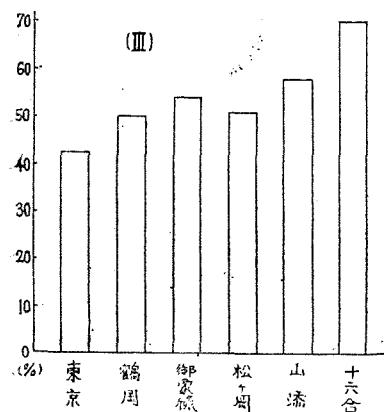
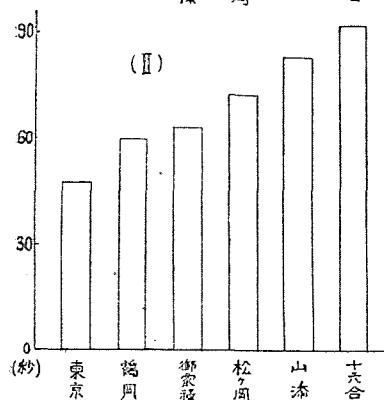
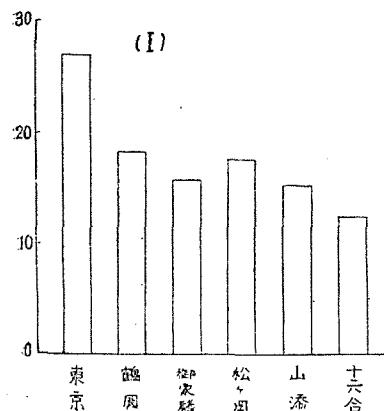
(4) 生活記録の収集

これも予定通り、鶴岡高等学校生徒にノート一冊ずつ書くように依頼し、既に8冊集まっている。

4. 整 理

鶴岡で得たパーソナリティに関する種々の資料のうち、現在までに、ロールシャッハ・テストの一部の集計を終った。

整理した標式はいろいろあるが、反応総数 (total response), 平均時間 (average time), 形反応 (form response), 動物反応 (animal response), 概念 (content) を、東京・鶴岡・御家祿・松ヶ岡・山添・十六合の各集団ごとに算術平均してみた結果は次の通りである。



- (I) 被験者1人の反応総数の平均
- (II) 一つの反応に要した平均時間
- (III) 形反応の反応総数に対する百分率
- (IV) 動物反応の反応総数に対する百分率
- (V) 概念の質に対する点数

概念の質とは、インクプロットに対する反応を（1）明瞭概念、具体概念、（2）普通概念、平凡概念、（3）曖昧概念、不良概念、地方概念に分類し、これに頻度数を考慮して、+点、○点、一点をつけた。かくて、+点と一点との差の反応総数に対する百分率を、概念の質に対する点数とした。従って、東京の一5点は明瞭概念の多いことを示し、鶴岡の一46点、六合村の一53点は平凡概念、曖昧概念の多いことを表わす。

以上は、ロールシャッハ・テストの結果を集団別に掲げたものである。もちろん、調査例の数が集団によって異なっている上に、更に質的に見ても、被調査者がその集団の代表として必ずしも完全でないところに問題があるが、しかし東京の学生、鶴岡の市民、十六合の農民（この場合、御家祿、松ヶ岡、山添をこれに含めても可）の各集団の間で、以上のロールシャッハの記録が明瞭な相違を示しているということは、東京の学生という集団、鶴岡の市民という集団、十六合の農民という集団には、その集団を特色づける規準（norm）があり、その規準の相違が、ロールシャッハの結果に反映したものと考えてよいと思う。

5. 今後の研究方針

ロールシャッハ・テストは、今記録の一部の集計が終った所で、今後は、これを土台にして、次のような過程を経て調査の目的を達する方針である。

- a. 被調査者の個人個人について、精神分析的解釈を試みる。
- b. その結果を、質問紙・郷土文献・生活記録からの材料と合わせて、鶴岡地域社会の社会パーソナリティを求める。
- c. 次に、共通語化によって、地域社会パーソナリティが、いかに変容したかを求める。
- d. また、共通語化が、地域社会の精神生活にどんな動搖を起すかを追求する。
- e. かくして、共通語化に対し、文化型がいかなる抵抗を示すか、を求める。
- f. 最後に、鶴岡地域社会の共通語化のために、いかなる方法を探るべきかの問題に到達する。

なお、以上の調査研究を終了するのは、1951年8月末の予定である。

(浅井・森岡)

C. マス・コミュニケーションの調査

1. 調査の計画

鶴岡地方において放送や新聞がどのように利用され理解されているかという実際の効果を測定し、特に聴取者や読者の行動に対する反応を測定しようとした。

調査対象として鶴岡市内の小学校の生徒の父兄を選び、従って質問事項は父兄が関心を持つものとしたが、調査期とあまり離れずに流されたものをとることにした。ラジオでは「PTAの時間」の昭和25年5月から10月迄の6か月間のスクリプトの内容分析をして、頻度と重さをはかり、放送に関する質問事項を作った。新聞では10月1日より11月5日までの山形新聞、読売新聞、毎日新聞の中から、11月15日に行われた（すなむち、調査開始日の4日前）教育委員選挙に関する記事の内容分析を行って、新聞に関する質問事項を決めた。

11月5日に調査表の試案を作り、11月6日東京都内信濃町と青山一丁目の20世帯にて下調査をして、次のような調査表を作った。

（ラジオと新聞について調べに参りました。お忙しいところすみませんがお答え願います。）

1. PTA全国連合会ができるということをご存じですか。

はい いいえ

（知っている場合）

1 a. それをお聞きになったのはラジオですか、それとも新聞ですか。

ラジオ 新聞 両方 わからない

2. ラジオの「PTAの時間」を気にとめて聞いていらっしゃいますか。

いつも聞く 時時聞く 聞かない

(聞いている場合は3, 4, 5をつづけてたずねる)

3. 学校の運動場をきれいにするにはどうすればよいかというお話を「PTAの時間」にありましたか。

覚えていない PTAの会員が手伝う
 先生と生徒だけで 其の他

4. PTAの資金(お金)や運動会の費用や学校図書館の本を買うお金を作るためにどんなことをすればよいとラジオがいっていますか。

きかない 寄附金を集める
 家庭の不用品を集めてお金を作る 学校でバザーをする

5. PTAの会にいつもおいでになりますか。

必ず行く 時時行く 行かない

(行く場合)

6. 「PTAの時間」のラジオを聞いていらっしゃると、PTAの会で相談する時に参考に(助けに)なりますか。

なる ならない わからない

(参考になる場合)

7. PTAの会で外の人へ「PTAの時間」の話をもち出されたことがございますか。

ある ない

(ある場合)

8. それはどんな事柄でしたか。

会費について 役員の選び方
 幻燈やラジオを買うこと 学校図書館 学校劇
 運動会 旅行遠足 先生の家庭訪問
 バザー 給食 衛生施設 PTA全国連合

(こんどは新聞のことですが)

6. 教育委員の選挙について新聞にいろいろの記事がありましたが、気をとめてご覧になりましたか。

たくさん読んだ 少し読んだ 読まない

(読んだ場合10, 11を)

10. 教育は自分たちのものだから良い人に出でもらい、自分たちもこぞって投票せねばならないと書いていた新聞がありましたか。

あった ない わからない

11. あなたは投票なさいましたか。

はい いいえ

(投票した場合)

12. もう少しおたずねしたいのですが、委員は学校の先生あがりの教育の専門家でなくとも、もし良い人ならかえって教育に素人の方が良いと書いていた新聞がありましたか。

- あった あったような気がする
 いいえ わからない

(はっきりあったという返事の場合)

13. その意見にご賛成ですか。

- はい いいえ わからない

(はいの場合 14, 15)

14. 新聞を見てからそんな考え方方がよいと思われるようになりましたか。

- はい いいえ わからない

15. それでは、教育に素人の方に投票なさったんでしょうね。

- した 素人のうちに気に入った人がなかったので元教員の人
に仕方なしに入れた

- 誰が素人だからわからなかった その他

(どうも有難うございました。もう少しおたずねしたいのですが)

イ. お宅でお取りになっている新聞は、

- 山形新聞 読売 朝日 毎日
 その他

ロ. 失礼ですが学歴は、

- 小学校 中学校 大学専門学校 なし

ハ. おとしは、

(男, 女) 歳

調査票の項目3, 4は、放送内容の記憶、すなわち刺戟に対する反応の度合を見るため、項目7, 8は反応が行動まで進展したかどうかを見るため、項目10, 12は刺戟に対する反応を見るためである。項目12の内容は山形新聞11月5日の日曜論壇に出た城戸幡太郎氏の「教委選への関心」という論文から採ったので、被調査者の中から特に山形新聞の購読者を選んで採点する。項目15はこれによって反応が行動まで進展したかどうかを調べようとする。

副産物としては、ある事件に対するラジオ聴取と新聞閲読との比例、地方新聞と中央新聞との購読率が分り、項目11の質問に対する真偽の率などが調

べられる。

2. 実施状況

昭和25年11月19日から24日まで鶴岡市において実施した。

NHK放送文化研究所の報告によれば、「PTAの時間」の聴取率は平均6%であるから、調査対象を最少限1000世帯として、鶴岡市立第一小学校および第四小学校の父兄世帯1992より無作為に1011世帯を抽出した。

調査の方法は面接調査とした。調査員は鶴岡市立高等学校生徒48名とし、11月19日の午前に、調査法について教示した。

被調査者の投票の事実については、市役所において調査した。

3. 成 縦

1276枚の調査票を得た（面接の際両親共在宅せる場合には、一世帯につき2枚の調査票を得たために調査票数は世帯数より多くなる）。

得られた調査票について、検査と coding を終了した。

4. 次年度の仕事と見通し

マス・コミュニケーションの効果の測定はきわめて重要であるが、われわれは実証的の意味において如何にして測定すべきかを知らないのである。本調査は、小規模であるから、信頼度の高い結果を得ることは困難であるが、少くとも測定方法の手掛りになり得ることを期待している。

本調査の集計・解釈は昭和26年6月完了する予定である。 (浅井)

D. 学校における共通語指導状態の調査

1. 調査の目的

いわゆる方言地域の言語生活の実態調査の一環として、鶴岡市の学校では、話し言葉としての共通語の指導をどのように行っているかを調査し、共通語化の要因と考えられる共通語教育の実状を明らかにし、教育方法の基礎資料を得ようとした。

2. 調査の計画

鶴岡市の公立小中高等学校11校（小5校、中3校、高3校）を選び、小学校では授業を担当する全教官、中高等学校では国語科担当教官を調査の対象とした。第1に、この調査は、学校では必ず共通語を使うべきだという立場から行うのではなく、単にこの仕事が現在どうなっているかというありのままの実状を知りたいために行うのだという主旨を明示した上、現在、教官として特に意識的に共通語の指導を行っているか否か、行っている場合は、何学年から行っているか、教室では必ず生徒に共通語を使わせるかどうかなど5項目について回答を求め、行っていない場合は、教官自身は教室で共通語を使うかなど4項目について回答を求める。そのためチェック式調査表を配布して説明、4~5日以内にもれなく回収し、その回答が正確であるか否かを実際の授業見学を行って確かめた上、種々の角度から集計して指導の実状を把握する。

3. 調査の実施

調査は11月21日から25日まで行い、従来の研究を参考として次に示すような調査表を作り、これを配布して記入を求めた。またそれと同時に第一小学校、第二小学校、第一中学校、第三中学校、家政高等学校の5校10教室について実地見学を行った。

回答教官数 137名（小 103名、中 13名、高 21名）

学校における共通語指導状態の調査表

学 校 名 鶴岡市 学校

教 官 氏 名

調査表記入日 1950年11月 日

この調査は、学校では必ず共通語を指導すべきだという立場から行うのではなく、単に一應現在の実状を知りたいためですから、そのおつもりでありのままの実状をお答え下さるようお願いいたします。

1. あなたは学校でとくに共通語の指導をしていますか。

¹ している ² していない

2. とくに共通語の指導をしている場合には、

a. どの学年からしていますか。

小学校 ¹ 1年 ² 2年 ³ 3年 ⁴ 4年 ⁵ 5年 ⁶ 6年

中学校 ¹ 1年 ² 2年 ³ 3年

高等学校 ¹ 1年 ² 2年 ³ 3年

b. 教室で生徒に共通語を必ず使わせますか。

¹ 必ず使わせる ² 使わせないこともある。

c. 共通語の指導をすることによって生徒の発言意欲に目立った障害を認めますか。

¹ 認める ² 認めない

d. 指導は国語の時間だけでなく、他の教科の時間にも行いますか。

¹ 国語の時間だけ ² 他教科の時間にも

e. あなたが試みて成功したと思われる具体的な指導法があったら、その概要を書いてください。

3. 別段共通語の指導をしていない場合には、

a. あなた自身は教室で共通語を使いますか。

¹ 必ず使う ² 使わない ³ 使うこともある

b. あなた自身はもっぱら方言を使いますか。

¹ もっぱら使う ² 使ったり使わなかつたり

c. 別段共通語の指導をしていないことが、生徒の学習指導の上に目立った障害を与えていると思いますか。

¹ 思う ² 思わない

d. 別段共通語の指導をしていないのはどんな理由からですか。

1. 自分で共通語が使えないから。

2. 共通語が確立していないと思うから。

3. 生活語としての方言を指導する方が大切だから。

4. 地域の実状が共通語を必要としないと思うから。

5. その他（その理由を書いてください）

4. 成 果

結果は現在整理中であり、1951年6月までには完了する予定であるが、現在までに判明した結果の一部は次のような点である。

- (1) 共通語を指導している率は平均 92%（小 96%， 中 100%， 高 67%）
- (2) 共通語を指導することによって生徒の発言意欲に目立った障害を認めるか否かについて、 小学校では 50% 対 50% である。
(中高等学校では認めない方が圧倒的に多い)
- (3) 小学校では一年生から指導を始めるのが全体の 40%， 3 年生までに始めるのが 80% となっている。
- (4) 実地見学の結果から見れば、 共通語指導意識の割合には、 その方法はまだ体系化してはいないよう思われる。

(上甲)

長野県飯田市および上久堅村 における 言語生活調査

A. 調査の組織

この調査は信濃教育会教育研究所が主体となり、国立国語研究所、統計数理研究所がこれに協力して行った共同調査であり、「本調査」の実施には、信濃教育会飯田支会所属の教員27名と上久堅村の教員10名とが参加した。

B. 調査の目的

白河市および附近の農村の言語生活調査（1949年）、鶴岡市および山添村の言語生活調査（1950年）と同様に、国民の言語生活の合理化、能率化をはばむ諸条件を明らかにすることを目的として、

- (1) 言語生活を観察し、記録する調査
- (2) 共通語を話す度合に関する調査
- (3) 話す技術の調査

の二つの調査を直接の目標とした。信濃教育会教育研究所ではこのほかに、
も目標の一つに加えた。

なお、調査地点として飯田市を選んだのは、言語生活の点で調査に好適であり、特に、敬語をはじめとして、著しい語法現象が観察されたからである。

C. 調査研究の担当者と調査月日

国立国語研究所からは、この調査に次の人が参加した。

準備調査	1950年12月9日～12日	柴田武
本 調 査	1951年1月6日～13日	中村通夫 柴田武 新藤昭二
補正調査	1951年3月29日～30日	新藤昭二

D. 計画

1. 言語生活を観察し、記録する調査

(a) 24時間調査

鶴岡における調査と同様の目標と方法とによって、ほとんど共通語ばかりを使っている者、ほとんど方言ばかりを使っている者、その中間の者、以上の3人を被調査者として、調査することとした。

(b) 朝食、夕食の場面の調査

白河市における24時間調査に現れた著しい傾向の一つは、食事の時間を中心として、その前後に言語量が著しく増大することであった（国立国語研究所報告2「言語生活の実態——白河市および附近の農村における——」285ペ参照）。また、食事場面の中でも、朝食、夕食の場面には職業・性の違いにかかわらずこの傾向が現れた。そこで、この調査では同一個人について朝食時およびその前後約2時間、夕食時およびその前後2時間だけを特に観察することとした。これによって、被調査者の1日の言語量のうち、かなりの量を観察することが出来、また家族の人々とかわす、うちとけた談話語について観察することが出来ると考えたからである。被調査者としては、勤め人（女）、商人（男）、農民（男）、職人（男）、勤め人の主婦、商人の主婦、それぞれ1名ずつ、および勤め人（男）2名計8名を選んだ。

(c) 特定場面の調査

(a) および(b) の調査は被調査者を中心とした言語生活の調査であるが、同一個人でも、それなり話し相手の違いにより、話の場面の違いによって異なった表現を使うことが考えられる。そこで、それらのいろいろの場面で行われる会話を全体として観察筆録して、場面によって言語にどのような相違が見られるかを知ろうとした。場面としては、次の八つを選んだ。

- 市役所の配給係窓口（係員と来客との用談）
- 市役所の税務係長席（係長と来訪者との用談）
- 工場内の一室（職長と女工との会話）
- 理髪店（店主と客との会話）
- 呉服店の店頭（番頭と客との会話）
- 菓子店の店頭（内儀と客との会話）
- 八百屋の店頭（内儀と客との会話）
- 荒物・雑貨店の店頭（店員と客との会話）

2. 共通語を話す度合に関する調査

鶴岡市および附近の農村における共通語化の調査の場合と同様の調査目標と調査方法とを飯田市および上久堅村において試み、相互に補うことを意図した。従って、その目標、方法は出来るだけ鶴岡市の調査の場合に近づけることとした。

ただし、文法の調査に当っては、白河の調査では、方言形と共通語形との両形を与えて、そのどちらを使うかと質問するという方法を採用し、鶴岡の調査では、共通語形を与えて、それに当る方言形を質問するという方法を採用したが、飯田の調査では、この二つの調査方法を調査票に盛り込み、質問法の相違によって結果にどのような差異が現れるか、また結果の相違の間にどのような関係が見られるか、どのような調査法の検討を目標にした項目をも含ませた。また、新語についての調査語は多くしたが、ペーソナリティと言語との関係についての調査はこの調査では割愛した。

E. 調査の実施

調査のための準備は1950年の夏以来信濃教育会教育研究所によって進められ、1950年12月に準備調査が、また1951年1月に本調査が行われた。

準備調査では、統計数理研究所（林知己夫が協力）が被調査者の抽出のための作業に、国立国語研究所が調査票作成の基礎としての言語調査に、それぞれ従事した。その結果として次のような調査票を作成した。

共通語の調査

— 飯田市、上久堅村 —

1	2	3	4			
<input type="text"/>	<input type="text"/>	昭和26年 1月 日 調査日	午前 晴 令 午後 晴 方 調査開始時刻			
NO.	調査員					
5	性 1男 2女					
6	ずっとここにお住いでですか。 お生れはどちらですか。よ りお住いになったことはあ りませんか。東京にお住い になったことは? 兵隊は?					
7						
8	何年生れですか。 <table border="1"><tr><td>明 大 昭</td><td>明治 大正 昭和</td><td>年</td></tr></table>	明 大 昭	明治 大正 昭和	年		
明 大 昭	明治 大正 昭和	年				
9	今のお仕事は何ですか。 うちのお仕事は何ですか。	本 人	家			
10	学校で方言やことばについて特別 の教育を受けたことがありますか。 それはどんな教育でしたか。	ある なし				
11	その後方言やことばに気をつけいらっしゃいますか。 なりましたか。	1 気をつけている 2 気をつけてない				
12	お父さんのおくにはどちらですか。	1 父	2 田			
13	お母さんのおくにはどちらですか。		3 酉			
14	あなたの奥さん(御主人)のおくには?					
15	ごきょうだいはおありになりますが。御長男(女) ですか。上に兄(姉)さんがおありますか。	1 長子・長男(女) 2 長男(女) 3 その他				
16	団託員、民生委員、婦人会委員など のような役員をなさっていますか。	1 している 2 していない				

() は、あらかじめ分っている項目を示す。1, 2, 3, 4, 5, 6について質問しない。

①

- 17 [] 先月中に映画をごらんになりましたか。 17
1 見た 2 見ない
- 18 [] 映画は日本のものが好きですか。外国のものが好きですか。
おさんにはどんな仕事をさせたいとお考えですか。
別の土地に住んでみたいとお考えになりませんか。
- 18 1 不満 2 無関心 3 満足
- 19 [] お宅で家族の方たちといろいろ話をなさる時のことばは土地のことばですか。標準語(よそゆきのことば)ですか。いろいろまさりますか。
- 19 1 標準語 2 まさる 3 方言
- 20 [] 近所の顔見知りの方とお話をなさるとさは?
- 20 1 2 3
- 21 ○ 飯田の町で顔見知りでない方もおりでしょうか。
そういう人とお話をなさるとさは?
- 21 1 2 3
- 22 [] 旅の人などとお話をなさるとさは?
- 22 1 2 3
- 23 [] 新聞は毎日お読みですか。
何種類お読みですか。
- 23 1 毎日 2 よんだり 3 よまない
よむ よまなかつたり 部
- 24 [] 先月中にどんな本(並行本)をお読みになりましたか。
- 24 1 読んだ 2 読まなかつ
- 25 [] ラジオのニュースやニュース解説をお聞きになりますか。
- 25 1 ほとんど 2 きいたい 3 きかない
毎日きく きかなかつたり
- 26 [] 昨年中にどこか遠くへおいでになったことがありますか。
どこへおいでになりましたか。
- 26 1 ある 2 なし
- 27 [] 東京にお知りあいがありますか。
行き来なさっていますか。
- 27 1 ある 2 なし 2 ときどき 3 全然
来るする しない
- 28 [] ③ 病気やけいかのときはどここの医者にかかりますか。魚はどう買いますか。
- 28 28
病気 魚 肉 くすり 衣類 暖具 理髪 映画
- は上久堅村では質問しない。
○ は飯田市では質問しない。
- ② [] 場面

- 29 「そんなことはあつかましくてどうしても言えませんでした」と言うようなどさに、
イエマセナント^タ のようにおっしゃいますか。 [1言わない 2言う]
- 30 朝、目をさまして、「ああよくねむった。さて起きよう」と言うときには、サテ
オキズ^タ のようにおっしゃいますか。 [1言わない 2言う]
- 31 となりの家の人に誘って学芸会(婦人会)に行こうとして「もう時間だから
ほっぽうでかけよう」と言うときには、デカケマド^カ のようにおっしゃ
いますか。 [1言わない 2言う]
- 32 「なんか音がする。バスが来るんだろう」と言うとき、「バスが ワルン
ズラ」のようにおっしゃいますか。 [1言わない 2言う]
- 33 なにか物をなくしたときには、「キット オトイテ キタンズラ」のように、
オトイテとおっしゃいますか。それともオトラテとおっしゃいます
か。 [1オトイテ 2オトイテ]
- 34 目上の人にもかって、「ちょっとお帰りにならないで、心配していました」と
言うとき、「オカエリソモン^タ」のようにおっしゃいますか。 [1言ない 2言う]
- 35 「きょうはなんにもしないで遊んでいた」と言うときに、「ナンニモ セッコ
アソンドッタ」のように、「セッコ」という言い方をなさいますか。 [1しない 2する]
- 36 目上の人から「ゆうべの映画はおもしろかったですか」と聞かれたとき、
ハイ オモシロクアリマジタ^タ のようにおっしゃいますか。 [1言わない 2言う]
- 37 「そりゃやうなんだよ」と言うときに、「ソオナンナ」のようにおっしゃい
ますか。 [1言ない 2言う]
- 38 「天龍川ではとても大きな魚がどれんんですよ」と言うときに、「どれんんで
すよ」というところを「トレマヌンタ^タ」のようにおっしゃいますか。 [1言ない 2言う]
- 39 「もっと早く来なければだめじゃないか」のように、目下のものにむかってし
かるときに、「コニヤ ダメジヤナイ^カ」とか「コナ ダメジヤナイ^カ」のよう
におっしゃいますか。 [1言ない 2言う]

(3)

文部省
審定

40

「きのうはお客様がつづからつづへとあって、とうとう行けませんでした」と言うときの「行けませんでした」ということをどんなふうにおっしゃいますか。

1 イケマセンデシタ 2 イケマセヤンタ

41

「では急いで返事を書こうと言うときの「返事を書こう」ということをどんなふうにおっしゃいますか。 1 カコオ 2 カカス

42

「その仕事をいつしょにやりましょう」と、親しい人を説うようなときに、「やりましょう」ということをどんなふうにおっしゃいますか。

1 ヤリマショオ、ヤロオジヤナイカ 2 マラマイカ

43

「もう山では雲が降ったんだろう」と言うとき、「降ったんだろう」をどんなふうにおっしゃいますか。 1 ブリタントロオ 2 ブリタヌラ 3 ブリタンタラ

44

「ここへ水をこぼしたのはだれか」と言うときの「こぼしたのは」というところをどんなふうにおっしゃいますか。 1 コボシタ 2 コボイタ

45

こんどは近ごろのことばについてすこしあたずねしたいと思いますが――――ラジオなどで「コンクール」ということばをお聞きになったことがありますか。

1 正しく理解されている 2 正しく理解されていない 3 知らない

46

「六三制」ということばはこの辺でもお聞きになりますか。 1 2 3

47

東京などで学生がさかんに「フルバイト」をしていますが、この辺でもそういうことばをお聞きになったことがありますか。 1 2 3

48

「アフレ・ケーラー」は？ 1 2 3

49

「鉄のカーテン」は？ 1 2 3

50

「ピー・ティー・エー(PTA)」は？ 1 2 3

51

「エチケット」は？ 1 2 3

52

「ペニシリソ」は？ 1 2 3

53

「38度線」は？ 1 2 3

54

どうもありがとうございました。〇〇さんの 1 標準詩 2 まさる 3 方言
お宅(郵便局、駅)はどうですか。

55

1 正しい共通語 2 共通語だが、どこかちがう 3 共通語がまざる 4 共通語を話さない

56

午前	歸	令
午後	精	令
副	終了	時刻

時	間
---	---

(4)

本調査では、国立国語研究所としては、

現地調査員の訓練、指導

「言語生活を観察し、記録する調査」の一部錄音

「共通語を話す度合に関する調査」の一部実施

の作業を分担した。

被調査者は次の通りである。

(1) 言語生活を観察し、記録する調査の被調査者

(a) 24時間調査 ほとんど共通語ばかりを使っている者、ほとんど方言ばかりを使っている者、その中間の者として、それぞれ医師、女工場主、洋服店主について調査を行った。ただし、医師は午前の調査を終了したころ、家の病勢が悪化したため、午後以後の調査は行わなかつた。なお、この調査の記録を録音器によって同時に録音したものと比較したところ、信頼出来ない部分が少なくなかったので、全記録を廃棄し、改めて3月末に女工場主、洋服店主について再調査を行つた。

(b) 朝食、夕食の場面の調査 予定の通り実施した。ただし、記録のある部分は信頼出来ないと考えられたため、集計に当つてはその部分を割愛することとした。

(c) 特定場面の調査 予定された8場面のうち、工場内の一室（職長と女工との会話）は職長の病気のため調査出来なかつた。そのほかは予定の通り実施した。ただし、記録のある部分は信頼出来ないと考えられたため、集計に当つてはその部分を割愛することとした。

(2) 共通語を話す度合に関する調査の被調査者

(a) 飯田市

調査する予定であった者 278人

調査出来た者 258人

調査出来なかつた者 20人

調査出来なかった理由

転住	5	病気	5	長期出張	5	出稼	1
朝鮮人	1	毎日出張	1	拒否	2		

(b) 上久堅村

調査する予定であった者 99人

調査出来た者 92人

調査出来なかった者 7人

調査出来なかった理由

病気	5	出張不在	2
----	---	------	---

F. 集 計・分 析

(1) 「言語生活を観察し、記録する調査」の集計、分析

年度末に補正調査が行われ、からうじて年度内に調査が終了したが、集計・分析は本年度内に着手することが出来なかった。

(2) 「共通語を話す度合に関する調査」の集計・分析

鶴岡における調査とほぼ同様の集計プランと分析プランとを作成した。集計・分析の実際の作業は、本年度はこのプランに従って信濃教育会教育研究所において実施されている。

G. 成果および次年度の見通し

次年度の前半は「鶴岡市および附近の農村における言語生活調査」の集計・分析のために予定されているので、この調査の国立国語研究所における集計・分析の作業は次年度の後半から着手し、年度内に終了する予定であり、その成果は、いずれ公刊しうるであろう。 (中 村)

福島県白河市および附近の農村における 言語生活の実態調査の集計・分析

A. 集計・分析の計画

この調査は1949年の9月から12月にかけて行われたが、結果の集計・分析を本格的に始めたのは、1950年4月からであった。

この調査は、国立国語研究所が中心となって、統計数理研究所、民俗学研究所と共同で実施したが、集計・分析は、主として国立国語研究所の第1研究室と統計数理研究所の第3部との手で行った。

B. 担 当 者

便宜上、仕事を次の四つに分けて、それぞれ分担した。

(1) 共通語化の調査

柴田武、高田正治、長橋紀江、岡部英子、山崎英子、浜田一巳、林公子（以上、
国立国語研究所）；林知己夫、石田正次、田熊雅子、村岡充子（以上、統計数
理研究所）

(2) 言語生活の24時間調査、言語能力と言語生活の調査

宇野義方、山之内るり、長橋紀江、岡部英子

(3) 疎開児童・生徒の言語の調査

北村甫

(4) 社会的背景の調査

島崎稔、林知己夫、石田正次

C. 経 過

(1) 共通語化の調査

この調査の集計・分析は、まず、コードを決め、コードつけを行い、集計

カードに記入し、その上で集計に取りかかった。集計は、あらかじめ決めておいた集計プランに従い、単純集計と相関分析を進めた。こうして、一応の集計が出来上るまでには約4か月かかった。

(2) 言語生活の24時間調査、言語能力と言語生活の調査

後者の集計・分析は簡単であったので、特に記すことはない。

24時間調査の集計・分析については、あらかじめ決めておいた分析の課題について分析を進めた。記録を整備し、2名の記録をつき合わせて定本を作った上で、話題ごとの言語について共通語か方言かを判定し、文節ごとに切って全語彙をカードにとり、その後、いろいろな分析を試みた。

(3) 疎開児童・生徒の言語の調査

まず、調査票と調査項目とを整備し、コードを決め、コードつけをした上で、集計に取りかかった。分析の課題は、〔a〕疎開地の言語への同化の度合、生得の言語の保存の度合の要因分析、および〔b〕疎開地の言語への同化は言語構造のどの部分から始まるか、であった。集計・分析の終ったのは6月の初めであった。

(4) 社会的背景の調査

聞き取り、文献の調査などによって、現在および過去の白河市の社会構造についてまとめた。12月末に報告書のための草案が出来上った。

以上のように、4種類の集計・分析が平行して進んだが、これを編集し、印刷原稿としてまとめるのには、他の研究計画のために、1951年1月上旬まで待たなければならなかつた。こうして、1951年4月末までに、報告書の形にまとめ、印刷・刊行することが出来た。国立国語研究所報告2「言語生活の実態——白河市および附近の農村における——」がそれである。

この報告書には、共通語化の調査と24時間調査を中心にしてまとめた。言語能力と言語生活の調査、疎開児童・生徒の言語の調査および社会的背景の調査のそれぞれの結果も適宜取り入れた。しかし、疎開児童・生徒の言語

の調査に関する結果のある部分の発表は次の機会に譲ることにした。

D. 成 果

成果は、先に述べたように、「言語生活の実態——白河市および附近の農村における——」にまとめた。そのうち、おもな結果は次のようにある。

(1) 共通語を話すことをはばむ、または、共通語を話すことを進める文化的条件は、学歴、父母の出身地、本人の生育地であると認められる。

(2) しかし、共通語を話す度合を決定する要因は、一つ一つの要因ではなく、いくつかの要因が寄り集まつたものと考えるべきであろう。

(3) いくつかの要因の寄り集まつたものは、共通語を話させるようにする地域社会そのものの社会的要求を形成すると考えられるから、白河市民の共通語を話す度合を高めるのには、白河市が城下町から近代都市へ成長し、地方的な商工業が全国的な規模のものに発展することが必要である。

(4) 共通語を話す度合の高まるのは、知らない人や旅行者などの場面から始まり、家庭の場面が最も遅れると見られる。

(5) 共通語を話す度合の高まるのは、いわゆる「ズーズー弁」でない地域で生育した集団からであって、これに比べて、西白河郡で生育した集団はかなり遅れるとみなされる。

(6) 無声化、ヒとシとの混同のような言語構造的特徴は早く共通語へ移るが、イとエとの混同というような特徴は最も強く抵抗するようである。

(7) 3人の言語生活を一日中観察した結果、一日中に話した延べの語（自立語）数は8,500ないし10,000であり、異語（自立語）の数は2,100ないし2,300である。

(8) 一日のうちに読み・書きに費す時間はせいぜい10分を越えない程度と認められる。

(9) 日常生活の話し言葉の文の長さは平均3～4文節である。（柴田）

各地方言の調査

A. 調査の目的および調査課題

各地方の言語生活の調査のためには、現地の研究者の協力にまつ点がきわめて多い。前年度來、各地方の言語生活の実態を調査する目的で、各地方に調査員を委嘱してきたのもこの趣旨からである。本年度は調査員をほぼ各府県一名を目あてに配置することにした。(なお、山形県鶴岡地方において実施した言語生活の調査と関連して、庄内地方の各地に地方調査員を委嘱した。)

本年度の調査課題は次の通りである。

- (A) 地方言語の特徴形の実態調査
- (B) 県下の方言の概観ないし県下の言語状態の概観
- (C) 竜門児童の調査
- (D) 県下方言についての各自の調査研究

上の項目のうち、本年度はじめて委託を受ける調査員は(A)と(B)とを調査し、昨年度からの調査員は(A)と(C)とを調査すること。(ただし、(C)が不可能な場合はその代りに(D)を調査すること)。

以上のうち(A)は国語教育・国語問題の上で従来問題とされていたその地方の言語の特徴形と考えられるものを選び、その現在における実態を調査し、国語教育の実施、国語問題解決への基礎資料の一つとすることを目標としたものである。

各县の調査員にその県において目標に該当する特徴形の一あるいは二を、音韻現象・文法現象の中から選んでもらった。

なお、特徴形の選定の基準、調査地域、調査地点、調査対象、調査課題、調査票、調査方法、準備調査、結果の整理集計、報告書などについて細部に

わたって指示した。

(B)は昨年度一部の地方ではこの課題で調査を委託したが、本年度から新たに加わった調査員にもこの課題を委託して昨年度報告の欠けていた地方の補充をすることを目標としたものである。

(B)の作業内容は次の3項である。

- (1) 県下の方言についての従来の研究の概観
- (2) 県下の方言文献の調査
- (3) 県下の方言に関して (a)従来調査研究がほとんど行われなかつた部面 (b)未解決の部面 (c)今後の重要課題

これらのうち、(2)に対しては更に細部にわたって指示した。

(C)は疎開児童が如何に地方言語に同化して行くかを調査することによって、地域社会の言葉が移住者の言葉にどのように変化を与えるかを見ようとしたものである。

調査計画に関しては、調査対象、調査事項、調査方法、準備調査、結果の整理集計などにつき、細部にわたって指示した。そのほか昨年度当研究所が白河市で行った言語生活の実態調査の一部である疎開児童生徒の言語調査の調査票を参考資料として添えた。

(D)は県下の方言について各調査員が任意項目を選んで行った調査研究の結果を報告してもらおうとしたものである。

B. 調査研究の担当者

本年度における地方調査員の氏名は次の通りである。

県別	氏名	住 所	職 業
北海道	石垣 福雄	函館市千代ヶ岱町87	函館東高校
"	新谷 恒蔵	札幌市南20条西10	札幌市柏中学校長
"	芳賀 綏	岩見沢市6条4丁目	
青森	北山 長雄	青森市浪打241の5	青森高校

岩 手 小松代融一	盛岡市加賀野久保田94	岩手県教育研究所
宮 城 佐藤喜代治	仙台市北3番町63	東北大文学部
秋 田 北条 忠雄	秋田市保戸野原町	秋田大学学芸学部
山 形 斎藤義七郎	山形市肴町675	県立東高校
福 島 一谷 清昭	福島市松木町52	県教育委員会
茨 城 田口 美雄	水戸市外赤塚388	県立日立第二高校
栃 木 多々良鎮男	宇都宮市住吉町1の45	宇都宮大学
群 馬 中沢 政雄	伊勢崎市上泉町235	前橋高校
埼 玉 池之内好次郎	北足立郡宗岡村682	北足立郡内間木小学校
千 葉 大岩 正伸	練馬区東大泉町942	千葉大学分校
神奈川 金田 元彦	藤沢市鵠沼3丁44	
新潟 劍持隼一郎	新潟県柏崎市比角大和町	柏崎高校
石 川 岩井 隆盛	河北郡津幡町字清水ホ313	金沢大学教育学部
福 井 佐藤 茂	福井県今立郡神明町	福井学芸大学
山 梨 三谷 栄一	甲府市富士川町6	山梨県立図書館長
長 野 青木千代吉	長野県更級郡稻里村中氷飽1089	信濃教育会
岐 阜 寛 五百里	滋賀県東浅井郡湯田村山前	岐阜大学学芸学部
静 岡 望月 謙三	清水市船越14	静岡大学教育学部
愛 知 野村 正良	名古屋市千種区田代町金鳴畠	名古屋大学文学部言語学研究室
三 重 岩佐 正三	徳川山147号	三重大学
滋 賀 井之口有一	一志郡香良洲町三重大官舍	
京 都 奥村 三雄	彦根市芹橋15丁目8	滋賀短期大学
大 阪 前田 勇	京都市上京区紫竹下緑町17	京都学芸大学
兵 庫 和田 実	大阪市生野区林寺新家町146	大阪学芸大学
奈 良 佐藤 譲	神戸市垂水区西垂水122	神戸大学文学部
和 歌 山 棚垣 実	奈良市西京葉師寺内	天理大学
鳥 取 生田 弥範	和歌山市鶴戸高松町192	和歌山大学
島 根 岡 義重	西伯郡五千石村字諫訪	
岡 山 虫明吉次郎	簸川郡伊波野村富	
広 島 村岡 浅夫	御津郡一宮村辛川市場6	操山高校宇野校舎
山 口 原 安雄	佐伯郡親音村尾代121	
香 川 武田 明	大島郡小松町	小松町立明新小学校
愛 嫁 杉山 正世	仲多度津郡多度津町鶴橋	多度津町長
高 知 士居 重俊	今治市松本通2丁目	西条南高校
福 岡 都築 賴助	高知市弥生町52	高知大学学芸学部
	福岡市原1241	福岡学芸大学

佐賀 小野志真男	佐賀市赤松町中館93	佐賀大学教育学部
長崎 井上 鞘	大村市小姓小路154中尾方	大村高校
熊本 原田 芳起	熊本市内坪井町45	県立第一高校
宮崎 岩本 実	宮崎市下水流町190の1	宮崎大学
鹿児島 上村 孝二	鹿児島市武町965	鹿児島大学文理学部

C. 計画および実施状況

地方調査員の人選は慎重を期したので、その配置を完了したのは7月中旬であった。従って前に述べた調査課題を委託したのは8月上旬(8月2日)であった。

年末までには報告書を提出するように依頼したが、期間が少し短か過ぎたようである。

なお、調査員から質疑をよせられた場合にはそのつど指示をした。

D. 成 索

年度末までに提出された報告書によって、その大要を見れば次のようになる。

- (A) を選んだもの 30
- (B) を選んだもの 27
- (C) を選んだもの 4
- (D) を選んだもの 6

それらのいちいちについて記せば次のようになる(調査項目の記載は各人の報告のままにしてある。)

1. (A) を選んだもの

- (1) 北海道南部地方における言語の特徴形の実態(石垣福雄)
調査項目; 来ると, すれば, から, けれども(各5例, 計20例)
- (2) 北海道の方言における動詞の特徴形の調査(芳賀綏)

調査項目；可能の言い方，命令形（一段，サ変），仮定形（カ変，サ変）

(3) 地方言語の特徴形の実態調査（青森，北山長雄）

調査項目；音韻として，i音，F音，kwa・gwa・ŋwa音，ka・ta音など12項目

文法として，名詞につく一ko，ハ行四段動詞，来る，下さい

(4) 地方言語の特徴形の実態調査（山形，斎藤義七郎）

調査項目；音韻として，セ・ゼ音，ツ音，語頭のs・ʃ音，f音

文法として，可能の表現，比較の「より」特殊活用の動詞「見える」「弁償する」，特殊文法「知っている」「行こう」

(5) 地方言語の特徴形の実態調査報告（岩手，小松代融一）

調査項目；助詞の「さ」（方角，場所，目標など10項，32例について）

(6) 宮城県における地方言語の特徴形の実態調査報告（佐藤喜代治）

調査項目；母音の重複，母音のi，鼻音化，キ・キョの口蓋化，有声化など9項目（32語例）

(7) 地方言語の特徴形の実態（福島，一谷清昭）

調査項目；曖昧濁音，r音の同化，アクセント，イ・エの混同，ウ列拗音（27語例）

(8) 茨城県言語の特徴形の実態調査（田口美雄）

調査項目；音韻として，k行音のg行音化（100語例）

文法として，カ変動詞の活用形（7例）

(9) 栃木県の方言の特徴形の実態調査（多々良鎮男）

調査項目；語中語尾のカ・タ行音の濁音化（カ行12語例，タ行14語例）

(10) 安房・上総におけるカ行音の子音脱落現象に関する調査報告（大岩正伸）

調査項目；マキ（薪），ツクリ（作り），ダイコンマキ（大根蔥），ナクナッタ（無くなった），カキ（柿）などの語について

(11) 神奈川県の言語の特徴形の実態調査（金田元彦）

調査項目；「来る」の未然形（naiに接する形）と仮定形，補助動詞「下さい」の方言形

(12) 地方言語の特徴形の実態調査（長野，青木千代吉）

調査項目；音韻として，母音i～eの混同，u>oの転化，連母音ai・ae・uiなどのe:・i:音化，子音či>ʃiの転化（7語例）

文法として，意志・推量の-dzur，断定表現の-daの接続法，敬語法に関する二三の現象jasur，gowasur，（5例）

(13) 年齢別言語調査報告（静岡，望月謙三）

調査項目；鳴くから，帰ろう，人たち，行って，しないで，来なさい，あの方たちは，そちらの，水をなど21項目（5文例）

(14) 北部三河方言の特徴形に関する調査（野村正良）

調査項目；アクセントとして，ヒガ（日が），ハシガ（橋が），タコガ（瓜が）など20項目

音韻として，大根，書いた，鯉，軽い，消える，植える

文法として，書かない，しない，行くだろうなど7項目（33例）

(15) 新潟県方言のアクセントの変化（剣持隼一郎）

調査項目；アクセントとして，ふな，かま（鎌），くさ，うた，かま（釜），くも（雲），など113語例

(16) 石川方言実態資料第一部——第一白峰方言を中心として——（岩井隆盛）

白峰村字白峰において採集した語彙約1100語について説明してある。本論未着

(17) 地方言語の特徴形の実態調査（福井，佐藤茂）

調査項目；ur→i，撥音節の現われる諸面（28語例）

(18) 京都方言の性格 (奥村三雄)

調査項目；敬語法，否定法（買う，書く，話す，持つなど各17例）

(19) 大阪府泉北・泉州郡境地域に行われる特殊な動詞打消法の実態調査報

告書（前田勇）

調査項目；ん・せん・へん・ひん・しんなどの言い方（行かない，脱がない，見ない，起きない，出ないなど17例）

(20) 淡路のガ行音（和田実）

調査項目；鼻音について，（ハナンガ：鼻が，ヤナンギンガ：柳がなど）

(21) 和歌山県方言の二段動詞（桝垣実）

調査項目；受くる，落つる，茹づる，読むる，出来る，枯るるなど66語例

(22) 地方言語の特徴形の実態調査報告書（愛媛，杉山正世）

調査項目；音韻として，長音化現象，クッ・グッ音の直音化，te→tʃiの3項目（38例）

文法として，打消条件の言い方など4項目（5例）

語彙として，終助詞，条件助詞など4項目（5例）

(23) 地方言語の特徴形の実態調査（高知，土居重俊）

調査項目；ジ・ヂ・ズ・ヅの識別について（味，知事，藤，家路，叔父，恥ずかしい，水，すずけ，珍しいなど29語例）

(24) 鳥取県下における雲伯方言地区の調査（生田弥範）

調査項目；音韻として，F音，kwa音，ʃe音など17項目，（61語例）

文法として，私が，お前が，どうしようなど9項目，（11例）

語彙として，下さい

(25) 福岡県筑前部地域における形容詞語尾活用の精査（都築頼助）

調査項目；形容詞語尾活用

(26) 佐賀県方言における特徴形の実態調査（小野志真男）

調査項目；kwa・gwaの残存，ʒi，dʒi，zu，duの区別の残存（それぞれ

6例, 11例, ほかに参考として, ジャがいもなど5例)

(27) 地方言語の特徴形の実態調査 (長崎, 井上彰)

調査項目; 助詞ちゃん(けれども), 連体詞こげん(こんな) (東条操氏採集手帖の文例により調査)

(28) 熊本県下方言の特徴形についての実態調査 (原田芳起)

調査項目; 音韻として, 重母音アイの変化, r/dの錯誤, 語中語尾のラ行音節の変化 (37語例)

文法として, 形容詞の終止・連体形の語形, 二段活の残存と一段化・四段化の現状など4項目, (18文例)

参考調査項目として, セの音韻の実態など3項目 (25例)

(29) 地方言語の特徴形の実態調査——音便現象を課題として—— (宮崎, 岩本実)

調査項目; 音便現象を起こす語として, カ行四段動詞, ガ行四段動詞など15項

接続語として, て, た, たりなど18項 (22語例)

補助調査項目として, 行って, 聞いたなど22例,

(30) 地方言語の特徴形の実態調査, ジヂ, ズヅの識別について (鹿児島, 上村孝二)

調査項目; ジヂの識別に, 藤, 味, 恥, 筋, 閉じる, 叔父さん, 富士山, さじ, 真面目など38語例

ズヅの識別に, 水, 肩, 先ず, 鈴, 傷, 数など32語例

以上の調査項目を音韻, 文法, 語彙によってまとめると次のようになる。

音韻を選んだもの	11
文法を選んだもの	10
音韻・文法を選んだもの	6
音韻・文法・語彙を選んだもの	2

未詳（本論未着のため）

1

2. (B) を選んだもの

- (1) それぞれの県における方言研究の概観を主に報告したものは次の諸氏である。20名。

小松代融一（岩手），田口美雄（茨城），多々良鎮男（栃木），池之内好次郎（埼玉），大岩正伸（千葉），佐藤茂（福井），前田勇（大阪），和田実（兵庫），井之口有一（滋賀），佐藤誠（奈良），棟垣実（和歌山），武田明（香川），杉山正世（愛媛），生田弥範（鳥取），岡義重（島根），虫明吉次郎（岡山），小野志真男（佐賀），井上彰（長崎），原田芳起（熊本），岩本実（宮崎）

多くの人が従来の研究は語彙が中心であり，今後の課題として音韻・文法などの科学的調査研究を必要とすることを述べている。

- (2) みずから調査研究により言語状態の概観をもあわせて述べているものは次の諸氏である。6名。

石垣福雄（北海道），芳賀綏（北海道），一谷清唱（福島），金田元彦（神奈川），覧五百里（岐阜），土居重俊（高知）

- (3) みずから調査研究により言語状態の概観だけを述べたもの。1名。
北山長雄（青森）

3. (C) を選んだもの

- (1) 藏王開拓地における児童言語の調査（宮城，佐藤喜代治）

- (a) 遠刈田中学校など4校，児童・生徒数41名
(b) 調査項目；特徴形の場合と同じ

- (2) 疎開児童の言語調査（群馬，中沢政雄）

- (a) 大箇野小学校など4校
(b) 調査項目；ガ行鼻音，母音 i・e の中舌化など音韻5項，文法2項，語彙3項（音韻93語例，文法2例，語彙3例）

(3) 疎開児童・生徒の言語調査（長野，青木千代吉）

(a) 飯田市の小・中・高校，232名

(b) 調査項目； $i \sim i$, $w \rightarrow w$ など音韻5項，アクセント3項，（音韻16例，アクセント10例）。

(4) 疎開生徒・児童言語調査報告書（静岡，望月謙三）

(a) 大井川から富士川までの小・中・高校，365名

(b) 調査項目；アクセントとして，クモ（雲・蜘蛛），アサヒ（朝日・新聞名）など15語例

音韻として，カエル（蛙），ワリアイ（割合）など9語例

文法として，行こうかしら，来るかも知れないなど10例

語彙として，走りっくらなど3語例

4. (D) を選んだもの

(1) 秋田方言の国語学的観察（北条忠雄）

秋田方言における「類推」により生じた語法現象の観察，用言の観察，表現の特質などについて論じたもの

(2) (a) 開拓移住部落——最上郡萩野村昭和——の言語実態調査

(b) 言語の島「山形市香澄町弁」の調査

(c) 山形県立楯岡高等女学校の言語改善に関する記録

(d) 米沢新聞所載米沢弁転写（以上，斎藤義七郎）

(a) は挨拶用語など17項目にわたり青年学級生徒27名について調査したもの

(b) は音韻，文法，語彙など147語例により旧土族3名を調査したもの

(c), (d) はそれぞれ筆者の転写したもの

(3) 石川方言におけるアクセントと言語分布（岩井隆盛）

石川県各地のアクセントの型、語彙の分布、文法の分布を調べ石川県方言区画を試みている

(4) 丹後言葉と丹波言葉（京都、奥村三雄）

アクセントの分布を中心として丹後方言と丹波方言との対立関係を考えたもの。丹後・丹波地方の方言区画を試みている

(5) 滋賀方言の音韻・語法・語彙概要（井之口有一）

(6) 九州東北部における形容詞語尾活用の吟味（福岡、都築頼助）

形容詞の語尾について古来の研究、方言の状態、文語の状態、九州東北部における著者の調査などに基いて論じたもの

（飯豊）

附 記

この原稿を書いた後、現在までに到着した報告書を附記する。

1. (A) を選んだものの追加

(31) 岡山県地方言語の特徴形の実態調査の報告（虫明吉治郎）

調査項目；アクセントとして、三音節形容詞のアクセントの一型化現象
文法として、尊敬の助動詞「れる」「られる」の命令形について

(32) 地方言語の特徴形の実態調査（山口、原安雄）

調査項目；ザ行音>ダ行音への移行、……ちょる（おきちょるなど）

2. (B) を選んだもののうち、(1) 方言研究の概観を報告したものの追加

斎持隼一郎（新潟）、原安雄（山口）

全国方言語彙の調査

A. 前年度までの進行状況

前年度から、東条操氏採集の方言語彙カードを中心とする全国方言語彙の五十音別、地域別、事項別索引の作成を計画してきた。第一年度である前年度には、1949年10月から1950年2月までの4か月間に、12人の補助者の協力を得て、まず地域別方言カード作成の作業から着手し、この間の作業量は186,042枚であった。

B. 担 当 者

中村通夫、飯豊毅一、石川咲子、山内壘子、

C. 計 画 と 実 施

前年度に引き続き方言カード作成の手順を次の通り計画した。

(1) 地域別方言カードの作成は1950年4月から10月までの6か月間にその作業を終了する。

(2) ついで、事項別方言カード作成の作業に取りかかり、その大半を終る。この計画に従って、次の通り実施した。

D. 本年度到達した成果

地域方言カード 318,000枚

内訳	4月	16,000枚	5月	28,000枚
	6月	40,000枚	7月	40,000枚
	8月	70,000枚	9月	80,000枚
	10月	44,000枚		

事項別方言カード 196,000枚

内訳	11月	10,000枚	12月	50,000枚
	1月	50,000枚	2月	50,000枚
	3月	36,000枚		

地域別カードは完成し、事項別カードはその全作業の $\frac{1}{2}$ を終了した。

E. 次年度の見通し

この作業は当初2年計画で進められたが、予算の関係で、事項別カードの約半分と、その整理および索引との作成が持ち越しとなったが、次年度の前半期までには完成をみる予定である。 (中村)

現代書き言葉の調査研究

A. はしがき

現代の書き言葉としては、必ずしも共通語ばかりが問題ではないけれども、標準語の確立をめざす立場からは、共通語としての範囲において、書き言葉を取扱うことが、第一着手として必要だと考えられる。それゆえわれわれは、24年度に、共通語の実態として、書かれた資料をまず採上げて調査を始めたのである。

われわれが24年度に採上げた項目は、文法、語彙、文型、表記法の四つであったが、24年度中には、みな成果を十分まとめるには至らなかった。われわれは25年度には、手広く分担する代りに、出来るだけ問題を限り、共同作業として集約的に成果を築いてゆきたいと望み、年度中に作業の一応のまとめを得ることを期待して、次の三項目を選んだ。

現代語の助詞・助動詞の調査研究（1）

新聞語彙の調査研究（2）

婦人（生活）雑誌の語彙の調査研究（3）

(1)と(2)とは、24年度の継続であって、(1)は永野賢、(2)は林大、斎賀秀夫が24年度の通り担当し、(3)は健康その他の事情によって、第2研究室の全員がそろうのを待ち、年度後半から新たに全員で開始することにした。実際には、(1)と(2)の作業が年度後半にまで及んだので、(3)はその大綱を研究室内の打合せによって決しつつ、主として大野弥穂子、宇野義方、水谷静夫がカード採集の準備および採集実施を企画し管理した。なお26年1月から3月までは、研究員古田東朔がこれに参加し、また(1)(2)(3)にわなって、前後19人の臨時筆生が協力した。

なお、(3)の項目を選ぶ前に、大野・水谷の手によって、昭和20年11月から昭和24年10月までの総合雑誌および文芸雑誌の記事の筆者別による索引がほぼ出来ていたので(8月にプリントされた)，それを資料台帳として、混乱期における表記の実態を統計的に記述する計画も考えられたが、結局は割愛した。しかし表記法に関する問題は、語彙調査として重要な部分を占めるのであって、(3)の作業では、それも大きな目標の一つとなっている。

B. 現代語の助詞・助動詞の調査研究

1. 計 画

昨年度に引き続き、現代共通語における助詞・助動詞の意義と用法との分類・記述を、一応完成することを目標とした。

これがため、48,000枚の用例カード(1949年から50年にかけて発行された各種の新聞・雑誌34点から、昨年度採集したもの)を整理し、これを、1冊の書物(辞書的な体裁のもの)にまとめることとした。

2. 実 施 状 況

意義分類の準備作業が4月中旬にほぼ完了したので、5月から、最後の整理に取りかかった。

また、第2研究室員や、他の研究室の所員の助言をうるために、できあがりのモデルの報告を、7月の中旬におこなった。

原稿の済書は、索引を除き、2月18日に完成、翌19日に印刷所に渡した。

3. 成 果

3月下旬に、成果を刊行した。

(a)書名 『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』

(b)体裁 A5 302ページ。

(c)内容 現代口語における助詞・助動詞の意義・用法を細かく分類し、そのおののに用例をいくつかずつ附したもの。これ

に、語形の索引と、意義の索引とが附してある。

C. 新聞語彙の調査研究

1. 計画

全体の計画（調査研究の目標・対象・方法等）については、24年度の年報に報告した（国立国語研究所年報I 97～99ページ）。24年度には、調査対象である朝日新聞東京本社の東京最終版の、1941年6月1日から30日までの全紙面から、総計約24万枚の語彙カードを探集するにとどまり、整理はほとんど25年度に持ち越された。25年度は、年度内に一応の結果を出すことを目標にして、次の作業を予定した。

- (a) 採集カードの整理・集計
- (b) 語彙表の作成
- (c) 結果の分析と記述

2. 実施状況

a. 採集カードの整理・集計

(1) 整理の準備

採集済みのカード約24万枚について、点検・補正し、別に定めた記事別の符号を各カードに記入した。これは、24年度末にすでに着手していた作業である。なお、30日間の全記事について、その記事別、カード枚数を一覧出来るように記事別台帳を作った。

(2) カードの分類

採集したカード全部を、まず 1. 無活用語（3を除く）、2. 活用語、

3a. 固有名詞、3b. 数詞の四つに分類した。

(3) 五十音順による排列

(2)の 1. 無活用語と 2. 活用語とのカード（約20万枚）を、それぞれ日々に五十音順に並べた。

(4) 接辞サブカードの作成と排列

(2)で分類された全カードを点検しつつ、接辞的部分を別のカードに書きぬいて、総計約4万枚のサブカードを得た。これを4a.接頭的部分、4b.接尾的部分（助数詞を除く）、4c.助数詞の三類に分けて、それぞれ五十音順に並べた。

(5) 整理カードへの記入と集計

五十音順に並べ終った1.無活用語、2.活用語、4a.接頭辞、4b.接尾辞、4c.助数詞のカード（今かりに採集カードと呼ぶ）約24万枚について、語ごとの使用度数を、日ごとに、更に1日の内で記事別に、数えて、別に用意した集計用のカードに記入した。記入が終った後、もとの採集カードと集計用のカードとを読み合せながら、これまで日ごとに整理されていた採集カードを、語ごとに集結した。

(6) 集計カードの点検と排列

(5)の集計では、まだ、仮に定めた単位におけるそれぞれの語について、それが単独に用いられる場合、複合語の部分になっている場合などで、別別の集計カードに記入されているので、一つの語ごとにそれらをすべて合算した集計の親カードを作り、もとの集計カードは子カードとして、上部に赤い線を引いて明らかにした上、親カードの後に一括した。（もとの集計カードがそのまま親カードになって、子カードを持たないものも、もちろんある。）なお、この際、改めて五十音順の排列に検討を加え、また4.接頭辞として採集した語を、便宜上1.無活用語の中に移した。（両者の間には、所属のにわかに定めがたい語があったためである。）

b. 語彙表の作成

(1) 語彙表の作成の準備

集計カードは、日ごと記事別ごとの細部にわたる記入があり、一つの台帳の役目を持つものであって、かつ形の上でもその後の作業に不便なので、別

に簡単な形式の、度数のカードを作った。これは、集計の親カードごとに、集計されているその語の総使用度数と総使用日数とのみを写しとったもので、全用語を使用度数順に並べる際に用いられ、またその後の各種の分析にも役立てられた。

(2) 五十音順による語彙表

集計カードを台帳として、語ごとの調査期間の全体を通じての総使用度数と総使用日数とを記した語彙表を、a(5)のそれぞれの部類について作った。

(3a)(1) 参照)

(3) 使用度数順による語彙表

(1)の度数のカードを使って、1. 無活用語と2. 活用語につき、それぞれ使用度数順に語彙表を作った。(3a)(2) 参照)

c. 結果の分析と記述

30日間の用語の推移、記事別と用語との関係などについて、数種の図表を作って、分析を試みた。

以上の調査の経過については、語彙表・図表の一部と共に、その概略をまとめてプリントにした。(「新聞語彙の調査の概要」1951, 3, 16)。全般に関しては、近く活版印刷によつて刊行出来るように準備中である。

3. 成 果

調査の成果として得られたものは、次の通りである。

a. 語彙表

(1) 使用度数順による語彙表

(a) 無活用語の部

(b) 動詞の部

(c) 形容詞の部

(d) 接尾辞の部

(e) 度数 100以上のものにつき、以上各部の語を総合したもの

(2) 五十音順による語彙表

	(語種の数)	(総使用度数)
(a) 無活用語の部	1,1826	14,8500
(b) 動詞の部	2035	5,2333
(c) 形容詞の部	324	4573
(d) 接尾辞の部	511	1,9840
(e) 助数詞の部	203	1,1144
(f) 接頭辞の部	214	5368

(2)の表では、参考のため、それぞれの部に属する語種の数と総使用度数とを附記した。固有名詞と数詞については、語ごとの整理をしなかったが、その総使用度数は次の通りである。

固有名詞	2,3441	数詞	1,4229
------	--------	----	--------

接頭辞は、(a)無活用語の部の中でも数えられている。(2a(b)参照)

無活用語については、更に次のような種類を分け、それぞれ別表とした。

	(語種の数)
a 1. 漢語の部 (漢字別五十音順)	8086
a 2. 和語の部 (a5, a6を除く)	2853
a 3. 漢語と和語とから成る複合語の部	304
a 4. 洋語系の外来語の部	713
a 5. ヨソアド系の語の部 (感動詞・接続詞に属すべきものをも含む)	124
a 6. その他の語の部	246

b. 分析

結果については、次のような問題を考察した。

(1) 30日間の用語の推移

(a) 日ごとの総使用度数の30日間の推移

- (b) 語数と平均使用度数の使用日数別分布
- (c) 新出語数の30日間の推移
- (d) 度数100以上の語の使用度数と使用日数との関係
- (2) 記事別と用語との関係
 - (a) 総使用度数の記事別分布
 - (b) 使用度数順位と記事別分布との関係
 - (c) 記事別による語の出現傾向
- (3) 用語の品詞別

D. 婦人(生活)雑誌の語彙の調査研究

1. 計画

現代の書き言葉として、材料の最も収集しやすい形態をそなえ、かつ分量も多く読者も広いものは新聞・雑誌・教科書などであるが、われわれは、そのうち雑誌を探り、雑誌のうちで日常家庭生活に関連する所の深い婦人(生活)雑誌における用語を調査対象に選ぶことにした。年度後半の作業能力としては、15万前後のカード採集が考えられるので、雑誌「主婦之友」(昭25・1~12)の12冊について標本調査を行うこととし、そのカード採集の完了まで、すなわち採集までの準備、カード採集とカード管理を、25年度の作業に予定した。

2. 実施経過

a. カードの採集までの準備

具体的には、9月下旬に雑誌編集者側から予備知識をうるために雑誌社を訪問することから始めて、12月下旬までに次のような作業を行った。

(1) 調査台帳の作成

語の総度数を推定する手順として、すべてのページを段組の形式によって7個の段組別層に分類した段組別台帳を作り、カード採集箇所の決定および

結果の分析のために、すべての記事をその性格によって4個の記事別層（第二次層を数えると15層）に分類した記事別台帳を作った。

記事別層 A層 特別記事・興味読物

B層 実用記事（衣・食・住・健康・教育・法律・経済・
美容・稽古事・雑）

C層 小説

D層 豪華口絵（BCに入るものを除く）、読者文芸、編集
日記、その他

(2) 語数の推定

12冊の雑誌全体の含む用語（調査上定めた単位）の総使用度数と、1ページ当たりの平均の度数について、層別副次抽出法により、次の推定値を得た。

	度 数	精 度
調査単位総数	993365	1.6%
ページ当たり平均（段組別）		
第Ⅰ層	160	12.0
第Ⅱ層	385	3.9
第Ⅲ層	403	3.5
第Ⅳ層	439	1.6
第Ⅴ層	156	5.7
第Ⅵ層	243	4.0
第Ⅶ層	295	4.1

(3) 抽出方式の比較

カード採集の箇所を定めるために、標本をぬき出す単位として、ページを探るか、行を探るかの優劣を、模型調査を行って比較した。その結果は、どちらの単位でねいたにしても、語の度数順位や、語の種類の広さに関して、著しい甲乙が認められなかつたので、作業上の便を重んじて、ページを抽出

単位に採ることにした。

(4) 採集箇所の決定

記事の性格に基く層別比例抽出法に従い、現在の採集能力から適當であるとして見積ったカード数（語数）15万を、層ごとの用語の推定総度数をウェイトにして、各層に割振った上、それをページ数に換算し、結局、実際にカード採集を行うページとして521ページを決定した。

(5) ぬきばりの作成

カード採集を行う箇所（ページ）ごとに雑誌から切りとり、台紙にはりつけ、台紙の左上のすみに標本番号をうって、これを「ぬきばり」と呼ぶことにした。ぬきばりを作ったのは、同時に多人数の作業を行い、検索に便じ、また原本のいたみを防ぐためである。

(6) 作業手引書の作成

カード採集には、相当数の臨時の補助者を使うので、作業の質を一定に保つ必要から、それら補助者への手引書として、「カードのとり方」16項目を、研究室の全員で検討の上、執筆しプリントした。

以上の準備作業の詳細については、プリント「婦人（生活）雑誌語彙調査報告草案—I 準備作業について」(1951, 2, 20) を作成した。

b. カードの採集と管理

(1) カード採集

(a) ぬきばりへの注記

採集者が採集の単位に迷わないように、ぬきばり本文に色鉛筆で単位ごとの切れ目を記し、またカードに注記を要する事項についての指示を、ぬきばりの上に書き入れた。この作業は、主として所員みずからが行った。

(b) 作業の開始と進行

かねて依頼しておいた、カード採集のための補助者（主として所外の学生または専門学校卒業者）に、12月25, 26日の両日のうち任意の日に集合を求

め、ぬきぱり、カード、手引書を渡して指示を与える、作業に取りかからせた。採集者の顔ぶれは、その後多少変った。

(2) カード管理

採集者から納められたカードは、「カードのとり方」に照らして必ずしも完全でないので、どのような程度の欠点が生じうるかを知ると共に、発見出来る限りこれを補正し、また注意を与えることによってその後の作業の質を向上させる必要がある。そのために「不適格箇所の記録表」を作って、ぬきぱりごとに出来上ったカードを点検して、欠点を記録することにした。この作業は、主として所内の臨時筆生にプリント「不良カード調整のしかた」および「カード点検の手引」(1951, 2, 10) を与えて行わせている。

3. 成果および来年度の見通し

雑誌から語彙調査の標本をぬき出す方法は、はじめて試みられたもので、プリント「報告草案—I 準備作業について」はこの点でも独立に意味を持つものと思う。

語彙調査としては、まだ成果としてあげるべきものはない。われわれは、26年度の作業として、各種語彙表の作成、表記に関する調査、意味論上の各種の分析、他の同種雑誌との比較、などを予定している。 (林)

国語学力標準設定に関する 調査研究

A. 前年度までの調査研究のあらまし

前年度は、表題への第一の着手として「読解力」の問題を取り上げ

1. 文章の読解力とは何か——それはどういう力か
2. 教育課程の上で読解を要求されている文章はどういう文章か
3. どういう読解の仕方が教育課程の上で要求されているか
4. 1年～12年の文章の読解力発達のあらまし

について、一応の調査をした。そして、もしこれを「読解力の標準テスト作成」の方向に向けるなら、漢字力の発達や語彙力の発達についても準備が必要であることが痛感された。そのうち「漢字力」については、当用漢字およびその別表の制定によって、わくが決められているから、必要なことはその学年配当だけである。ところが、「語彙」の方は、そうしたわくが無いからとらえにくい。しかし、なんとかして多少の見通しをつけておかなければならないし、それに、語彙力の検査のための「語彙尺度」は、学力標準設定の中の一問題として重要な地位を占めているから、本年度は語彙の問題を取り上げることにした。

B. 本年度の調査研究のねらい

- 1 1年～12年の語彙力の発達のあらましを知る。そして、1年～12年の各学年の語彙範囲を代表する 200語ぐらいずつの語彙表を作る。
2. 語彙力検査上の問題の解決
 - a. 語を知っているというのはどういうことか——その語を定義出来

るということと使えるということとの関係

- b. 人が語を知っていると思っているのは、本当に知っているのかどうか。どこまで信頼されるか。

この目標の1は「語彙尺度」の制定であり、2のaは語彙力の検査方法の決定と同時に、語彙の指導方法の決定にも寄与する。2のbはいろいろの語彙調査、特に、研究所で別に取り上げている「学習基本語彙」の調査に側面的な寄与をすることが出来る。

C. 本年度の調査研究の計画

1. 1年～12年の各学年について検査すべき基本的な語彙 200語以上を選び出す。
2. これについて予備調査をする。その結果をまとめて、目標に対する一応の見通しを得る。
3. その成果に基づいて本調査をする。

D. 担 当 者

所員 舟水 実 芦沢 節

語彙選択のために協議会を作り、所外から次の諸氏の協力を得た。

沖山 光氏 (文部省)

馬場 正男氏 (成城学園初等学校)

増田 三良氏 (東京都神谷小学校)

倉沢 栄吉氏 (東京都指導主事)

安藤新太郎氏 (〃)

鳥山 森名氏 (山梨大学教授)

テストについては次の学校の協力を得た。

東京学芸大学世田谷分校附属小学校

東京学芸大学世田谷分校附属中学校

東京都赤城台高等学校

E. 実 施 概 要

計画のうち、1,2,しか出来なかった。4月から6月まで、委員の協力を得て語彙を選んだ。しかし、やってみると各学年に 200語を配当するのは無理だというので、12年を4段階に分けた。

小学校低学年 (1年～3年) 問題形式 A

小学校高学年 (4年～6年) 問題形式 B

中 学 校 (7年～9年) 問題形式 C

高 等 学 校 (10年～12年) 問題形式 D

の各段階について 200語以上ということにした。その結果別掲の「語表」が出来た。これに次のような「手びき」と「教示」をつけて、7月初旬にテストを実施した。その結果の整理に非常な労力をかけたことと、あとで述べるような語彙力検定の複雑さ、仕事の広範囲なことなどのため、予定した3まで実施出来ず、また3を実施しても1の基礎が十分でなかったから更に基礎を作り直してかかりたいということになって、その代りとして、2の整理に念を入れた。

〔手 び き〕

I このテストはA (1～3年), B (4～6年), C (7～9年), D (10～12年) の四種に分っています。どれも二百余語の語表で、それに生徒の熟知の度合を書かせ、知っているものについてその意味を問うのです。

II この調査のねらいは次の三つです。

- (1) これらの語について客観考査の問題を作る場合に、「正しい意味を選択させる」というテスト方法に適しているのはどの語かを決定する。
そしてその選択肢を選び出す。
- (2) 選択法でなく「短文を作る」とか「関係のある語をつなぐ」というテスト方法がよい語はどれであるかを知る。

- (3) 生徒の主観的な判定による熟知の度合と、客観的な説明力との関係を見る。
- III このテストは勉強の間に一枚(30語)ずつやってください。
初めに「やりかた」のところをよく説明してください。必要があれば読んでやってかまいません。
毎回の時間は限りません。大体の者が出来たところで(終ったところで)集めてください。
ただし所要時間をはかっておいてください。
- IV 全部のテストがおすみになったら答案を一括し、別紙整理用紙にお書き込みの上、国立国語研究所第四研究室にお返しください。——1950. VI——

[教 示]

Aの教示 (B, C, Dも大同小異)

このテストには、みなさんの、よく知っている語や、よく知らない語が210出ています。

I だい一に、その語の上につぎのしるしをつけるのです。

よく知っている ○

知っているけれどもはっきり答えられない √

きいたことはあるがよく知らない △

知らない(はじめてみた、はじめてきいた) ×

たとえばつぎのようになります。

○ あかぎれ

× あえぐ

√ そくりょく

△ そんけい

√ けわしい

II それが終わってから、だい二に、その語の下に

(1) いみ(意味)のわかるものは、その意味を書く。

(2) 意味の書きにくいものはたんぶん(短文)を作ってもいい。

(3) にている語、かんけいのある語を書いてもいい。

(4) どうしても書くことのできないものは、そのままで何も書かない。

たとえば、つぎのようになります。

○あかぎれ——ふゆになると あしにできる。

×あえぐ —

√そくりょく——はやさ

- △ そんけい ——せんせいをそんけいする。
 √ けわしい ——けわしい山

〔語 表 A〕

あまだれ	くべつ	つもり
あめあがり	けっか	つみ
ありさま		ていねい
ありのまま	けんこう	テーブル
あんぜん	けしき	でんせん
いじょう	けんぶつにん	
うりば	こうつう	てつきょう
うてん	ごご	でんぱう
えいがかん	さいちゅう	てつだい
えんりょ	さいしょ	とかい
	さしつ	とびら
おうらい	さんせい	どて
おうえん	しかえし	なかま
おんど		にせ
おき	しんぱい	にぐるま
がいこく	しんごう	にもつ
かもつ	しょうこ	
かんけい	しょうぼう	ぬま
がまん	せつめい	ねびえ
がくしゃ	せわ	ねだん
かせい	そまつ	ねじ
	そうだん	のんき
かてい	たんじょうび	のきした
かいしゃ	ちゅうおう	ばんにん
かぞく		はず
きねん	ちょうじょう	はいたつ
きし	ちょきん	はなみ
くちぐせ	ちゅうい	
くさむら	ちこく	はなざかり
くき	ちかみち	はきもの

はなび	ゆうえんち	とがる
はがき	ゆげ	とびのる
ひみつ	よみせ	なれる
ひとりごと	よめ	ながめる
ひぐれ	よけい	にあう
ふじゅう	ようす	にぎる
ふだん		
ぶじ	よなか	ぬる
	ようじん	ねだる
へや	ようい	ねらう
ベル	らんぼう	はやる
へんじ	らいげつ	はねる
へいき	りょうし	はこぶ
ほうそう	りっぱ	ふりむく
ぼうけん	るすい	ふさぐ
ほり	レール	
まわりみち	ろうか	ほねおる
まちかど		みはる
まご	あびる	みなおす
	いただく	みおくる
まいご	うしなう	めだつ
みぞれ	うたがら	ゆれる
みかた	えらぶ	わびる
むだ	かがむ	すばらしい
むり	かがやく	つめたい
むちゅう	きく	のろい
めす	しめす	
めかた	しぶる	はげしい
めあて		まちどおしい
もうしわけ	せおう	まぶしい
	たどりつく	めずらしい
もちぬし	たずねる	やわらかい
やくそく	ちかよる	わかわかしい
ゆうだち	つきあたる	いたるところ
ゆくさき	とりまく	いきなり

かわるがわる	たちまち	
こっそり		ふいに
さっそく	たえず	ぼんやり
しじゅう	ついに	まもなく
しばらく	とうとう	めいめい
しきりに	どうしても	ようやく
ずんずん	とつぜん	あきらか
ずいぶん	なおさら	やっかいな
せっかく	なるたけ	ゆうめいな
ぞくぞく	ひらり	……すると
そよそよ	ひとりでに	もっとも
	ひっそり	

〔語 表 B〕

あてな	きたい (期待)	さくしゃ (作者)
いけん (意見)	きてい (規定)	さいなん
いらい (依頼)	きぼう (希望)	さしわたし
いかい (意外)	ぎせい (犠牲)	しらほ (白帆)
いちどう (一同)	きせつ (季節)	しつもん (質問)
いとこ	きょうどう (共同)	しあい (仕合)
えいせい (衛生)	くせもの	しょうめん (正面)
えいきゅう (永久)	くうそう (空想)	じけん (事件)
えいきょう (影響)	けいかく (計画)	せつやく (節約)
えんじょ (援助)	けいき (景気)	せきにん (責任)
えもの (摸物)	けってい (決定)	せんぞ (先祖)
おっくう (贋助)	けんり (權利)	せんとう (先頭)
かいかつ (解決)	こうふく (幸福)	そんがい (損害)
かいとう (回答)	こうさい (交際)	そつぎょう (卒業)
かいけん (会見)	こじ (孤児)	そんけい (尊敬)
かくだい (拡大)	ごうがい (例外)	たいくつ (退屈)
かいぞう (改造)	こうずい (洪水)	たくわえ (貯)
かいぎ (会議)	こうかい (航海)	たんけん (探險)
かっさい	さいく (細工)	ちょうさ (調査)
から (価値)	さんか (参加)	てにもつ (手荷物)

ていか (定価)	へいぜい (平生)	よくじつ
ていど (程度)	ボスター	よてい (予定)
でんき (伝記)	ほうこく (報告)	よそう (予想)
どりょく (努力)	ほうもん (訪問)	りよう (利用)
とりつぎ (取次)	ほうがく (方角)	りくち (陸地)
なやみ	ぼうふうう (暴風雨)	りょこう (旅行)
なぎ (風)	まんげつ (満月)	
なんぎ (難儀)	マーク	れきし (歴史)
にっき (日記)		れんしゅう (練習)
にほんばれ (日本晴)	まんぞく	れんらく
	まちぶせ	ろばた
ぬかるみ	ま水	ろうどうしゃ (労働者)
ねんれい (年齢)	まきば	ろうじん (老人)
ねんじゅう (年中)	まけおしみ	わりあい
ねっしん (熱心)	みぶるい	あゆむ
のぞみ	みさき	あわれむ
のぼり (上, 積)	みなり	あいどくする (愛読)
のりあい (乗合)	みやこ	
はっけん (発見)	みほん (見本)	あきれる
はとば (波止場)		いけどる
はくしゅ (拍手)	むくい (報)	うなづく
	むこ (聟)	うちとける
バーセント	むしぶし	えぐりとる
ひとり (目取)	むれ (群)	おいぼれる
ひょうばん (評判)	あいわく	くらむ
ひつよう (必要)	めんみつ	こころみる
ひょうほん	メモ	さまよう
ひよう (費用)	めいよ	しめる
ひひょう (批評)	もよう	
ふろく (付録)	やくしょ	する
プログラム		すぐれる
ふきん (附近)	やみよ	たわむれる
	ゆきづまり	たてまつる
へいきん (平均)	ゆだん	ちかう (著)
へいわ (平和)	ゆうすずみ (夕涼み)	つかえる (仕)

つげる (告)	めぐりあう	ただちに
とざす	もとめる	ちょくせつ (直接)
とじこもる	やとう	つかつか
なぐさめる	よじのぼる	つやつや
なだめる	よろける	てんでに
にじむ (謄)	うやうやしい	どうじに (同時)
のがれる	かいがいしい	とりわけ
はかどる	かたじけない	とくべつ
はずむ	けわしい	にわかに
はやる	すがすがしい	はたして
はりあげる	すさまじい	ひっきりなし
ふける (更)	とぼしい	ふたたび
へだてる	なつかしい	ふと
ほこる (誇)	みすばらしい	みるみる
まとめる	ものめずらしい	やがて
まいこむ	うっすらと	ゆったり
みあわせる	おのおの	ゆうゆう
みちびく	おおかた	らくらく
みかねる	ずばぬけて	われがちに
みおぼえる	すくすく	あざやかな
むしる	だいだい (代々)	おごそかな
		つまり

〔語表 C〕

あざやか	おもいやり	かげろう
あくせい (悪性)	おぼしめし	がんちく (含蓄)
アクセント	かいてい (改訂)	がいとう (該当)
あんてい (安定)	かんこく (勸告)	かのうぜい (可能性)
あるじ (主)	かんしょう (干渉)	きょうきゅう (供給)
あとがき	かんよ (関与)	きのう (機能)
うたたね	かくにん (確認)	きょうちょう (強調)
うんよう (運用)	かいひ (回避)	きそ (起訴)
えんかつ (円滑)	かんわ (緩和)	きょうてい (協定)
おもむき	かいぼう (解剖)	きょくめん (局面)

きょうらく (享樂)	だんこう (斷行)	はんにん (犯人)
ぎんみ (吟味)	だとう (妥當)	はずみ
くもゆき (雲行)	たてまえ (建前)	はいせき (排斥)
くし (驅使)	だかい (打開)	ひょうご (標語)
けいやく (契約)	だっせん (脫線)	ひっし (必至)
けんかい (見解)	たいりつ (対立)	ひざかり
けっさく (傑作)	ちょうしゅ (聰取)	
こくさい (國際)	ちゃくしゅ (着手)	ひきょう (卑怯)
こうい (厚意)		プレゼント
こうか (効果)	ちょうかん (長官)	ぶんか (文化)
	ちつじょ (秩序)	ふたん (負担)
こうしょう (交渉)	ちょくめん (直面)	ふかのう (不可能)
こうちょう (好調)	つきあい	ふっこう (復興)
こんきょ (根拠)	ていしゅつ (提出)	ふしん (普請)
しゅうり (修理)	てはい (手配)	ふうぞく (風俗)
じょうけん (条件)	でんたつ (伝達)	ぶんれつ (分裂)
しょり (処理)	てってい (徹底)	へさき (触)
しれい (指令)	てんかい (展開)	
じょうほう (情報)	でんとう (伝統)	へいぼん (平凡)
しょうにん (承認)		へんしゃ (編者)
じょうほ (譲歩)	てんぼう (展望)	ぼしゅう (募集)
	とくちょう (特徴)	ほじゅう (補充)
しょぶん (処分)	どくとく (独得)	ぼくし (牧師)
しゅうしゅう (收集)	とうひょう (投票)	ほうねん (豐年)
じんじょう (尋常)	とくしゅ (特殊)	ほうしん (方針)
ぜんしょ (善処)	トランク	ぼうし (防止)
せいめい (声明)	なだれ (雪崩)	ほしょう (保証)
せつび (設備)	ないよう (内容)	ほうき (放棄)
せつりつ (設立)	ねつじょう (熱情)	
そよかぜ	ねつい (熱意)	みじん (微塵)
そうぞう (想像)		みぶん (身分)
そっちょく (率直)	はけん (派遣)	むしん (無心)
	はいきゅう (配給)	むじゅん (矛盾)
そうさ (捜査)	はってん (發展)	めいじん (名人)
ダム	はんじょう (繁昌)	めいにち (命日)

めんぱく (面目)	たくらむ	あっぱれ
めいじ (明示)	ついぱむ	いぜん (依然)
もくひょう (目標)		いったん (一旦)
もうしいれ(申し入れ)	つのる (募)	いちおう (一応)
	つくろう	いやしくも
もほう (模倣)	つぶやく	いっこう (一向)
やくわり (役割)	とりすがる	うねうねと
ゆうぼう (有望)	とりなす	おもむろに
ゆくえ (行方)	とがめる	かねて
ようきゅう (要求)	になう (荷)	くれぐれも
よそく (予測)	のしかかる	さんざん
ようし (要旨)	のぞむ (臨)	さも
ようご (擁護)	ひかえる	さすがに
よゆう (余裕)		しゅうじつ (終日)
りそう (理想)	ひたす	しおしお (萎)
	まぎれる	すかさず
れんごう (連合)	まどわす	とうぜん (当然)
ろうにん (浪人)	まかなう	ひそかに
わな	まぬがれる	まさか
あざける	みとめる (認)	むしろ
あなどる	みとれる	もろとも
いたわる	めかす	やや
うけたまわる	もがく	いっぽうてきに (一方的)
うらづける	もてあます	うららかな
うおうさおうする (右往左往する)	もてなす	ぐたいてきな(具体的)
おびえる	もよおす (催)	すこやかな
かんがみる	もつれる	のどかな
さえる (涙)	いまいましい	ばくだいな (莫大)
すがる	けたたましい	ほがらかな
そこなう (害)	たくましい	そもそも
そなえる (備)	はてしない	…………次第
たたずむ	まぎらわしい	
ためらう	めざとい	
たなびく	もろい	

〔語 表 D)

あかじ（赤字）	ぎょろう（漁撈）	しゅうち（周知）
アカデミー	きょうい（脅威）	しんし（真摯）
あんごう（暗合）	きゅうへい（旧弊）	スローガン
あんぱい	きょううち（墳地）	すずなり（鈴生り）
インフレーション	きゅうめい（究明）	せっちゅう（折衷）
いんし（因子）	くびっぴき	せつな（刹那）
いんしゅう（因襲）	くもがくれ	せんこう（専攻）
いはん（違反）	くんぶう（薰風）	そし（阻止）
いかん（移管）	ぐうい（寓意）	そんしょく（遷色）
ウイット	ぐまい（愚昧）	ぞうけい（造詣）

うちあわせ	けんとう（検討）	そち（措置）
えんじゅく（円熟）	げいごう（迎合）	そや（粗野）
おうへい（横柄）	けいもう（啓蒙）	だきょう（妥協）
おおしゅう（押収）	こんせい（懇請）	たんぽ（担保）
おもかげ	こちょう（誇張）	たいほ（逮捕）
おぼろ	こうてつ（更迭）	たいしょう（対象）
かんしょう（感傷）	こうでい（拘泥）	たいしょう（対照）
かいぎ（懷疑）	こうばい（勾配）	たいけん（体験）
かんねん（観念）	こうてい（肯定）	たいけい（体系）
かくしん（核心）	さいけつ（探決）	ちょうてい（調停）

かんいっぽつ（間一髪）	さっしん（刷新）	ちんじょう（陳情）
かんのう（官能）	しゅかん（主觀）	ちめいしう（致命傷）
かんよう（涵養）	しょうちょう（象徴）	ちょうえつ（超越）
かんろく（貫録）	しや（視野）	ちゅうよう（中庸）
がでんいんすい （我田引水）	しゅくめい（宿命）	ちほうしょく（地方色）
かんこつだつたい （換骨脱胎）	しょうち（招致）	ついづい（追隨）
かいむ（皆無）	しきん（資金）	つうぞく（通俗）
かたくな（頑）	しんしゃく（斟酌）	ついとう（追悼）
きえ（帰依）	じょじょうし（抒情詩）	ていけい（提携）
きんこうよさん （均衡予算）	しぐさ	てっぱい（撒廃）

でいちょう (低調)	ひにく (皮肉)	モット~
でいかん (定款)	ひつせん (必然)	やくどう (躍動)
でいしょく (抵触)	ひよりみ (日和見)	ゆうし (融資)
てんけい (典型)	ひょうか (評価)	ゆいしょ (由緒)
ていとう (担当)	ひはん (批判)	ゆとり
でんしょう (伝承)	ふんそう (紛争)	ゆさん (遊山)
てつとうでつび (徹頭徹尾)	ふうりゅう (風流)	
とうけつ (凍結)	ふくし (福祉)	ユーモア
どうこう (動向)	ふかかし (不可解)	よとう (与党)
とうめん (当面)	ふえん (敷衍)	ようせい (要請)
とうひ (逃避)	ふうし (諷刺)	ようせい (陽性)
とうき (投機)	ふんいき (霧囲気)	らいさん (礼賛)
どくそう (独創)	ぶんせき (分析)	りせい (理性)
とせい (渡世)	へんさい (返済)	りれき (履歴)
とほう (途方)	へきえき (辟易)	りゅうい (留意)
なっとく (納得)	へいこう (平衡)	りょうよう (療養)
なおざり	べんめい (弁明)	るふ (流布)
にんい (任意)	ほうじゅう (放縱)	れんけい (連携)
にんしき (認識)	ぼっこうしょう (没交渉)	レクリエーション
ねんごろ	ほんしつ (本質)	れんりつ (連立)
のうりつ (能率)	ほうしゅう (報酬)	れきほう (歴訪)
のわき (野分)	ほんのう (本能)	ロボット
はいき (廢棄)	まぼろし	ろうほう (朗報)
はらん (波乱)	まなざし	ろけん (露見)
はんぷ (頒布)	みめい (未明)	わかい (和解)
はいとう (配当)	みんぞく (民俗)	あせる
はんぱく (反駁)	みれん (未練)	いなむ
はせい (派生)	むほん (謀反)	うめく
はざかいき (端境期)	めいふく (冥福)	うながす
バランス	めんえき (免疫)	うわまわる
ばいかい (媒介)	めいそう (瞑想)	うちきる
ひきん (埠近)	もくよく (沐浴)	うらがきする
		うらぎる

かしづく	もうでる	たんてきに（端的）
ことづける	やつれる	なかんずく（就中）
しのぐ	ゆだねる	なにくれと
じしつする（自失）	あさましい	
	うしろめたい	ひたすら
すさぶ	おぼつかない	まがりなりにも
すぐ	つれない	まんぜんと（漫然）
せっぱつまる	はかない	あからさまに
そこねる	むつまじい	あらわに
だっきゃくする（脱却）		かっきてきな（画期的）
ぬきんでる	やるせない	けんらんたる（絢爛）
ねぎらう	よぎない（余儀）	ちゅうしょうてきな （抽象的）
はぐくむ	あらかじめ	なごやかな
へつらう	あぜん（壓然）	ないし（乃至）
ほつれる	おおはばに（大巾）	
	さながら	ふにおちない
もくさつする（黙殺）	じゅんじゅんと（諄々）	

〔語彙選択の源泉〕

これらの語彙は現行教科書と新聞紙などから選んだ。初め、小学校1, 2, 3学年について現行の文部省および検定の教科書の語彙の頻出度を調査してみたが、そこに頻出している語は、語彙力検査のために必ずしも適当でないということが分った。たとえば「がっこう」とか「おかあさん」というような自明の語が頻出度が高いのであって、その理解を検査することはばかりでない。この検査ではむしろ、児童生徒の語彙範囲の境界線にあるようなものを選定しなければならない。もちろんそれは、何か特殊のもの、難語句のようなものであってはならないが、とにかく、頻出度の高いものがよいとは限らない。そこで、現行教科書に出ているものでそうした境界線にあると考えられるようなものを選んだ。また現行教科書は社会生活の現実の必要に合わせるよりも、読みものとして文芸的な面が多いとも考えられるので、中学校高等学校の段階には新聞紙などからの語彙を補充した。

〔語彙選択の基準〕

このような源泉から集められた語彙を、更に次のような基準によって整理した。

1. 低学年の方で、子供が知っていることが分りきっているものは除く。
2. 高等学校で、特殊なもの、古典に出てくる語などは省く。
3. 固有名詞や動植物名はとらない。
4. 外来語はとる。
5. 全体として、読みもの（童話・説話）などの語よりも生活語の方を主とする。
6. 一群の語の「代表」と考えられるようなものはなるべくとる。（説明後出）
7. 類語で一方がやさしく一方がむずかしいと考えられるように、そこに「発展」のあるものはとる。（説明後出）

〔語彙表の吟味〕

以上のようにして選ばれた語彙が一方に偏しないように、更に次のような吟味をも加えた。

1. 語頭による辞書的配分

辞書やいろいろの語彙表について、「あ」の部は何語であり「い」の部は何語であるかの比率を求め、大体それに合わせた。

2. 品詞的配分

旧国定読本の品詞配分や諸家の児童語彙表によって、全体を200語とすれば各品詞は次のようになるのが適当であることが分ったので、それに従って調整した。

名 詞	100語～120語
動 詞	40語～ 50語
形容詞	10語～ 20語

副詞等 20語～ 30語

計 170語～ 220語

3. 意味的配分

語彙の意味的分類には従来いろいろの試みがあったが、われわれとしてもやはり、「児童生徒の経験の発達」という見地から一応分類してみて、語彙の選択がかたよらないようにする必要を感じた。そこで、国際的体系的なローデジット(P. M. Roget)の分類法をもととして、それにこれまでの諸家の児童語彙の便宜的な分類法などを取り入れ、次の項目を作つて配当してみた。

(1) 自然	例 A うみべ	B 海岸線	C そよかぜ	D 風
(2) 社会	例 A かいしゃ	B やくしょ	C 標語	D スローガン
(3) 人間	例 A りょうし	B 労働者	C 牧師	D ロボット
(4) 状態	例 A ありさま	B もよう	C おもむき	D 雰囲気
(5) 関係	例 A よけい	B わりあい	C 余裕	D ゆとり
(6) 位置	例 A ちゅうおう	B はるか	C ゆくえ	D 核心
(7) 時間	例 A ひぐれ	B 永久	C 終日	D 端境期
(8) 故事詞	例 A どうしても	B つまり	C いやしくも	D ひたすら
(9) 動作(名詞)	例 A てつだい	B 共同	C 処理	D 措置
(10) 動作(動詞)	例 A みはる	B みかねる	C みとれる	D 黙殺する

この各項目に対するA B C Dの語彙数は、もちろん同数ではない。たとえば「自然」に関する語彙はAが最も多い。第9項の動作に関する漢語は中学校高等学校で多くなる。とにかく、こうした分類によって選ばれた語彙が一方にかたよらないようにした。前記の「語彙選択の基準」で説明を後に譲つた「代表」と「発展」ということもこの実例から考えていただきたい。

F. 成 果

成果はまだ十分整理していない。現在までの所で二三の帰結を導き出しておく。

1. ○△×はどれだけ信頼されるか……付表 I 参照

付表 I 主観的な判断と実際の答との関係

周数	学年	総実数	生徒総数	○		-○		V		+○		△		+○		X		+○		印			
				実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%		
A	一年	9422	42	1506	15.9	161	1.7	534	5.5	237	2.5	613	6.6	220	2.3	593	6.2	13	0.13	169	1.7	6	0.06
	二年	9373	41	1624	28.1	173	1.9	3141	33.3	470	4.9	1252	13.2	108	1.1	1526	16.2	5	0.05	49	0.52	15	0.15
	三年	9341	45	1626	62.3	367	3.6	1665	16.7	140	1.4	785	7.8	34	0.34	584	5.8	1	0.01	62	0.62	35	0.35
B	四年	10183	42	4286	42.1	311	3.0	1651	15.3	1051	1.03	731	7.1	270	2.7	1942	1.9	3	0.03	7	0.06	3	0.02
	五年	10531	41	4780	45.3	656	6.1	2343	22.2	766	7.4	962	9.1	132	1.2	683	8.1	3	0.03	74	0.7	32	0.3
	六年	10254	42	6819	60.9	828	8.1	1370	12.6	656	6.0	546	5.0	50	0.9	552	5.0	4	0.04	139	1.1	43	0.39
	計					10614		3340		4889		362		11430		29		500		134			
C	一年	51	5741	668	11.3			$\frac{668 \times 100}{10614} = 31.5\%$		$\frac{862 \times 100}{4889} = 17.7\%$		$\frac{29 \times 100}{11430} = 0.3\%$		$\frac{134 \times 100}{500} = 26.8\%$									
	二年	50	8186	443	5.4																		
	三年	51	3097	683	23.8			$\frac{-O \times 100}{O \text{計}} = \frac{6655 \times 100}{66508} = 10.3\%$		$\frac{+O \text{総計} \times 100}{V+A+X+\text{△}} = \frac{4365 \times 100}{29433} = 14.8\%$													
D	一年	53	6158	1150	18.5																		
	二年	51	5905	662	11.2																		
	三年	36	5410	635	12.0																		
	計			66520	6865																		

a. ○の総計は 66508で、○をつけてはいるが実際の答が誤っていたのは 6837、すなわち10.3%だけはあてにならないことになる。

b. 低学年ではそれが1.7%とか1.8%であるが、だんだんと学年が進むとその比率が増す。すなわち低学年の方が信頼してよい。低学年ほど正直であるということになる。

c. 全然知らないとして×印をつけながら正答の出たものがある。それは、小学校1年～6年で0.3%あって、この印はかなり信頼されるということになる。中間の△と△の印の中の正答率については小学校1年～6年で31.5%と17.7%である。このようにして○V×の段階づけはでたらめでないということが分る。

2. 定義法と短文法と連想法はどういう関係になるか……付表II参照

a. 語は定義されるものか、定義でなく短文を作る方が容易か という問題。これは付図Iによって示されている。

b. 品詞によって定義と短文と連想とどれが適しているかという問題一般的に、名詞は定義がやさしく、動詞、形容詞や副詞のあるものは、

短文を作ったり類語、対語をあげるのがよいと考えられているのであるが、これについては付図Ⅱ参照。

付図 I 学年段階による定義・短文・連想の比率

(A)	定義 63.2 %	短文 25.6 %	連想 7.5 %	欠 3.7 %
(B)	定義 76.0 %	短文 22.0 %	連想 2.0 %	欠
(C)	定義 57.1 %	短文 31.5 %	連想 7.3 %	欠 4.1 %
(D)	定義 67.3 %	短文 7.2 %	連想 9.8 %	欠 15.7 %
(計)	定義 65.1 %	短文 22.2 %	連想 6.7 %	欠 5.0 %

付図 II 品詞による定義・短文・連想の比率

名詞	(定義) 75.6 %	(短文) 15.5 %	(連想) 8.9 %
動詞	(定義) 67.0 %	(短文) 29.4 %	(連想) 5.6 %
形容詞 副形容詞	(定義) 59.7 %	(短文) 29.2 %	(連想) 11.1 %
副詞	(定義) 54.6 %	(短文) 43.2 %	(連想) 2.2 %

c. 学年によって定義の力や短文を作る力がどう発展するか……付表Ⅱ参照。

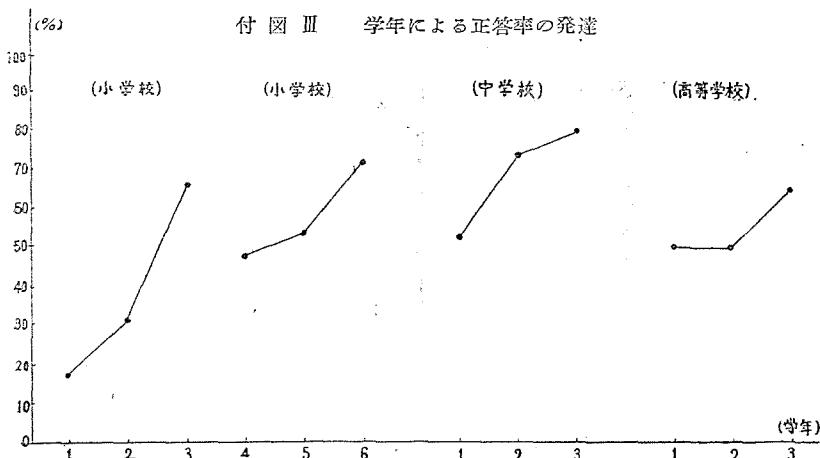
短文を作る力が中学校で急に増している。ところが、高等学校でその

付表 II 定義と短文と連想との関係

力が案外増さないよう見るのは、一つは、「教示」において定義法を第一、短文法を第二としたからである。もう一つは、学年が進むとやはり定義する力も増してくるものと思われる。

3. 語彙の力の学年的発達

a. これについては語彙表A B C D いちらいの語について各学年の正答数一覧表を作ったのであるが、これによつて何年生はどの語をどのくらい知っている、どのくらいしか知らないことが分つた。全体として童話や物語関係の語は、昔の児童語彙の調査では成績がよかつたが、この調査では成績が悪い。外来語は割合によく知られている。



b. 付図Ⅲは「学年による正答率の発達」をグラフ化したものである。全体として正答率が80%以下で、これらの語彙はややむずかしかったと言える。

しかしこれは「意味を書け」とか「短文を作れ」というやや高度の力の考査であったからで、選択法などによる客観考査であつたらもっと成績がよくなると考えられる。

もう一つ、これは語彙力検査の根本問題であるが、「単語」として取

り出したものはそれだけ困難が伴う。

たとえば、Aの「ありさま」という語について、結果は次のように成績がよくなかった。

	調査人員	○	-○	▽ +○	△ +○	× +○	印欠
1年	42	1		4	3	33	1
2年	41			13 (1)	7	21	
3年	45	8	(2)	10	12	15	

しかしこれを、もし文や談話の中で使っていたら、もっと自然に了解されるに違いない。ある子供はこれを「ありの王さま」と解釈していた。文脈の中で提出した場合と単語のままで提出した場合とでは結果が非常に違うことを考えなければならない。

なお、このテスト用紙では、けい線なしに横書きさせたのであるが、これは低学年には無理な仕事であった。

c. この図で目立つことは、小学校低学年における急な上昇と、高等学校において一般的に上昇率が悪く、ことに1年から2年にかけて上昇していないということである。このテストでは形式をA B C Dに分けてしまって3, 4年, 6, 7年, 9, 10年の両方に試みることをしなかったので、一貫した発達を見ることが出来なかった。

4. 児童生徒の語彙理解の傾向

これについては、用紙A B C Dについて、各最高学年、すなわち、小学校第3学年、第6学年、中学校第3学年、高等学校第3学年について、その答を全部カードに書きぬいて分析した。その結果、これは著しい傾向であると思われた点をあげる。

a. 児童生徒の反応が非常に変化に富んでいて、その考え方方が生活的具体的であること。

高学年になるとやや類型的になってゆく傾向も見出されるが、語の把

握の仕方が予想以上に具体的で、いわゆる現場的であった。

〔例〕「そまつ」(用紙A)に対して

- (1) おとうさまに買っていただいた本をすぐ破ったり、なくす。
- (2) たくさんあるからといって、皆で破ったりする。
- (3) まだ使えるものをすべててしまう。
- (4) おもちゃを買ってきてすぐこわす。
- (5) いいものをすべててしまうこと。
- (6) たいせつにしない。
- (7) 大事にしないでどんどん使うことです。
- (8) こめをむだにしないこと。
- (9) 古ぼけたものや安っぽいもの。
- (10) とてもへんなもの
- (11) いろいろなものを大事にする。
- (12) きたない。
- (13) らんぼう。
- (14) びんぼう。

という正答誤答を含む14通りの答が出ている。この(12)以下は、整理上一応「連想」にした。このテストでは、定義、短文のほか「にている語」「かんけいのある語」をあげさせたのであるが、その「にている」「かんけいのある」の範囲があいまいであり、どういうつもりで書いているか解釈に苦しむ所があって、正答を決めるのに困難した。これは、初めにもう少しあはっきりと決めておくべきであった。が、いずれにしても、児童の答は予想以上に現場性をもったものであって、これは語彙指導に一つの示唆を与える。

b. 音によって語をとらえる傾向が著しい。

検査語彙にはかっことして漢字が示してある(ただし、Aは低学年であるから漢字を示さない)のであるが、

〔例〕「かんしょう(感傷)」に対して

物を見たり聞いたりして味わい批評する。

「かんよう(涵養)」に対して

こういうことが最も涵養です。（注、肝要のつもりらしい）
のようなのが高学年に多い。また低学年では、音の類似による誤読がかなり見出されている。

〔例〕「そうだん」を「そうだ」と見たり、「けっか」を「けっかく」と見たりしている。

c. 全体として、話し言葉の語彙は予想以上に成績がよく、物語や童話の語彙は予想以上に成績が悪かった。

これは検査語彙の選定の時から気をつけていたことであるが、それでも、児童生徒の読みものに多く出ていると考えられる語彙は、多少残しておいた。その成績が悪かった。文語的な語彙は高等学校でも分らなくなっている。そして、新聞用語、スポーツ用語、外来語の成績がよい。

d. そのほか、名詞形で出ているものに動詞形で答えるなどは一般的な傾向である。また、複合動詞（例——「うちとける」「おいぼれる」）は小学校の段階では成績がよくなかった。「する」と「される」とを区別しないような傾向もあった。

以上は大きな傾向を取り上げたもので、そこに児童生徒の語彙の発達の実体をさぐり、語彙指導の方法を見きわめるために数多くの教示を得た。

G. この調査研究の反省と今後の問題

反省の二三は以上にも記したが、今後の問題とからんでもまとめておく。

1. 語彙のグループ化をもう少し考えるべきこと。

その語を検査すればある一群の語彙が検査されるようにグループ化すること。すなわち前に「代表」ということで示したこと。

2. 語彙分類を習得の面から考えるべきこと。

読物語彙、生活語彙、その生活の中でも学校生活とか家庭生活とかい

うような経験と語彙との関係をもう少し考えておくべきであった。これには今後の課題である。

3. 今年度の成果から一つの語彙尺度を作れないことはない。また、読解力テストの文章作成にも一つの手掛りは得られた。しかし検査語彙をもう少ししっかりとした地盤の上にすえておくべきであった。準備が不十分であった。
4. ここに整理したのは、もとは準備テストのつもりであったから、もしこれを単語としてでなく文脈の中で出したり、選択法や完成法でやったりしたら、恐らくもう少しよい成績が得られたであろう。語彙選択の基礎の吟味と共に、こうした検査もやってみたいと思っている。なおこの検査は附属小中学校および都立高校であるから、夏の状況の悪い時であったとはいえ、一般の学校よりは成績水準が高いであろうということも考えられる。

(奥 水)

義務教育終了者に対する 語彙調査の試み

A. 調査の概要

義務教育終了者がどれくらい理解語彙を持っているかを知るため、次のような一調査を試みた。

1. 被調査者 東京精華学園高等部に新たに入学した15名（実施前に準備調査を行った時は17名）
2. 調査方法
 - a. 竹原スタンダード和英辞典所載の見出し語をすべて次のように印刷して検査語彙とした。問題の例を示すと次の通りである。

ナブル（鬚ル）

なち（Nazi）

ナダ（灘）

ナダイ（名代（題）ノ）

ナダカイ（名高イ）

ナダメル（宥メル）

ナダラカ（ナダラカナ）

ナダレ（雪崩）

ナデアゲル（撫上ゲル）

ナデガタ（撫肩）

ナデギリ（撫斬ニスル）

ナデル（撫デル）

ナデシコ（撫子）

.....

.....

.....

ナフダ（名札）

なふきん（a napkin）

ナガレダマ（流丸）

ナガレダス（流出ス）

ナガレデル（流出ル）

ナガレコム（流込ム）

ナガレル（流レル）

ナガレツク（流着ク）

ナガレヤ（流矢）

ナガサ（長サ）

ナガサレル（流サレル）

ナガシ（流シ）

ナガシアミ（流綱）

.....

.....

.....

1. 検査語彙は一枚の紙にほぼ 100 語を収めた。
2. 検査語彙には a より z に至るまで一連番号をつけた。
3. 検査語彙総数の印刷は 384 頁に上った。

b. 記入法

(1) 知っているか、いないかについて次の符号をつける。

○ よく知っているいつも使っていると思う語

▽ 聞け} ば意味が分ると思う語
読み

△ 聞いた} ことはあるが意味のはっきりしない語
読んだ

× ぜんぜん分らない語

(2) 問題の語に、関係のある語を書き入れる。すなわち意味・言いかえ・

反対語・同類語その他連想などによって思いついた語を書き入れる。

例1) ○ カワ(川・河) 山水 小川

例2) √ ケンビ(兼備) 名才色

例3) △ カワウソ(川獣)

例4) × ケンカ(歓化)

(この記入法も印刷して被調査者に配布し、更に口頭で説明を加え
て、調査の主旨、記入の態度、および記入法のみこませた。)

理解の有無という点から言えば、符号は○と×だけでよいわけであるが、被調査者が、内省によって、理解しているか否かを自ら判断する場合、理解ということの性質から言って二者択一ではなかなか印がつけにくいくことを考慮して、中間的な▽と△の符号を加えた。

次に、検査語彙に関連語を記入することを要求したのは、第1に理解が正しいか否かを検するため、第2に誤って印をつけることを防ぐため、第3に検査の单调を破り興味をつなぐため、第4に竹原の辞書にのっていない語を尊く手掛けたため、の四つの理由による。

B. 研究経過

調査は次の計画のもとに、所員森岡健二が所員與水実の助言を得て実施した。

- | | |
|--------|-----------------------|
| 4月～5月 | 計画（検査語彙、被調査者、調査方法の決定） |
| 6月 | 準備調査とその整理 |
| 7月～11月 | 本調査 |
| 10月～3月 | 整理 |

C. 準 備 調 査

調査概要に示した方法によって、精華学園高等部生徒17名（20名中3名欠席）に対し、スタンダード和英辞典の最初の500語について準備調査を行った。500語中、200語は教室で同時にを行い、300語は自宅で記入せしめた。この準備調査によって明らかになったことは次の通りである。

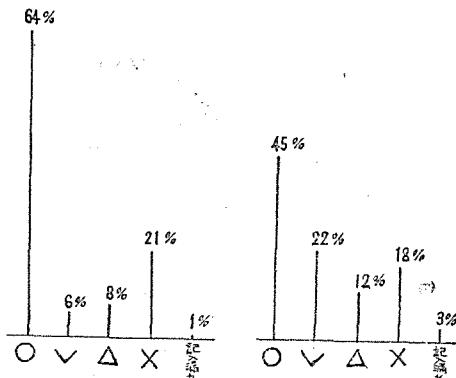
a. 時間

100語に記入するのにほぼ平均20分を要する。

b. 符号

○▽△×の符号は17名とも使用したが、この使い方は右の通りである。

被調査者AとBは、符号のつけ方に対する個性の相違をよく示している例である。○▽△×という符号は一応理解の程度を段階別に表わしては



いるが、内省によってこれらの符号を被調査者自らがつける場合は、これらは客観的な理解の程度を必ずしも示すとは限らず、むしろ被調査者の性格によって、つけ方に相違が生ずるのであると思われる。すなわち、被調査者A

は、理解の有無を内省する場合ちゅうちょなく○×をつけ、▽△は单なる補助的符号という色彩が強い。Aの場合には、▽△は無ければ無いでもそれほど支障をきたさないであろう。これに対して被調査者Bは、▽△が、○×と対等の資格で有用であり、これに依存することが大きい。つまり▽と△とは理解の質を示すために必要なのではなく、被調査者の性格によって、印をつける際の便宜上ぜひ必要なのである。

C. 理解度

書かれた答案を整理して、理解の有無を集計する場合、以上の理由から、○と▽とを理解語とし、△と×とを理解されぬ語として取り扱うこととした。▽と△とは、理解の度合を示すものでなく、○と×を補う符号であると判断されるからである。被調査者AとBとを、このような方式で整理すると、Aの理解度は69%となり、Bは67%となって、ほぼ同じであることが分る。

このようにして、500語を整理した結果は、次のようになった。

(1) 個人の持っている語彙

理解語を最も多く持っているものは、500語中394語(79%)、また、最も少なかったものは、255語(51%)で、差は139語、17名の平均は342語(68%)であった。

(2) 語の難易

次に17名が各語について示した反応によって、語の難易による段階をつけてみた。すなわち、17名中17名が知っている語を100%理解されている語とし、16名知っている語を $\frac{16}{17}$ すなわち94%知られている語として、このような方法で難易による段階をつけて、1名も知らなければ理解度0%の難語として採点した。

結果は、

100%の語	158語 (32%)	80%の語	49語 (10%)
90%の語	92語 (18%)	70%の語	43語 (8%)

60%の語	42語 (8%)	20%の語	23語 (5%)
50%の語	19語 (4%)	10%の語	13語 (3%)
40%の語	21語 (4%)	0%の語	5語 (1%)
30%の語	35語 (7%)		

これによつて全部が知つてゐる語は、大体3割程度であることが明らかになつた。

d. 信頼度

整理の結果、この調査は、次の点に問題のあることが分つた。

(1) 知つてゐるのに、△×をつける場合

この理由として、(a) 文字の読み誤りのため (b) 漢字が読めないため (c) 単語の切り方が不完全なため (d) 単語だけ出されるため (e) 誤解のため (f) その他の不注意のためが考えられる。

(2) 知らないのに、○∨をつける場合

この理由として、(a) 誤解のため (b) 不注意のため (c) その他の心理的原因のため、があげられる。

(1)の場合も(2)の場合も、この種の内省法による調査では、多少とも、つきまとうことはやむをえないと思われる。もし被調査者が少數であるならば、これらの誤りは、相当大きく結果にひびいてくるわけであるが、被調査者にある程度の数を確保出来れば、これらの間違いは最小限にいくとめることが出来ると信ぜられる。たとえば、17名が17名とも同じ誤りをおかすことは、ほとんどありえないことと思われるから、絶対的にやさしい語であるならば、多少の間違いがあろうとも、理解度のパーセンテージは上位に位するであろうし、絶対的にむずかしい語であるならば、同じく下位に位するであろう。特に、動搖する語は、知つてゐるか、知らないかが、あいまいな中間の語の場合であるから、17名が17名とも知つてゐる理解度100%の語、同じく17名とも知らない0%の語になると、相當に高い信頼度を示している

と思われた。

D. 本 調 査

1. 実施

本調査は7月20日より11月末日までかかった。検査語彙の印刷は7月中に完成した。被調査者は準備調査に参加した17名に、希望により1名を加えて18名となったが、事故1名、病気2名を生じ、結局完全に答案を回収し得たのは15名で、かろうじて予定の人数を確保することが出来た。なお、答案を最も早く完了したのは2名で、夏休みが終って9月10日には回収した。それ以外の13名は、その後少しづつ完成して、結局最後のものが出来たのは11月末日であった。

2. 整理

答案は準備調査で試みたように、次の二つの点について整理した。

- a おののの被調査者は○▽△×の符号をいくつ記入したか。
- b おののの語は○▽△×の符号をどのように記されたか。

aは、個人個人がどれだけの理解語彙を持っているか、の調査で、個人の持っている語彙量のあらましを知ることが出来る。bは、各語が15名中何人によって知られているかの調査で、語の難易の程度を見ることが出来る。

整理は10月から3月まで、ほぼ6か月を要した。

E. 成 果

1. 個人の持っている語彙の量

15名から回答を得た検査語彙の正確な数字は37970語である。

注、この数字は厳密にはスタンダード和英辞典の見出し語の数と一致しない。それは、ミスプリントの校正漏れの語があって、それを削除せざるを得なかつたからである。

この 37970語に対して、被調査者のつけた符号の実数と百分率は次の通りである。

	○	▽	計	△	×	計	記入済れ
	語	語	語	語	語	語	語
(被調査者 1)	27618 + 8712 =	36330		1251 + 380 =	1631		9
	(73%) (23%)	(96%)		(3) (1)	(4)		(0.01)
(") 2)	29607 + 6101 =	35708		500 + 1567 =	2067		195
	(78) (16)	(94)		(1) (4)	(5)		(0.5)
(") 3)	30101 + 4940 =	35041		859 + 1978 =	1837		92
	(79) (13)	(92)		(2) (5)	(8)		(0.2)
(") 4)	33712 + 448 =	34160		585 + 3210 =	3795		15
	(89) (1)	(90)		(2) (8)	(10)		(0.04)
(") 5)	33311 + 212 =	33523		316 + 4131 =	4447		0
	(87) (1)	(88)		(1) (11)	(12)		
(") 6)	28806 + 4377 =	33183		568 + 3632 =	4200		587
	(76) (11)	(87)		(2) (9)	(11)		(2)
(") 7)	31339 + 1060 =	32399		1265 + 4116 =	5381		190
	(82) (3)			(3) (11)			(1)
(") 8)	25048 + 6642 =	31690		983 + 5252 =	6235		45
	(66) (17)	(83)		(3) (14)	(17)		(0.12)
(") 9)	27187 + 2147 =	29334		1094 + 7433 =	8527		109
	(71) (6)	(27)		(3) (20)	(23)		(0.28)
(") 10)	24571 + 4516 =	29087		5200 + 3536 =	8736		147
	(65) (12)	(77)		(14) (9)			(0.39)
(") 11)	27405 + 1482 =	28887		313 + 8558 =	8871		212
	(72) (4)	(76)		(1) (22)	(23)		(1)
(") 12)	25713 + 1144 =	26857		4561 + 6493 =	11054		59
	(68) (3)	(71)		(12) (17)	(29)		(0.16)
(") 13)	24176 + 1881 =	26057		3899 + 7949 =	11848		65
	(64) (5)	(69)		(10) (21)	(31)		(0.17)
(") 14)	20358 + 3958 =	24316		1745 + 11840 =	13585		69
	(54) (10)	(64)		(5) (31)	(36)		(0.18)
(") 15)	21317 + 2064 =	23381		5177 + 9100 =	14277		312
	(56) (5)	(61)		(14) (24)	(38)		(1)
(平均)	27351 + 3313 =	30664		1888 + 5278 =	7166		140
	(72) (9)	(81)		(5) (14)	(19)		(0.3)

以上の表によって分る通り、理解度(○▽計)の最高36330語、最低23381語、

平均 30664語である。

2. 語の難易

次に 37970語の一語一語が、15名によってどの程度理解されているか、すなはち15人中15人知っている $\frac{15}{15}$ の語を 100%の理解度とし、以下 $\frac{14}{15}$, $\frac{13}{15}$, $\frac{12}{15}$ ……と段階をつけて、90%代の理解語、80%代の理解語、70%代の理解語……というように整理すると次のようになる。

100%	12475語 (33%)	40%代	2214語 (6 %)
90%代	6311語 (17%)	30%代	844語 (2 %)
80%代	6856語 (18%)	20%代	822語 (2 %)
70%代	2688語 (7 %)	10%代	139語 (0.4 %)
60%代	3920語 (10%)	0	48語 (0.13 %)
50%代	1653語 (4 %)		

3. 結果の吟味

この調査の結果として示された被調査者の平均語彙量 30664語、また、15人に共通して知られている 12471語という数字には、どの程度の信頼度があるか。この点をぜひ検討してみる必要があろう。

a. 符号のつけ方に現われた特徴

被調査者が理解度をテストされるのである以上、少しでもいい方へつけようとするのは自然の人情である。従って、最初からこの点に注意して、ありのまま記入するように依頼した。なお、この符号のつけ方における正確さの度合は、記入せしめた連想語によって判定することが出来、事実連想語の記されている限りでは、故意に理解語の方へ符号をつけようとする例は見当らなかった。たとえ符号のつけ方に誤りがあるとしても、それは、しかるべき理由があつてのことである。意図的なものではない。一例をあげると次の通りである。

(1) 知っている筈であるのに△×をつける例

アラ……感動詞 マジキ……すまじき チョウメ（丁目）

モテハヤス（持囃す） モグラ（土竜）

上の語はすべての人が知っていてもいいはずなのに、数人のものが△×をつけたのは語の出し方、語の切り方、見なれない漢字によるのであろう。

(2) 間違って〇×をつける例 (連想語)

アシツギ（足継）	手継	骨
チクショウ（蓄姿）	動物	けもの
だんびんぐ（dumping）	飛ぶ	水泳
バス（bus）	テノール	
ばす（buss）	自動車	

これらの誤りは、その理由を察することが出来る。恐らくは、内省法を採用する以上このくらいの誤りはやむをえないものであろう。ただ決して不真面目なものでない点をくむべきである。

b. 100%の理解語彙と20%以下の語彙およびその中間の語の比較

符号のつけ方に多少の誤りが認められるにしても、結果全体から見て、語の難易の区別は、相当に正確であると思われる。100%の理解語彙と20%以下の語彙とを比較してみると、常識的な判断であるが、前者はすべてやさしい語で、義務教育終了者なら知っているのが当然であると思われるし、後者は、むずかしい語で知らないのも当然であると思われる。また、中間の語を拾ってみると、

60%代 エンゼイ（塩税） エンタイ（延滞） フ（腑）

フロウショトク（不勞所得） フショウ（不肖）

50%代 フチョウ（符牒） フショク（扶植） フヨウ（浮揚）

ガエンズル（肯ズル） ガジョウ（牙城）

このような語は、被調査者の経験、知識、読書、環境の違いによって、知っているものもあり、知らないものもあってもよさそうに思われる。

c. 準備調査との比較

準備調査は 500語について、詳しい教示の直後に同時に行ったもので、被調査者自身緊張して実施したものであるから、信頼度は比較的高い。事情は、やや異なるとは言え、これと本調査の結果を比較することはある程度の参考になるであろう。

(1) 個人の持っている語彙

準備調査	本 調 査
最高 394語 (79%)	36330語 (96%)
最低 255語 (51%)	23381語 (61%)
差 139語 (28%)	12949語 (35%)
平均 342語 (68%)	30664語 (81%)

個人の持っている語彙の量が、準備調査より本調査において平均13%高くなったのは、何が原因であろうか。準備調査における検査語彙をよくサンプルしないで、最初の 500語をとったことに原因があるかもしれない。また、本調査において長期間にわたるため緊張がゆるんで、符号をつける基準が少し動搖したことに原因があるかもしれない。もし後者だとすると重大であるが、今はどちらとも判断することは出来ない。ただ最高と最低の差がほぼ似ていることに注意すべきである。

(2) 語の難易

	準備調査	本調査
100%知られている語	32%	33%
90〃	18〃	17〃
80〃	10〃	18〃
70〃	8〃	7〃
60〃	8〃	10〃
50〃	4〃	4〃
40〃	4〃	6〃
30〃	7〃	2〃
20〃	5〃	2〃
10〃	3〃	4〃
0〃	1〃	0.13〃

上の表の比較によって、語の難易の割合は、ほぼ一致していると言えよう。

本調査の順位 の順位	準備調査 の順位	父兄 職業	兄 弟	読 書	知識 程度	英 語	読み 方	話 し方	作 文	席 次
被調査者 1	5	商	7	中	豊	5	5	4	4	特
〃 2	13	洋裁	0	中	中	2	3	3	3	中
〃 3	3	会社	6	少	中	5	4	4	3	上
〃 4	7	国鉄	4	中	豊	4	5	4	4	上
〃 5	4	会社	6	多	豊	5	5	4	5	特
〃 6	10	無	4	中	中	3	4	3	4	中
〃 7	8	会社	1	中	中	3	4	3	4	中上
〃 8	6	会社	2	中	中	4	4	3	4	上下
〃 9	1	無	2	多	豊	4	5	4	4	上
〃 10		警察	7	中	豊	4	4	3	3	中
〃 11	9	商	6	中	中	3	4	3	3	中
〃 12	12	会社	4	多	中	2	4	3	4	中
〃 13	14	銀行	1	多	豊	3	4	3	4	上
〃 14	2	請負	5	中	中	3	4	3	3	中
〃 15	11	土木	1	中	中	3	3	3	3	中

d. 被調査者の性格と成績

信頼度を確かめるため、被調査者の簡単な環境調査を行い、これを学業成績と合わせて、調査の結果と比較すると上のようである。

上の表において、本調査の順位と、環境および学業成績との相関がある程度見られる。ただこの場合、被調査者 2 が問題になる。被調査者 2 の答案を見ると、連想語の書いてある限りでは誤りが少く正確であるが、大部分は連想語なしの答案である。特に補助符号である△を使用する率が高いことは、意味把握のあいまいさを示していると思われる。担任および指導教官に対する質問紙法による簡単な性格調査を試みた結果は、「ねばり強くない」という性格が最も強調され、「控え目」「人に頼む」という性格がこれについた。

環境、成績、準備調査の順位から言っても、第2位に上ることは不自然であると思われるが、これは長期間の相当忍耐を要する仕事であるために、例のねばり強くない性質から、記入をおろそかにしたのではないかと疑われる。

このほか、被調査者5および13がもう少し上位に上ってもよさそうに思えるが、これについては、さほど問題はないであろう。結局、被調査者2以外の順位は、環境や学業成績と比較的緊密な関係を示していると思う。

以上、本調査の結果に対する吟味を四つの観点から行った。第1に、符号の記入は、故意によくしようとして誤るのでなく、誤りがあるとすれば、しかるべき理由によること、第2に本調査の結果として得られた100%知られている語は、常識で考えても確かにやさしい語であると思われること、第3に、準備調査と比較して、個人の知っている最高と最低の揺れの度合、および、被調査者全部が共通して知っている語の百分率（検査語彙に対する）がほぼ近似していること、第4に、被調査者の環境・学業成績と本調査の結果とがほぼ平行したこと、が明らかになった。

F. む す び

スタンダード和英辞典の見出し語（検査語彙37970語）を、精華学園高等部生徒15名に対し、理解の有無を内省法によって記入せしめた結果を要約すると次の通りである。

1. 被調査者の持っている語彙の量は、平均ほぼ30,000語
2. 最も多く知っているものは、ほぼ36,000語
3. 最も少く知っているものは、ほぼ23,000語
4. 最も多く知っているものと、最も少く知っているものとの差は、ほぼ13,000語で、検査語彙総数に対して、3割前後の幅がある。
5. 被調査者全部が、共通して知っている語は、ほぼ12,000語である。

最後に、竹原スタンダード辞典が検査語彙として適當か、それで現代日本

語の生きた語彙を一応網羅しているかどうかということは、和英辞典の性質として一応現代日本語の生きた語を採録してあるものと見て用いただけであって、この吟味は今後に残された問題である。 (森岡)

個人差に応じた 国語学習指導方法の研究

A. この研究を行う理由と目標

新しい教育の目的が児童生徒1人1人の完成を目標とする限り、どんな教育課程を採用しどんな新しい学習指導法を実施しようとも、個人差の事実を認めて児童生徒のそれぞれの力に応じて進歩させてやることが大切なのは、言うまでもないことである。これはまた、国語の学習効果を高めるための予備をなすものである。個人差に応じた個別指導とは、

(1) 学年なり学級なりのワクをはずして考える型
(2) 学級を現状のままに認めて学級内で考える型
(3) 特に治療的目的で児童生徒1人1人について考える個人指導の型の三つに大別される。この実験授業では(2)の学級内での個別指導を中心とし、事情に応じて(3)の個別指導を加えていく。もちろん個別指導は一齊授業の場合でも、(1)教材の種類、(2)学習作業の程度、(3)学習指導の程度、を変えることによって、現在もある程度まで行われている。また話すことや書くことの指導の場合でも当然行われなければならないのであるが、個別指導が特に問題とされ効果が予想されるのは読むことの指導の場合である。その上、個別指導として現在最も効果があるとされているものはグループ(分団)指導である。それゆえ、この実験授業では、特に読むを中心としたグループ指導(ことに能力別指導)の徹底した実験研究を取り上げ、その実施を通じて長所および短所を記録していく、この問題への見通しの資料としたい。

B. 調査研究の担当者

主任 平井昌夫 補助者 塩入元義

副主任 上甲幹一 同 寺島 愛

C. 計 画

1. 実験を委嘱した学校

この研究の実施には実験をする学校を委嘱する必要がある。本年度実験を委嘱した学校は次の通りである。

小学校〔国語〕

(1950.7.20現在)

(都道府県)	(市郡町村)	(学校名)	(校長名)	(担当教官名)
東京都	新宿区大京町	四谷第六小	長谷山峻彦	(1年2組) 伊藤 妙子
			"	(1年3組) 高山 啓
			"	(1年4組) 栗飯原静江
			"	(4年3組) 白砂 宏
			"	(5年3組) 渡辺 勝
			"	(5年3組) 小林 博
"	世田谷区新町	深沢小	住岡 浅松	(1年) 佐藤 辰雄
"	世田谷区成城町	成城学園初等	柴田 勝	(5年) 馬場 正男
"	杉並区阿佐ヶ谷	杉並第七小	吉田 瑞穂	(2年4組) 夏目 由枝
			"	(2年3組) 輿石惠美子
			"	(4年) 志賀 昌成
			"	(6年) 吉田 友治
新潟県	刈羽郡刈羽村	刈羽小	大橋 土郎	(6年) 犬井 伸彦
長野県	長野市岡田町	山王小	吉池勘右衛門	(1年) 岩原 茂
石川県	金沢市松ヶ枝町	松ヶ枝小	篠田 文仙	(4年) 小林 綾子
香川県	坂出市坂出町	香川大学附小	中島 司	(2年) 野田 弘
大分県	大分市奥田	南大分小	松山 茂	(1年) 橋辺 雅司
		"		(2年) 木村 俊雄
		"		(3年) 佐藤 善七

大分県	大分市奥田	南大分小	松山 茂	(4年)	平原 末男
		"		(5年)	佐藤 喜徳
		"		(6年)	隈井 良幸
長崎県	北松浦郡佐々町	口石小	大石 孝一	(1年)	小森ツルヨ
		"		(5年)	川副 忠行

小学校〔ローマ字〕

埼玉県	川越市川越	川越第二小	玉田 一郎	(4年)	丸山よし江
		"		(6年)	伊藤 玲子
東京都	荒川区三河島町	第五崎田小	高橋 正	(5年)	岩下 新平
"	澁谷区原宿町	千駄谷小	片岡 龍榮	(4年)	丸山 千織
山梨県	甲府市穴切町	穴切小	樋口 優	(1年)	手塚千登勢
		"		(5年)	佐野 芳夫
岡山县	児島郡福田町	第三福田小	森 金太	(2年)	片岡 郁二
山口県	吉敷郡小郡町	小郡小		(5年)	田中 行成
香川県	丸亀市中府	城乾小	片山 良平	(2年)	宮内 正一
		"		(5年)	藤沢しげ子
長崎県	長崎市愛宕町	小島小		(3年)	中島 滉子

中学校〔国語〕

(都道府県)	(市郡町村)	(学校名)	(校長名)	(担当教官名)
北海道	札幌市江別町	江別第一中	多田 金市	(3年) 佐々木利男
東京都	目黒区碑文谷	目黒第八中	遠藤 圭二	(3年) 大村 深
長野県	南安曇郡梓村	梓 中	太田 美明	(2年) 加藤 宝
"	飯田市上飯田	飯田東中	松島 八郎	(1年3組) 笹岡 秀郎
		"		(1年) 笠松 宗雄
		"		(2年7組) 柳沢 静明
		"		(2年) 市村順太郎
		"		(3年) 中村 邦子
		"		(3年7組) 宇佐美包輔
石川県	珠洲郡宝立町	宝立中	柳田 又雄	(1年) 梶 寛
		"		(1年) 角谷 好枝
		"		(2年B組) 角谷 好枝
		"		(3年B組) 浜本喜久雄
		"		(3年C組) 角谷 好枝

中学校〔ローマ字〕

東京都 杉並区大宮前 宮前中 武藤 晨男 (1年) 田中 敏雄
 ノ 北多摩郡府中町 府中中 佐野 久 (2年) 日吉 透雲

高等学校〔国語〕

大分県 大分市長浜町 大分第二商高 泰平 宮治 (2年3・4組)瀬戸 由雄

学校数	26	教官数	50	学級数	53
小学校	18 (内ローマ字8)				
中学校	7 (内ローマ字2)				
高等学校	1 (内ローマ字0)				

2. 実験授業の期間

1950年4月～1951年3月

3. 実験授業の学年

小学校・中学校・高等学校の全学年にわたり、何学年をとるかはその学校の自由とした。

4. 実験授業を始めるための実態調査

まず実験授業の対象となる学級の児童生徒について実態調査を行った。調査の項目は次の通りである。実験授業の担当者の判断によって必要と思われる項目を付け加えてもよいことにした。

- (1) 教育環境 (調査表1～2)
- (2) 知能の実態 (調査表1～2)
- (3) 読みに対する興味と態度 (調査表3)
- (4) 読みの困難 (調査表3)
- (5) 音読の実態
- (6) 黙読の実態

5. グループ編成について

以上の実態調査に基づいてその学級に適したグループ形式を選ぶこととした。理想的には能力別のグループ形式が望ましいが、それぞれの学級の実情

調查表 1

都道府県	郡市區	町村	注 意			
			1 智能検査に用いた方法の名を記入して下さい。			
学年	組		2 智能検査は相当欄に各人の指數を記入して下さい。			
担当教官名			3 家の職業は別表を参照の上、相当欄にチェックして下さい。			
年 月 日			() 式			
調査日 1950						
番号	氏 名	性別 男女	生活年令 年 月	智能年令 年 月	智 雄 傷 敗 91歳以上 80-71 70歳以下	家庭の職業
1					I	職業
2					II	職業
3					III	職業
4					IV	職業
5					V	職業
6					VI	職業
7					VII	職業
8					VIII	職業
9					IX	職業
10					X	職業
合 計			(平均)	(平均)		
%						

家庭の職業分類

- I. 高等專門的職業
(例) 教授、技術、研究家、醫師、高
等公務員等。

II. 中等知識的職業
(例) 教師、普通公務員、企社事務員等。

III. 中等專業的職業
(例) 自家經營農業、營業、卸售處、仲買等。

IV. 中等技術的職業
(例) 技工、交通運輸業林機技手、熱練工等。

V. 第二勞動的職業
(例) 工人、大工、職工、守衛、小工、
小商業等。

VI. 無職
(例) 賃地、借家業、無職等。

VII. 乞食
(例) 父、夫、未帰還
母、內職等。

調查表 2

調查表 3

に応じてどのグループ形式でもよく、またいくつかの形式を組合せた混合形式を選んでも、資料 I にあげてない形式を選んでも差支えないとした。実験授業のために対照学級を設けることは必ずしも必要条件としないが、学級の事情によっては設けても差支えはなく、グループ指導の仕方についても資料 I を参考の上、その学級に最も適当と思われるものを採用することにした。(資料 I として、平井執筆「個人差に応じた個別指導」を配布した。)

6. 実験授業の実施について

以上の用意のもとに担当教官によつて授業を進めてもらい、毎月 1 回、月の初めに前月の記録を出してもらうこととした。そして進行状況や解決を要する程度の問題を報告協議するために、毎月 1 回

東京地方では研究協議会（本研究所で）

その他の地方では通信による連絡

をすることにした。また実態調査の報告に基づいて必要な場合には所員が助言をすることがあり、そのほか隨時必要な資料や調査表を送ることと、事情の許す限りそれぞれの学校へ所員が出向く機会を作り、進行状況の調査と必要に応じて指導助言をするように約束した。

7. 実験授業の結果の処理について

1951年3月末までに報告書の形式で経過をまとめてもらい、成果の程度によっては、適当な形式で発表するように申し合せた。

D. 実施概況

実験授業を委嘱した学校からの報告を隨時受けると共に、通信による質疑への解答、打合せ会、所員の出張による指導助言をした。

打合せ会 第1回 6月15日（研究所で）

第2回 10月 5日（研究所で）

この打合せ会のほかに、国語教育の研究会を開き、打合せ会の仕事をも行

った。これは次の通りである。

- 4月22日 (小学校関係)
 5月18日 (〃)
 5月19日 (中学校・高等学校関係)
 6月 9日 (〃)
 6月15日 (小学校関係)

実験授業を委嘱した学校への指導助言のために、所員が次のように出張した。

実験を委嘱した学校への指導助言のための出張

(月 日)	(学校名)	(所員名)
6月 8日	杉並区立第七小学校	平井
7月7,8日	南大分小学校	"
7月10日	大分第二高等学校	"
7月12日	坂出市香川大学附属小学校	"
8月 4日	長野市山王小学校	"
9月25日	新潟県刈羽小学校	"
9月27日	長野市山王小学校	"
10月12日	北海道江別第一中学校	"
11月 1日	丸亀市城乾小学校	"
"	坂出市香川大学附属小学校	"
11月15日	岡山県第三福田小学校	"
12月 2日	甲府市穴切小学校	"
12月 8日	澁谷区千駄谷小学校	平井, 上甲
12月11日	飯田市東中学校	平井
12月14日	杉並区宮前中学校	平井, 上甲
12月15日	世田谷区深沢小学校	"
12月21日	目黒区立第八中学校	"
12月22日	杉並区立第七小学校	平井
1月24日	荒川区第五狭田小学校	上甲
2月26,27日	石川県宝立中学校	平井
3月 1日	成城学園初等学校	平井, 上甲
3月15日	目黒区立第八中学校	上甲

4月18日	長崎県口石小学校	平井
4月21日	山口県小郡小学校	"

E. 成 果

実験授業の成果について、それぞれの学校から次の項目について報告を受けた。

- (1) 試みた実験授業の型
- (2) その型を採用した理由
- (3) 実際に実験した期間
 - a. 準備期間
 - b. 実施期間
- (4) 実験の経験の概要
- (5) 実験の途中で受けた助言
- (6) 成果の概要
 - a. 特に効果があったと思われる点
 - b. 失敗したと思われる点
 - c. 更に研究を要すると思われる点
- (7) 実験に対する自己評価
- (8) この実験に対する所感や意見
- (9) 1951年度にもこの種の実験を行う計画があるかないか
- (10) 備考

それらの報告をもとにして成果の概要を述べると、次の通りである。

1. 試みた実験授業の型

15名の教官は終始グループ型をとっており、他の3名中1名は個人指導の型、2名はそれぞれ実験期間を前期と後期に分けて、グループ型の期間と一斉指導の期間とを分けて実験している。ただし、グループ型をとっても、一

一斉指導を計画的に併用したと明記しているものは9名あり、他のものも実際指導の過程においては、隨時一斉指導の面を取り入れているようである。

なおグループの分け方は、国語の基礎的能力に基づいてグループを作ったもの11名、特に読みだけの能力に基づいて分けたもの2名、読みと話すことの能力に基づいて作ったもの2名、能力に生徒の興味を加えたもの2名であり、明記されてないものは一般的な能力によって分けたものと考えられる。

2. 実際に実験した期間

準備期間は最高8か月間から、特別に準備期間を設けなかったもの4名を含めて、平均約3か月間。

実施期間は12か月間を通じて行ったもの3名、最低は1か月間で、平均7か月間である。

このような一般の傾向とは逆に、8か月間準備して1か月間実施したもの、6か月間準備して2か月間実施したものがおのおの1名あった。

3. 成果の概要

a. 特に効果があったと思われる点

報告の内容は概括すると、児童の個々の力をつかんで指導することが出来たので、一人一人の能力を伸ばしてやるような行きとどいた指導が出来たため、国語の基礎的能力が向上したと認められるものが多く、特に能力の低い児童が成功感を覚えて喜んで学習するようになったということと、児童全体の学習意欲が盛になって自学自習の習慣がついてきたこと、などが共通の成績点であったようである。

次にこれを報告された項目でまとめて例記すると、

- | | |
|------------------------------|---|
| (1) 能力の低い生徒が喜んで学習に参加するようになった | 8 |
| (2) 自学自習の意欲が向上した | 7 |
| (3) 国語の基礎的能力が目立って向上した | 5 |
| (4) 読書力が旺盛になった | 4 |

こと、などであり、まだこのほかにも

- (5) 特に書字能力が向上した
- (6) 特に默読能力が向上した
- (7) ノートの使い方が上手になった
- (8) 父兄が安心して協力してくれた

ことなどをあげてあるものや、

というような点をあげているものもそれぞれ一二見受けられる。

b. 失敗したと思われる点

報告を概括的に見ると、グループ編成や、分けられたそれぞれのグループに与えるべき学習資料・作業などに準備が不足だったために、実験が不十分に終ったクラスが多いようである。

あげられた項目を例記してみると、

- | | |
|---|---|
| (1) 資料や作業の与え方で準備や計画が不十分なために失敗した… | 6 |
| (2) 能力の低いグループにおいてことに最劣等児の指導まで十分に出来なかった… | 5 |

ことなどであり、このほかにも、

- | | |
|-------------------------------|--|
| (3) グループの編成が不備であった | |
| (4) 特に能力の高い児童の指導に研究が行きとどかなかった | |
- ことなどをあげているものも一二見受けられる。

c. 更に研究を要すると思われる点

ここで集中的に多く取り上げられている問題は、要約すると、手軽なしかも正確な能力の実態調査や評価のための標準テストが出来れば、この実験も更に成功するだろうということと、各グループに与えられる資料とワークブックが研究され、作成されなければならないということで、次にまとめて例記したいいくつかの問題は、今後の実験で十分研究されなければならないものと考えられる。

すなわち、

- (1) 手軽で正確な実態調査の方法や標準テストが欲しい…………… 9
- (2) ワークブックの作成を研究しなければならない…………… 7
- (3) 能力に応じて与えるべき資料を研究しなければならない……… 5
- (4) 特に最劣等児の治療的学習を研究しなければならない………… 3
- (5) 劣等感をいだかせないようなグループ編成をもっと研究しなければならない…………… 2
- (6) 他の教科課程との連絡
- (7) 教師の労力を軽減する方法
- (8) 発展的段階におけるグループ指導のあり方
- (9) ノートの使用法
- (10) 評価記録の取り方

F. 次年度への見通し

本年度の研究はいろいろな点で不備があったので、思うような成果は得られなかった。それぞれの学校からの報告に基づいて、不備な点を改め、委嘱する学校も整備して、次年度でこの研究をまとめると予定である。

(平井)

文字配列の合理化に関する 実験的研究

A. この問題を取り上げた理由と目標

われわれが何故ここに掲げた研究課題たる“文字配列の合理化に関する実験心理学的研究”を取り上げたかの理由は、われわれが日常、言語生活、わけても書き言葉の生活において物を読む場合、その読まれる物がどうあったら、よく、速く読めるかということが、きわめて重大な問題の一つであり、これを明らかにして国語政策に資したいということを念じたからである。それにしても、今、われわれが研究している課題——義眼者を用いたり、暗室でリヒトヘーベルによりプロマイドに感光させたりして、読みにおける眼球運動を研究しようというような、一見奇異にも見えようこの研究課題——をなぜ取り上げるのであるかの理由は、全く学問的観点に立っているのである。これは年報1949において述べてあるから、詳述は差控えて要点のみをかいつまんで述べよう。

われわれが日常生活を営むにあたり、その重要な一つの面としての読みの生活がある。読みがどうすれば能率的に行われるかは、読む人がどうすればよいかの分節面と、読まれるものはどういうふうにあらねばならないかの分節面とが考えられる。それは読みとは、一方に直接刺戟布置としての記号の群れである文字配列を極とし、これにまつわりあうかまえをその対極とする精神物理的な全体の場の出来事だからである。この際、読みがどうすれば能率的に行われるかについては、以上の両分節面について考えるのが当然であるが、今はその前者のみを全体分節的に抽象して、これを研究してゆこうというところにこの問題を取り上げた理由があり、これを究明して、各文字配列

の価値を判定することにその目標がある。更にこれを具体的に言えば、読む人、読まれる物により、読みは上手に速くも行われ、下手に遅くも出来る。これは上述の両分節面の有機的な連関によってなされる出来事だが、その前者つまり文字の配列がどうあつたらよく読めたり読みにくいかの問題を、読む人の読む働きを離れて精神物理的な読みの全体の体制の場において明らかにしようとするのである。その際、文字配列に有機的に緊密にからみあうかまえの、目に見えない心の場に対立する重大な一分節面たる生理的の場の構造を明らかにし、これから読みにおける心身の場の構造を調べ、かくてこれと条件的にかかわりあう文字配列の価値を研究し、やがてはその如実の成果が究極目標たる国語政策に資し、かすかなりともこの方面に一条の光明を投じたいと念じてこの研究を取り上げたのである。

B. 前年度までの調査研究のあらまし

1949年度の終りまでの調査研究のあらましは、読みにおいて、直接刺戟布置たる記号の群れである文字配列を、どうすればその働きが読む人の働きとまつわりについて読みやすいか（知覚しやすく意味も分かりやすい）という問題を、読む人の働きと離れないで研究することであり、いろいろの文字配列による文章を読ませてみて、その際の心身の場の構造を明らかにしようとした。わけても、その生理的の場の構造中、特に顕著な眼球運動を取り上げて、これを研究し、これに連関する心性の場の構造をとらえ、これら両分節機能の連関するかまえの対極をなす直接刺戟布置としての記号の群れ、すなわち文字配列の優劣を研究することにあった。この生理的の場の研究において、読みに際しての眼球運動をまず客観的に記録することが必要である。この目標に到達するためには、その記録装置がまず作られねばならなかつた。その装置は、まず瀬踏み的に素朴ながら作られた。それは義眼を利用して、これに横杆を装着して、ヘーベルを動かし、その尖端の運動する幅を拡大し、

これを等速度で回転するトロンメル上に記録する装置であった。装置は、粗製なものながら、ほぼ所期の機能を発揮し、読みにおける眼球の運動を知ることが出来た。そして、その成果として得られたるものは、前人の定説として認められた説、(読みにおいて、眼球は行にそって凝視しながら円滑に回転するものではなく、停留と運動を交互に繰り返しながら回転してゆくこと)を実験により、客観的に確認することを得たのであった。ここまででは、いわば、上記の研究をするためのほんの入口であった。この装置でほぼ目的を達しうる見通しを得たわれわれは、これを本格的な装置とすべく、また得られた記録を、種々の文字配列によって類別整理し、解釈し、その価値を決定することを後日の宿題にして1950年度に突入した。

C. 調査研究の担当者

この調査研究をするに当り、所員草島時介がこれを担当し、小村庸子がこれを補助し、1950年12月から佐藤泰正が更に参加して補助に当った。

D. 計画

上述の目標に到達するため次の計画を行った。昨年度(1949年度)に、手製で粗ほんな義眼を利用して、読みにおける眼球運動記録装置を作り、きわめて大まかな成果を得たが、この実験研究をなしとげるためには、どうしても、この装置を本式のものにせねばならない。これを完成したら、これを使って、昨年度に得られた成果を掘下げ、各分節面における眼球運動を明らかにし、かくて、いろいろの文字配列の価値を検討するつもりであった。

両眼は相呼応して運動することは生理的事実であり、たとえ、片眼を失っても、その動眼筋が健在する限り、他方の健康な眼で読ませ、その際これと呼応する義眼に装置して、その運動を記録することは、その際の健康な眼球に呼応する運動を忠実に示すとは思うが、それでも、かような特殊人の眼球

運動を研究することは、被験者を求めるのに、異常な苦心を要するし、また、ごく少数の研究結果から得られる結論はその妥当性に普遍性を求める難い。これを思い、われわれは、義眼者ならぬ常人の眼に装置して、読みにおける眼球運動を刻明に記録することを計画した。発注も終り、ほぼ、装置の6割は完成した。実験はいずれも国立東京第二病院で行うように計画され、これを実行し、特に後者は、暗室内で行う計画であった。読みは、精神物理的の全体の体制の場における出来事である以上、これら感性、感官方面的研究と並行して、これらの知覚に即して、どの程度の理解がなされるかもあわせ考えねばならない。そこでわれわれは、これら感性、感官的研究と並んで、理解度の研究も行う計画を立てた。これは、都下の諸中・高校において実施し、この面における部分的成果を得たのである。

E. 実施状況

われわれは1950年度においては、1949年度の研究項目たる、文字配列の合理化に関する実験的研究を継続し、これを推進せしめた。これを詳しく言えば、その一つは1949年度において、暫定的に手製した粗木細工の義眼を利用する読書における眼球運動記録装置を改良することであったが、その年末近く、この装置はほぼ完成に近づき、同年度末に完成した。これはほぼ完全に記録機能を発揮することが出来た。その二つは、義眼により、眼球の運動を記録し、その研究をあわせ考えながら、文字配列の合理化を研究するに際し、その傍証として、テストによりその調査研究に従事し、これをある程度まで進めた。その三つは、義眼を利用して、眼球運動を記録するには、動眼筋の受ける抵抗を極小にすべく努力はするもののこれが絶無ではないし、特定人ならぬ健康者にこれを行ってはじめて、研究成果の妥当性も高かろうとの考から、ここに義眼者ならぬ一般人に向って実験を施すべき、光線横杆による眼球運動記録装置の創製を思い、これに着手して、ほぼ完成まじかに至

つたことである。

F. 研究成 果

われわれは義眼者を利用して、読みにおける生理的場の構造を調べ始めたが、これに要する装置が著しく特殊であり精巧を要するため、装置の諸部分の改変などに著しく日子を要し、年度末までには、とても実験の運びに至らなかった。この装置の構造は、ほぼ国立国語研究所年報（1949年度）に記したものと似ている。他の装置、すなわち、光線横杆を用いて読みにおける生理的場の構造を調べる装置は、ほぼ完成しかかっているが、その構造は次の通りである。

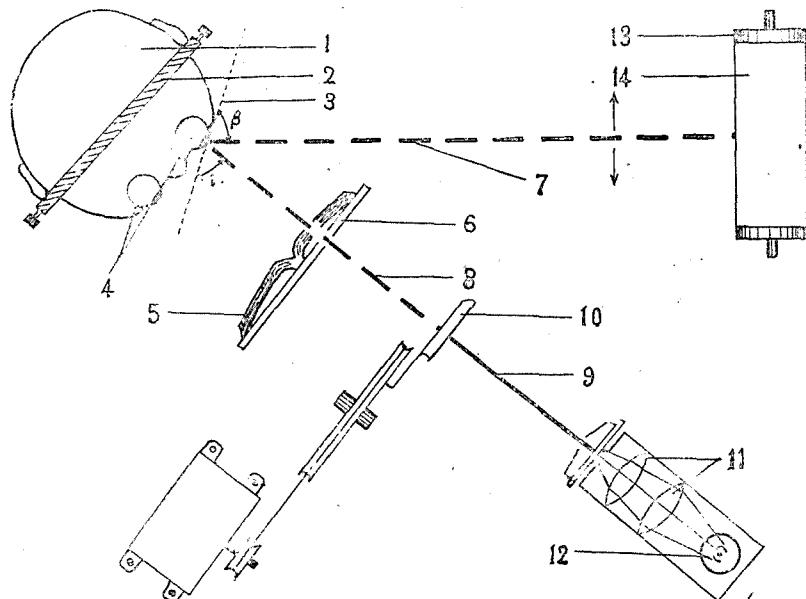
この装置は暗室で用いられ、まず、眼球にコカインを点じておいて、痛覚は無くなってしまっても、知覚がもとのまま残るようにしておき、眼球自体に、 $1\text{cm} \times 2\text{cm}$ （厚さ 0.1mm ）， $1/30$ 瓦の小鏡片をはりつける。別にレンズを用いて平行光線を作り、更に、薄青色ガラスでこれを濾過して、眼は眩惑はされないがプロマイドには感光するような光線に変え、これをその鏡片にあてる。読みにおいて眼球が運動すれば反射した平行光線は運動する。これを等速度で回転するフォトグラフィオンのトロンメルにはったプロマイド上に捕捉する。この平行光線は、その途中に電気モーターで光線遮断扇を回転して、光線を $1/5$ 秒毎に断ち、プロマイド上には毎秒5個の破れをもって焼きあらわせるようにしておく。そして、その破れを数えて、運動時間を測定するという仕組みである。

次に、この両装置の作成途上、種々の文字配列の価値について、テスト並びに短時露出によって、中間実験を行った。

まず、テストについて述べよう。実験材料は、9ポ、横書き、行間隔3.5ミリで、5字、8字、12字、15字、20字、25字詰にして、柳田国男編、新しい国語、小学校四年下、「母の日」と「しゃしんちょう」を印刷した。被験者

横書きを読む場合の眼球運動を記録する装置の平面図

(真上から見た図)



- 1 頭 2 頭保持器 3 接線 4 眼球 5 本 6 本台
 7 反射した光線 8 切られた光線 9 平行光線
 10 光線遮断扇(光線を一定時間おきに切る) 11 レンズ 12 電球
 13 等速度で回転中のトロンメル 14 プロマイド

a. 横書きの文章を読むときは、反射光線は矢印の方向(左右)にふれる。そのとき、トロンメルは水平に置かれ、プロマイドは鉛直方向に回転する。

b. たて書きの文章を読むときは、反射光線は上下の方向にふれる。そのとき、トロンメルは鉛直に置かれ、プロマイドは水平方向に回転する。

$$\alpha = \beta \text{ (投射角は反射角に相等しい。)}$$

としては都下の中学校、高等学校の生徒、およそ450人を選んだ。方法は默読で、普通の速さ、意味のとれるように、2分間、読ませた。そして読後には選択法による理解テストを課した。なお、各人の読書力を調査するために、別の機会に再び、同程度の材料でテストを行った。このようにして実験を行った結果、派生的にさまざまな問題が出てはきたが、それは省略して、当面の行の長さの結論だけを簡単に述べると、

- (1) 各学年とも一番読みにくいのは5字詰めである。
- (2) 概して、20字詰めが最も読みやすい。
- (3) 12字、15字、25字は大体同程度の読みの状態を示している。
- (4) 学年の進むにつれて、一いわば、読みの経験が深まるにつれて、各配列ごとの差がはなはだしくなる。

上記の諸項をあわせ考えると、あまり長くても、短くても読みにくく、20字ぐらいが一番読みやすいと考えられる。原理的には著しく長い行は、行間運動において、眼を行から逸脱させ、同一行の再読、一行とび、行間における逆行飛躍運動中に数度の停留などの起ることがあり、その非能率的なことは認められていた。では、どこまで短くすれば能率的かの問題についてのテストでもあるが、意外にも、能率からみて、5字、8字の順序は得られなかった。これは、恐らく、短行を読む経験の貧弱という要因もあるかと考え、各個人について、種々の短行文章を幾回となく読ませたが、そこに学習的効果は一向見られず、9ボの横組みにおいては、上記の事実を信ずることが出来ると思う。

更に、テストと並行して、読みにおける知覚面を重視して短時露出（3秒露出）実験を行ったが、その結果について述べる。（この方法の特質については、まず、これが個人実験である点、また、テストの時のように文脈に拘泥せず、ほとんど知覚面を抽象出来たことなどである。）被験者は国立国語研究所の中から14名が選ばれた。一人の被験者は各配列毎に36回読まされ、その

平均が算出された。その結果、14人の中で、11人までが、20字において最もすぐれていたことが明らかにされ、読みやすさの順序は、20字、25字、12字、15字、8字、5字の順であった。これを前のテストによる実験に比較してみると、ほとんど同様な結果に到達している。

G. 1951年度の見通し

われわれは、ひとまず出来上った義眼利用の読みにおける眼球運動記録装置を使って所期の目標に達するために実験を重ね、他方光線横杆による実験装置で、実験を行ってその妥当性を高め、かたわら、テストにより、理解度をもあわせ考えながら、研究を進め、やがて文字配列の価値判定に進もうと思っている。具体的には、横書きの場合の長さの優劣順位がほぼ分ったから、次はこれを縦書きで印刷し、その長さの優劣順位を定め、次に、縦書きと横書きの優劣の比較にまで進みたいと念じている。

(草 島)

マス・コミュニケーションに関する研究

マス・コミュニケーションに関する研究は、1949年度同様、日本放送協会放送文化研究所および東京大学新聞研究所に研究を委託し、両研究所の申し出によって国立国語研究所もその調査に協力し、第2部長浅井惠倫、所員上甲幹一が参加した。

放送言語理解尺度設定の基礎的研究

放送文化研究所に委託した課題「放送言語理解尺度設定の基礎的研究」の研究経過は次の通りである。

目的：放送言語のいくつかの要因を取り出し、それを数量化して一つのフォーミュラに組立て、これを尺度としてスクリプトにあてはめることによって、その理解の難易度を客観的に測りたい。

アメリカではすでに Dr. Flesch が書き言葉についての尺度をつくり出しているが、放送用語は話し言葉であるから、書き言葉と同じ扱いをすることは出来ない。その上英語と日本語では性質がちがうので、Flesch の方法をそのまま適用するわけにはいかないし、Flesch の方法自体にも問題がありそうである。

こう考えると放送言語の理解尺度を設定しようとする試みは極めて困難なことが分るが、もし成功すれば放送はもとより、一般の日常の言語生活ならびに国語教育に益するところが多いと考えられるので、いろいろ予想される困難をおかして、あえてこの未開拓の分野に鋏をいれることにした。

前調査：この研究では、仮のフォーミュラを組立てるまでの段階においても、その後それを修正して最終的なフォーミュラを設定する段階においても、多くの実験を重ねなければならないが、それらの実験では材料としての

スクリプトをよんできかせてその理解の難易を被験者に評定させることが常に行われるものと予想される。そこでこの評定をさせるにはどういう方法によるのがよいかをまず決めることにした。

そのための材料としてまず1950年10月NHK放送のニュース・スクリプトの中から無作為抽出法により2群8種のニュース・スクリプトを選び出し、対比較法 (Method of paired comparison) および品等法 (Method of ranking and rating) で、1951年1月18日にNHK放送文化研究所・国立国語研究所関係職員15名（男8名、女7名）について実験を行った。

その結果、対比較法・品等法のいずれにも長短のあることが明らかになつたが、結局できるだけその欠陥をカバーしうるような条件をつけたうえで、品等法を用いるのが適当だという結論になった。

本調査：ラジオの聴き手の理解に影響する言語的要因のうち、今回の研究で設定しようとする理解尺度の標識になると思われるものに、

- (1) 難語の数
- (2) 文の長さ（一文の含む文節の数）
- (3) 修飾句の数
- (4) 展開される場面の数

がある。これは放送文化研究所が多年行っている放送用語の研究、特に昨年度行った「放送における言語的条件と理解度の関係の実証的研究」から知り得たところである。今回の研究はこれらの要因が理解尺度の標識になると仮定して、これが成立つかどうかを実証することから出発する。それには話し言葉の他の要因を固定しておいて、一つの要因について差を設けた幾つかの材料を聴かせ、それによって理解の難易にはっきり差が生ずるかどうかを確かめればよい。ただ(1)の「難語の数」は、この研究における「難語」の定義づけについて一段の考究を要するので、後のテストにゆずり、今回は、

前調査の結果に照らして品等法の裏付け、すなわち品等法による評定と現実の理解程度との間に狂いがないかを確かめることを試みることにした。また理解の程度には関心の程度が関係を有するであろうことも想像されるが、果してその通りであれば、理解尺度の設定には関心の程度を何等かの意味で考慮しなければならない。そこで理解と関心の関係を探ることも企てた。

上記の目的に応じるため、実験の材料は、

- (1) 文の長さ（一文の含む文節の数）に差（A, B, C の 3 段階）があり、他の要因が同じなもの
- (2) 修飾句の数に差（A, B, C の 3 段階）があり、他の要因が動かないもの
- (3) 展開される場合の数に差（同じく A, B, C の 3 段階）があり、他の要因に変りがないもの

を用いることにした。ところが（1）と（2）では A, B, C のそれぞれを現実の放送スクリプトから求めることがほとんど不可能なので、（1）では B, （2）では A のものを現実のスクリプトに求め、それを変えて他の段階のものを作り、（3）では各段階のものを皆現実のスクリプトから選ぶことにした。そして、これらを選ぶための現実のスクリプトとしては、1950年10月中の午後7時の全国中継ニュースを中心に、ニュース解説および学校新聞のそれを用いることにした。このようにして（1）、（2）、（3）毎に2組ずつスクリプトを選んだ。

まず、被験者に対して実験材料を一つずつ1人のアナウンサーが同じ速度で読みきかせ、その直後に、被験者が現実にどの程度理解したかを測るために作った質問に答えを記入させ、続いて、被験者がどの程度の難かしさを感じたか、またそこに出でたような事柄についてどの程度の関心をもっているかを探るために用意した質問に回答を記入させることにした。しかし同一の被験者群に対して 18 の材料を1回にテストすることは重過ぎるので、三

つの被験者群に対して六つずつの材料をテストすることにした。次に掲げたのは各被験者群に対して聴かせた材料とその順序であるが、ここでは一つの群に同じ内容のものを二つ与えることを避け、また一つの群ではA, B, Cを入りまじらせ、しかもAをトップにおくことを避けた。被験者がテストを受けるのに余分の抵抗を感じることがないようにするためである。

被験者群	第1	第2	第3
実験材料	長修 1 A	修長 1 A	長修 1 B
(読みきかせた順に) よる	場長 2 B	場修 2 B	場長 1 B
	修場 2 C	長場 2 C	修場 2 B
	2 B	1 A	2 A

ところで、このように材料を3分してそれぞれ別の被験者群でテストするのは、全部の材料を同一の被験者群に与えて行うテストの言わば代用であるから、第1乃至第3の被験者群は智能、学力等の点から見て均等ならしめることにした。

現実の理解度を測る質問は、材料に用いるスクリプトの内容の中心や要点について、選択肢法を用いて作成したが、

- (1) 文の長さに関する1の組と2の組
- (2) 修飾句の数に関する1の組と2の組

ではA, B, Cの内容が共通なので、質問も共通にしてある。質問の数は、

- (1) 文の長さに関するもの—1の組では4, 2の組では5
- (2) 修飾句の数に関するもの—1の組では5, 2の組では3
- (3) 場面の数に関するもの—1の組では5, 2の組では6

とし、どの質問においても選択肢の数は四つにした。難易度と関心度を探る質問はいずれも品等法による評定を求めたものであって、一つずつである。品等の段階はプリ・テストの結果にかんがみて5段階にした。

こうした計画にもとづき、1951年3月3日、東京都立江北高等学校の1年

生、引き続いて東京都足立区立第二中学校・同第四中学校の2年生について調査を実施した。各校とも3群編成各群50名ずつを目標とした。（実施最低数41名）

その結果、高等学校においては、（1）各段階の材料が示す難易については、今回使用した材料程度の差では理解度を左右するとは見られない、（2）現実の理解程度と品等法による難易度の評定の関係についてはくいちがいが多く、品等法によって難易をきめるのは危険である、（3）理解の程度と関心の程度の関係については、一般的な常識に反して、被験者が現実に材料の内容を理解した程度とそれに対する関心の程度との間にはほとんど関係がないらしい、という傾向が見られ、中学校の場合もほぼこれと似よった結果が出た。

中・高等学校の生徒を対象とした場合の傾向は上記の通りであるが、引き続いて成人の場合にはどういう傾向ができるかについて更に調査をすすめることにし、（1）町としての大きさおよび性格、（2）文化の程度、（3）調査および協力の便宜、などを考え、埼玉県入間郡飯能町（人口34,000、東京から1時間20分）を選定、かぞえ年20歳以上49歳以下の成年男女を対象とし、前記学校の場合と同一の材料・方法を用いて各群60名を目標に調査を実施した。（実施最低数59名）

その結果については目下集計整理中であるが、理解度と品等法との間に興味のある傾向が出そうである。（上甲）

読紙作業の実験的研究

A. 前年度研究の概要と本年度の目標

この研究は、1949年（昭和24年）度、国立国語研究所が、マス・コミュニケーション研究の一環として、東京大学新聞研究所に委託したものの継続である。

一体、読紙作業、つまり新聞を読む仕事は、誰しも日常行っているありふれた仕事であるが、それだけに、それを分析し科学的に取り扱うことは困難である。一般に人々が、日々どのくらいの時間を費して、どの程度に新聞を読むかということについては、多少資料がないわけではないが、それでは、人々がどういう仕方でこの作業を行っているかという点になると、これまでほとんど研究の手が染められていない有様である。

従って、われわれは、一般に人々が新聞を読む時に、

- (1) どのくらいの時間かけて
- (2) どのくらいの量を
- (3) どの程度の理解をもって読み
- (4) どの程度記憶に把握するか

といった問題を取り扱う必要がある。

しかし、これらの作業は常に個体の能力、読まれる記事の性質、その他内的あるいは外的な複雑な条件に左右されるので、これらの問題に簡単に答えることは不可能であると言わざるを得ない。

従って、前年度は、最も基礎的な研究として、この複雑な読紙作業における種々の条件すなわち読紙作業に働くエネルギーとその作業量との関係を理論的に考究し、その結果測定可能と思われる読みの速度と理解度の問題を取り上げて実験を試みた。

実験は、被調査者80名（東京大学教養学部文科2年生）を4群に分ち、それぞれ異なる態度で同一の記事を読ましめ、その読みの速度と理解度とを測定した。この実験のねらいは、教示により読みの態度を変化せしめ、読みの速度と理解度とをコントロールして、結果を比較することにあった。

しかし、この実験の結果は、教示により読みの条件を異ならしめたにもかかわらず、被調査者が比較的少数であったため、個人差の要因が条件の効果をおおい、明確な結果を得ず、大体において技術的検討に終ってしまった。

本年度は、前年度に引き続き、この実験を完成して、読みの速度についての確実な資料を得ることを当面の目標とした。すなわち、前年度の欠点を修正して、

1. 等質の対象（被調査者）における、読みの速度と理解度の関係を検討し、これから更に進んで、
2. 最適の速度を決定すること

を目標とした。

B. 研究担当者

当研究所の依頼により、東京大学新聞研究所池内一氏が主として担当された。

C. 研究の計画

目標に従って、本年度は二つの実験を試みることにした。

第1の実験は、読みの速度と理解度との関係を見出すことで、要領は前年度と同じであるが、前年度の経験に基づいて、二三の修正を試みる。すなわち

1. 被調査者

高等学校下級生60名。個人差を極小にするため、学業成績の平均を基準として、等質化する。

2. 手続き

被調査者に記事を読ましめ、その読みの速度と理解度とを測定するが、その読む時の態度を

- (1) いつもの通り
- (2) なるべく早く
- (3) ゆっくり理解するように

の三種とし、各被調査者には、いずれも、この三種の条件を与えられるよう

にする。

この実験のねらいは、教示により、読みの態度を変化せしめ、読みの速度と理解度とをコントロールして、結果を比較することにある。

次に第2の実験は、第1の実験結果からは、「いかなる速度で読むことが効率的に最適であるか」という目標2の問題に答えることが困難であり、また第一の実験の結果についても不安心である所から、読みの速度を段階的に変化せしめる方法をとって、どの段階の速度が最適であるかの解答を見出そうとする。この場合は、教示によって読みの態度を変えるわけには行かないから、刺戟の提示の際にコントロールを入れる装置を製作する必要がある。

この実験の計画は次の通り、

1. 被調査者

高等学校上級、または、大学ジュニア・コース5群150名程度。

2. 材料

長さおよび記憶からくる制約を避けるため、出来るだけオリジナルな材料を用いる。

3. 刺戟提示

出来得れば映画を用いる。提示速度は5段階。

4. 理解度測定

第1の実験と同じく簡単なテスト形式をとる。

D. 実験の実施と見通し

第1の実験は、計画に示した通り、東京都立日比谷高等学校1年生3学級60名に対して行った。目下整理中であるが、大体予期の通り、材料のいかんにかかわらず、読みの速度と理解度との間には、一定の関係の成り立つことを明らかにしうるごとく思われる。

第2の実験は、現在装置を製作中で、1951年7月に実験を完了する予定で

ある。

思うに、この研究の結論は、前年度および本年度の実験結果と、設定された問題によって暗示される通り、これは当然、本実験の条件に制約されるもので、そのまま一般化することは許されないであろう。これを一般化するためには、本実験で除外された対象・材料に固有な要因を含めた新しい実験計画を立てる必要があると思われる。

(新聞研究所員池内氏の報告による)

国語の歴史的発達に関する 調査研究

国語の歴史的発達に関する研究部門として増設を予定している研究第3部がまだ実現しないので、それまでの準備としての基礎的な作業と考えられる一つとして、古辞書の索引の作製と国語関係研究論文目録の作製とを取り上げた。前者は、語彙の研究のために資そうとするものであり、後者は、これまでの研究が一覧できるようにとの目的からである。

この仕事は、岩淵悦太郎と広浜文雄とが担当した。

A. 古辞書索引の作製

昨年度大野晋・山田俊雄・築島裕の三氏に委託して、前田本を底本として伊呂波字類抄の索引を作製したが、本年度は引き続いて黒川本と校合し、黒川本によって約3,000語をつけ加え、出来上った約38,000語を五十音順に整理した。

また、新たに節用集の索引作成を計画し、数多くある諸系統のものの中から、乾本系統の易林本と、伊勢本系統の天正十八年本とを選んで、前田正人・塙原鉄雄・上野務・鈴木博・宮地裕の諸氏に調査を委託し、収録語彙のカードを作製した。ただしその整理にまではいたらない。

B. 国語史関係研究論文目録の作製

国語、言語関係の雑誌12種を選び、当研究所資料室に収蔵するものの数種をのぞいては、国会図書館上野分館と東京大学文学部国語研究室の好意によつて閲覧し、すべて現物について必要事項を摘録することを原則として、仕事を進めた。なお方言・民俗関係のものは民俗学研究所鎌田久子氏に委嘱して完成した。

以上の作業を行うについて、本年度は期間を昭和13年から昭和24年までに限ったが、これは、昭和13、14、15年のものは、国語国文年鑑に詳細に収録されているので、それ以後のものを完成して、順次さかのばって行こうと考えたからである。

(広浜)

辞典の編集方法に関する 調査研究

科学的な調査研究を行つて国語の合理化の確実な基礎を築くという当研究所の目的を、最も具体的に、かつ国民の国語生活に直結する形にあらわすものとして各種辞典（歴史語、方言、標準語等）の編集は最終の目標であると言えよう。しかしその準備としては、綿密な編集方法についての調査が必要である。そこでそれに資する一つの仕事として、大辞海・大日本国語辞典・言泉の3種の国語辞典の各語別一覧の作成を計画して、実施した。

この仕事は昭和23年度に日本語教育振興会に委託して作製した対訳辞典の語別一覧と相まって完成するものであり、作成の目的は、第1に、収録されている各語にどのような説明を与えていたかを見ること、第2に、代表的な国語辞典の各語の説明を1枚の紙の上で同時に比較検討できる便があるという点にある。

(広浜)

国語関係文献の調査

国語に関する学問の水準を知り、言語に関する学界のいろいろの動きや、社会の世論をとらえるために、文献調査を行っているが、本年度は次のような仕事をした。担当者は所員高橋一夫、有賀憲三である。

A. 刊行書の調査

主として年度内の刊行書について調べ、古いものについては気のつくたびに、従来公にされている書目類の欠を補うようにしている。25年1月～12月の刊行書については、234点の書目を収めた目録を25年3月に謄写印刷に附した。

B. 雑誌論文の調査

また下記の雑誌（逐次刊行物）について、関係論文を調査しカード目録を作った。この仕事は本年度になって、着手したもので、25年1～12月のものについては約1337点あり、24年以前のものは約2407点に達した。

アサヒグラフ	朝日評論	新しい教室	茨城教育時報	英語研究	英語
青年	英文学研究	愛媛県教育研究所紀要	大阪弁	音声研究	改造
科学朝日	学苑	カナノヒカリ	紀要（信濃教育会教育研究所）		教育
教育現実	教育調査	教育手帳	教育復興	教材研究	近畿方言
近代映画	経済学雑誌	研究紀要（愛知県教育文化研究所）			愛知県教育
研究所紀要	香川大学学芸学部研究報告第一部		宇都宮大学学芸学部研究論		
集	言語研究	語学教育	国語（群馬）	国語学	国語学会会報
国語国文	国語・国文研究	国語と教育	国語と国文学	国文学	季刊
国文学	解釈と鑑賞	国文学研究	国文研究	国立教育研究所所報	
コトバ	ことばの教育	語文	サンデー毎日	史学雑誌	思想の科学

美葉之日本 実践国語 自然と人文 児童心理 社会学評論 週間朝
 日 自由国民 出版ニュース 少年少女 史林 新潮 新日本教育
 人文学報 人文研究 新聞用語研究 世界 七種の綜合文芸誌 中央
 公論 中学教育 出羽方言研究彙報 展望 天理大学学報 統計数理
 研究報 報告書 東方学報 東洋文学 雑誌所載国語記事 徳島県教育月報
 読書家 読書春秋 読書相談 図書教育 日本音響学会誌 日本学士
 院紀要 日本語 日本の言葉 日本文学 日本文学論究 ニュースク
 ール 人間 農業朝日 農業総合研究所 八学会年報 一つの世界
 ビブリア 婦人画報 婦人公論 婦人之友 文学 文学界 文学研
 究 文学探究 文化と教育 文芸 文芸研究 文芸春秋 文書と能
 率 放送文化 放送文研月報 放送用語 法律時報 民族学研究
 文部時報 リーダースダイジェスト 立命館文学 レポート Rōmazi
 Sekai 6・3教室

C. 新聞記事の調査と切抜きの作製

開所以来、購読の新聞から関係記事を切抜くことはしておったが、本格的に調査にかかることとした。関係記事の過半は切抜きを作り台紙にはりつけているが、切抜き用のない新聞紙についてはカード目録だけ作っている。本年度に処理したおもな新聞名と出来たカードと切抜きの概数は下の通りである。

朝日	毎日	読売	東京	東京タイムズ	東京日日	時事	夕刊
毎日	夕刊朝日	夕刊読売	日本經濟	毎日小学生	サン	朝日	
(大阪)	読書	図書	全国出版	教育	東京大学学生	教育大学	
学園(京都大学)							
昭和24年	カード	140点	(内、切抜)	86点			
" 25年	"	615点	(内、切抜)	579点			
" 26年(1~3月)	カード	330点	(内、切抜)	262点			

なお、京都・大阪地方の諸紙については、山田房一氏から、関係記事のあるごとに、切抜き用として寄贈を受けており、また、島袋盛敏氏からも、西日本新聞・中国新聞などにあった関係記事の切抜きを恵与された。

(高橋)

図書の収集と整理

前年度に引き続き、研究活動を助けるために、各種の研究書・参考書類および研究調査資料としての文献類を広く集めた。担当は所員大石初太郎である。

研究書・参考書としては、言語学・国語学・国語国字問題・国語教育関係の新刊物はもちろん、古書をもなるべく漏れなく集めることに努力し、また、社会学・心理学・教育学・民俗学・文学・統計学その他の関係諸学に属するおもな文献、各種辞書・年鑑・書誌類のおもなものも、大体漏らさず集めるように努力した。

調査研究資料としては、書き言葉研究のためのものとして、現代から明治時代にかけての各種形態の言語資料を集めることに心掛けた。なお、歴史的研究のための資料として、各時代にわたる国語古文献の収集にも及んだ。

また、新聞・雑誌類は前年度に比べてずっと種類を増し、言語・国語関係の研究雑誌のおもなものをほとんど全部備え付け、現代語研究資料としても、各種の代表的雑誌を備え付けている。新聞も中央の代表的な新聞は全部入れ、寄贈によって入っている出版関係の新聞・大学新聞も数種ある。

本年度備付けた図書の数は、次の通りである。

単行本（教科書・学習書を含む）	3348冊（内、寄贈 672冊）
-----------------	------------------

逐次刊行物（新聞・雑誌等）	148種（内、寄贈 68種）
---------------	----------------

研究所開設以来備え付けた単行本の総数は 11,520冊である。

次に、図書の整理につき、本年度最も力を注いた所は図書分類であった。

まず、各種の分類法を比較検討した末、国際十進分類法 (Universal Decimal Classification) を用いることにした。それは、この U. D. C. が、

第1に、合理的な組織をもち、科学的分類法としてすぐれていること、第2に、国際的普遍性を持っていることによる。ただしこの分類法は、日本にはまだあまり広く行われていないため研究が不十分で、運用に困難な点があり、分類の実際に当って苦心した点が多く、しかもなお、担当者として意に満たない点が残されている。来年度更に補正を加えて、分類を完全なものにする計画である。

(大石)

昭和25年度寄贈図書

寄贈者名

図書名

単行本	()内は編著者名。寄贈者と同じ場合は省く。
朝日新聞東京本社印刷局	活字使用度数調査、熟語使用度数調査
天ヶ谷文男氏	当用漢字表精解
天野 俊也氏	若越の方言(石橋重吉)
池上 退藏氏	新国字と新日本語文法(東条博)
石垣 福雄氏	北海道南部地区における言語地理学的研究
井之口有一氏	滋賀原方言取調書(滋賀短期大学国語研究室)
今泉 忠義氏	現代国語法
印 刷 庁	本邦常用漢字の研究 第5回(中西篤・西堀寿雄)
内山 政照氏	農業の改良・普及に関する文献資料、その解説
宮内庁書陵部	図書寮本類聚名義抄
神戸外国语大学中国文化研究会	漢語の使用(鈴木虎雄)
国立教育研究所	小中学校教育課程の実態調査
国立国会図書館	定期刊行物総合目録
小林 国雄氏	現代漢和字典
斎藤 穀氏	音楽文化資料展覧会目録(国立国会図書館)
信濃教育会教育研究所	長野県カリキュラム試案 国語編(長野県教育委員会)
全日本国語教育協議会	国語教育の進路
中教出版株式会社	中等国文法別記 口語篇(時枝誠記)
刀江書院	国語教育講座 第3, 4巻
東京書籍株式会社	東書文庫教育図書目録 第2~4輯
東京文理科大学国語国文学会	古事記校異上の一問題(青木孝)
日本放送協会	各国地名の呼び方 アナウンス読本

- 農林省農事試験場 水稻豊凶考照試験
- 馬場 重徳氏 新制機械用語集（文部省学術用語分科審議会機械専門部会）
言語学文献総合目録草案（文部省学術文献総合目録分科審議会）
西班牙寄贈学術刊行物目録（文部省）
- 藤原 与一氏 私達の国語
- 平 凡 社 百科事典の知識
- 松宮 一也氏 面接調査法
- 宮本馨太郎氏 宮本勢助著作目録（宮本勢助） 八丈島三ツ根村方言集
- 民俗学研究所 民俗学辞典 本邦離島村落の調査
- 文 部 省 公文書の書式 昭和26年度使用教科書目録 文部省刊行物目録 文部省刊行物目録第2集 改訂ローマ字教育の指針
やさしい新聞文章 公用文の合理化 文部省刊行物表記の基準 国語問題要領 中国地名・人名の書き方の表
- AMERICAN DIALECT SOCIETY REPORT OF THE SECOND CONFERENCE ON PLANNING FOR THE DICTIONARY OF THE AMERICAN DIALECT SOCIETY.
- PRONUNCIATION OF THE FRENCH SPOKEN AT BRUNSWICK, MAINE (William N. Locke)
- A WORD-LIST FROM "BILL ARP" AND "RUFUS SANDERS" (Margaret Gillis Figh) COMMENTS ON WORD-LISTS IN PADS (James Nathan Tidwell)
- HARVARD-YENCHING INSTITUTE A GRAMMAR OF FORMAL WRITTEN JAPANESE (W. P. Lehmann Lloyd Faust)
CHARACTER TEXT FOR CANTONESE PRIMER (Yuen Ren Chao) CANTONESE PRIMER (Yuen Ren Chao)

教科書・学習書

- 株式会社秀英出版 小・中・高校国語科教科書 19冊
中等教科書出版社 中等国文法 文語編
- 東京書籍株式会社 小・中校国語科ワークブック 7冊
- 日本書籍株式会社 小学校国語科教科書 13冊
- 広島図書株式会社 翻訳読物「たのしいふゆ」外 2冊
- 武蔵野書院 新制大学向教科書・参考書類 15冊
- 文 部 省 小・中・高校各科検定教科書 554冊
- ローマ字教育会 ローマ字読物 "Kikai to Ningen" 外 5冊

逐次刊行物

- 愛知県教育文化研究所 研究紀要 第1号
- 朝日新聞社 新聞用語研究 第39~50号
- 茨城県教育研究所 茨城教育時報 第3巻第1号
- 宇都宮大学学芸学部 研究論集1号
- 愛媛県教育研究所 愛媛県教育研究所紀要 第2~4集
- 大阪市立大学文学会 人文研究 第1巻第5号~第2巻第3号
- 大阪大学国文学研究室 語文 第1,2集
- 香川大学学芸学部 香川大学学芸学部研究報告 第1部第1号
- カナモジカイ カナノヒカリ 第335~345号
- 関西大学国文学会 国文学 第1~3号
- 教育大学新聞会 教育大学新聞 第192~203号
- 教育図書株式会社 教育現実 第2巻第4~7号
- 京都大学人文科学研究所 人文学報 第1号 東方学報 第19冊
- 京都大学新聞社 学園新聞 第563~589号
- 京都大学国文学会 国語国文 第19巻第1,2号, 第20巻第1,2号
- 近畿方言学会 近畿方言 第1~8号
- 国学院大学国文学会 日本文学論究 第6冊
- 語学教育研究所 語学教育 第210~212号
- 国語学会 国語学 第4,5集
- 国語文化学会 コトバ 第9巻第2号
- 国語をよくする会 文書と能率 第12~19号
- 国民経済雑誌編集委員会 国民経済雑誌 第81巻第5号~第83巻第2号
- 国立教育研究所 国立教育研究所所報 第1~3号
- 国立国会図書館 国立国会図書館年報(昭和23年度)
- 光葉会 学苑 第113~124号
- 静岡県立教育研究所 教育研究所報 1950年第2号
- 静岡大学教育研究所 文化と教育 第1巻第4~10号
- 信濃教育会 紀要 第4集
- 春秋会 読書春秋 創刊号~第2巻第3号
- 仙台日本文艺研究会 文艺研究 第4~6集
- 千葉大学国語研究室 国語と教育 第1,2号
- 天理大学 天理大学学報 第1巻第4号~第2巻第1,2号
- 統計数理研究所 統計数理研究報 第1号 講究録 第5巻第6号~第6巻
第8号

- 東京女子大学学会 東京女子大学論集 第1巻第1号
 東京書籍株式会社 教育復興 第3巻第3～8号 季刊第1号
 東京堂 日本読書新聞 第532～586号 図書新聞 第45～88号
 出版ニュース 第129～157号
 特許序 商標公報 第25～55号
 徳島県教育庁 徳島県教育月報 第3巻第12号
 名古屋大学環境医学研究所 環境医学研究所年報(昭和24年度)
 日本学士院 日本学士院紀要 第6巻第2号～第7巻第1号
 日本書籍株式会社 教育手帖 創刊号～第12号
 日本放送協会 放送文化 第5巻第4号～第6巻第3号
 日本音響学会 日本音響学会誌 第6集第1号
 日本ローマ字会 日ローマ字世界 第40巻第3号～第41巻第3号
 日本民族学会 民族学研究 第1集
 農林省農業試験場 農事試験研究年報(昭和23年度) 農事試験場報告第66～69号 農事試験場彙報第4巻第2号
 放送文化研究所 放送用語 第9～18号
 穂波出版社 察記国語 第1巻第1, 2, 10, 11号, 第2巻第1～12号
 北海道大学国文学会 国語国文研究 第1号
 一橋大学経済研究所 経済研究 第1巻第2号～第2巻第1号
 文学研究会 文学研究 第5号
 松山商科大学商経研究会 松山経専論集 第7号
 文部省 文部統計速報 第33～52号 文部時報 第871～881号
 学校衛生統計調査報告書(昭和24年度) 教育調査 第1巻第1号～第2巻第7号 教育統計月報 第1～3号 びぶろす 第1巻第1, 2号 第2巻第1～3号
 興論科学協会 「新聞に關する世論調査」外, 調査報告書 49冊
 立命館大学人文科学研究所 立命館文学 第75～77号
 ローマ字教育会 ことばの教育 第11～19号
 早稲田大学国文学会 国文学研究 第1, 2集
 UNIVERSITY OF LONDON BULLETIN OF THE SCHOOL OF
 ORIENTAL AND AFRICAN STUDIES, UNIVERSITY OF LONDON VOL. XIII, Part 2, 1950.

庶務報告

A. 庶務の状況

(1) 建物

1948(昭和23)年12月創立当時から、宗教法人明治神宮所有の絵画館の一部を借用して使用している。実験室・研究室の設備をする余地がないため、研究上に支障が多い。

(2) 経費

昭和25年度の経費は、総額14,054,000円であり、人件費が5,933,800円、事業費が7,389,000円である。

B. 人的構成

(1) 職名別による暫定級別定数

職別	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3
所長	1										
研究部長		2									
研究員			3	8	2	4	4	5			
庶務部長				1							
課長					1						
一般職員							1	2	4	7	6
計	1	2	3	9	3	4	5	7	4	7	6

(2) 組織および職員

	職名	氏名	備考
国語研究所 研究第1部 第1研究室	所長 部長 主任	西尾実郎 岩淵悦太 中村通 柴田武一 飯田穂 北村豊 島崎義 石川暎子 山内る 非常勤 主任	1950.4.24~1951.3.31 1951.1.4~3.31
第2研究室	主任	金田一春 島袋盛 林大賢 永野大 野瀬穗 大賀秀 斎宇義 水谷靜 古井東 浅田惠 平井昌 上井義 塩入一 寺島義 興水時 草島健 森岡介 内田道 芦澤二 非常勤 主任	1951.1.4~3.31
研究第2部 第3研究室	主任	井幹元 甲元義 入島愛 塩島介 寺島二 興水介 草島時 森岡健 内田道 芦澤節 澤夫 非常勤 主任	1950.10.31
第4研究室	主任	高橋一 大石初太 有賀憲 広浜文 野元菊 友部雄	1950.6.30転出(東北大助教授)
資料室	(兼)	(岩淵悦太 高橋一 大石初太 有賀憲 広浜文 野元菊 友部浩)	1951.1.4~3.31 1950.4.15 1950.12.31 1951.1.16

庶務部 庶務部 会計課	部長 課長 課長	非常勤	武田 喜美子 大間 知篤三 関 善二 遠 藤 嘉基 藤 原 与一 細 井 房 夫 斎 藤 正二 真 取 正二 芳賀 清一郎 井 上 繁敬 上 原 孝 敬 加 藤 ふみ 杉 山 美智子 若 宮 博治 高 田 正治 江 頭 よね 新 藤 昭二 味 岡 善子 増 山 治子 宮 沢 幹郎 宮 伸 二 伊 藤 仲二 樋 口 敬治 三 浦 清伍 鈴 木 享 藤 山 健次 臼 田 治夫 渋 谷 正則 八 島 秀一 水 谷 志免 斎 藤 静志 宇 田 川 ユキ 塚 田 とし	1950. 5. 31 退職 1950. 4. 24~1951. 3. 31 1951. 1. 4~3. 31 京都大学教授 広島文理科大学教授 1950. 10. 11 1950.10.11転出(文部省調査普及局) 1950. 11. 15 1950.11.15転出(文部省調査普及局) 1950. 4. 15 退職 1950. 12. 15 1950.11.20転出(文部省調査普及局) 1950. 5. 31 1950. 4. 15 転出(文部省大臣官房 会計課) 1950. 4. 15 1950. 4. 15 退職 1950. 4. 15
		"		
		兼任所員		
		"		
		庶務部 庶務部 会計課	部長 課長 課長	

C. 内地留学教諭の受け入れ

昨年度に引き続き、全国都道府県派遣の内地留学教諭を迎えて、各研究室で研究の便をはかっている。次にその氏名・研究題目等を掲げる。

氏名	学校	研究題目	期間
中沢 政雄	群馬県前橋高等学校	国語のカリキュラムと単元学習の研究	1950年4月から 1か年
一谷 清昭	福島県教育委員会事務局	低学年の国語学習指導について	1950年9月より 5か月
西 忠義	北海道月寒小学校	読みの指導方法について	1950年11月より 3か月
長谷川金蔵	北海道網走第二中学校	国語学習指導のための読みの実態調査法	1951年1月より 3か月

D. 日誌抄

1950. 4. 8 浅井第2部長帰朝

4. 14 第9回評議員会。評議員の半数改選について、昭和25年度事業計画審議、その他。

5. 16 学力標準測定委員会（採集語彙の整理）

5. 20 第2回公開講演会（京都大学文学部において）。

あいさつ	所長	西尾 実
------	----	------

東京語の性格	所員	中村 通夫
--------	----	-------

国語教育について	兼任所員	遠藤 嘉基
----------	------	-------

日本語の系譜について	京大教授	泉井 久之助
------------	------	--------

国語国字問題の方向	評議員 (国語審議会会长)	土岐 善磨
-----------	------------------	-------

6. 2 } 6. 3 } 第4回文部省直轄研究所、国立大学附置研究所長会議

(東京において)

7. 11 語彙尺度に関する協議会開催

7. 14 第10回評議員会。昭和25年度研究についての経過報告、昭和25年度予算要求の経過、並びに地方調査員の委嘱について承認、その他審議。

10. 20 } 10. 21 } 第5回文部省直轄研究所、国立大学附置研究所長会議

(京都大学工学部において)

11. 10 第11回評議員会。研究所運営に関する経過報告、鶴岡市および飯田市における言語生活調査についての中間報告。
12. 23 第12回評議員会。昭和25年度の研究状況について報告、昭和25年度の委託研究、並びに序舎について、その他。
1951. 2. 2 第1回所轄機関研究所庶務部長協議会（教育研究所において）協議事項
- A. 事業運営に関する事項（研究所の整備）
 - B. 職階制に関する事項
 - C. 研究員の身分に関する事項
 - D. 予算に関する事項
3. 16 第13回評議員会。昭和25年度研究経過についての報告、並びに研究計画・成果の発表について審議、その他。

國立国語研究所刊行書

- 國立国語研究所報告1 八丈島の言語調査
國立国語研究所報告2 言語生活の実態
—白河市および附近の農村における—
國立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞
—用法と実例—
國立国語研究所資料集1 国語関係刊行書目（昭和17—24年）
昭和24年度 国立国語研究所年報 1

昭和26年12月

國立国語研究所

東京都新宿区四谷霞丘
聖徳記念絵画館内
電話赤坂(48) { 0389
 2874

1950~1951

ANNUAL REPORT OF NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Researches from April 1950 to March 1951
Language Survey in Tsuruoka City, Yamagata Pref.
Language Survey in Iida City, Nagano Pref.
Analysis of Language Survey in Sirakawa City, Hukusima Pref.
Survey of Local Dialects by the Correspondents of the Institute
in Different Localities

Collection and Classification of Dialect Words

Semantic Analysis of Bound Forms ('Zyosi' and 'Zyodōsi')
in Modern Written Language

Analysis of Words in Newspapers

Analysis of Words in Magazines for Female Readers

Making of a Scale for Standard of Language Abilities

Vocabulary Counting of Individuals Who Finished Compulsory
Education

Experiment of the Differentiated Instruction of Language Arts

Experimental Study on the Efficiency in Reading

Making of a Scale for Standard of Understanding of Broad-
casting Language

Experimental Study on the Reading Speed and Understanding
of Newspapers

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
YOTUYA, SINZYUKU, TOKYO

1951